株式会社まちの灯台阿久根 御中

阿久根らしさを活かした観光拠点のためのデザインリサーチ

青果市場跡地活用事業　調査報告書

専修大学上平研究室

2024年1月19日

目次

調査の概要 / 目的 / 方法について …… 3

Part 1：あくねの体験観光資源（あくねのタネ） …… 20

Part 2 : 新しい観光拠点から生まれる11のストーリー …… 122

観光者としての思い出話 …… 146

調査の概要 / 目的 / 方法について

1.　この報告書について

1-1. 調査の概要

本報告書は、令和5年度阿久根市事業「青果市場跡地活用事業」に関する調査報告書である。阿久根旧港に隣接する青果市場跡地は現在現在空き地になっており、その活用にむけて観光拠点の建設が計画されている。今後、検討を進める段階での基礎資料となることを目的として文書化したものである。本事業は、阿久根市から受託をうけ、株式会社「まちの灯台阿久根」と専修大学上平研究室が協働して取り組んだ。

本報告書は、3つの視点を取り入れて制作されていることが特色である。

1）阿久根市を初めて訪問し、観光を楽しむ若者の視点
2）長年阿久根市に住む地元民の視点
3）デザインリサーチの専門家の視点

阿久根市に限らず、日本各地の多くの街が、重点課題として観光政策に取り組んでいる。しかしながら、観光を地元の人々だけでデザインすることは難しい。その地域ならではの「価値」は、近づきすぎるといつの間にか当たり前になり、見えにくくなってしまうからである。観光を考えるためには**、地域の文化を長年育ててきた「地元民」の視点と、その地が有する資源の価値を相対化できる外部者の視点、両側の立場を持つ人々が適切に協働すること**が重要となる。 特に、その地域の良さを言語化して伝え、現地の人々を力づけられる点では、たとえ大学生であっても、重要なアクターとなりうる。
こうした背景をもとに、上平研究室の学生が外部者（ヨソモノ）かつ若年層（ワカモノ）の立場を活かして、主体的な立場で調査と提言を行う。

1-2. 担当者一覧 / Members

リサーチャー：専修大学上平研究室,他（※ニックネームとして掲載）

ゆりゆり

きりは

めい

ゆーな

あかちゃん

りさ

まいまい

しゅがー

しおしー

もっちー

なっしぃ

てったん

ディレクション
上平崇仁（デザイン研究者 / 専修大学教授 / アクネ大使）

リサーチ協力
新井田統（デザインリサーチャー / KDDI総合研究所）
木村梨沙（デザインリサーチャー / KDDI総合研究所）

フィールドワーク指導
水上優（人類学者 / 合同会社メッシュワーク）

監修
石川秀和（株式会社まちの灯台阿久根）

Special Thanks
調査にご協力くださった阿久根市の皆様
ワークショップに参加してくださった阿久根市の皆様

2.　調査するフィールドについて

2-1. 青果市場跡地の概要

◉住所：阿久根市港町1番地
◉面積：2194.7㎡　＝テニスコート8面分程度

◉立地特性：昔ながらの漁港景観を有する旧港エリアに位置し、観光・商業施設及び公共施設が交差結節する位置にある。
・南側周辺に市役所や風テラス阿久根などの公共・文化施設
・北側・東側周辺には、飲食店や商店街が広がる
・すぐ横を高松川が流れ、道路を跨いだ先には旧港が広がり、周辺の視界も良好。
・自然と文化の距離が近く、観光拠点には非常に適したスペースである。

図1：旧港エリアの上空写真（赤字部分が青果市場跡地）

2-2. 活用事業に係る阿久根市の求める方向性

阿久根市から、跡地活用にあたって事前に決定された指針は、以下の5つである。

1）**「海」**を主要なテーマとする
2）「行政主導」ではなく「公民連携」で運営する
3）観光客がお金を払うだけの経験価値をもった、**「稼ぐ力」**を備えた場所にする
4）チェーン店ではなく、地元資本による**「地域経済循環」**の実現を目指す
5）観光客だけでなく、**地域の人も集える場所**にする

1）の「海」というテーマについては、阿久根市の基幹産業である漁業や地域資源とも密接な関係があり、また立地的にもぴったり一致しており、拠点のコンセプトともなりうる。

2）と3）の「公民連携」「稼ぐ力」については、税収に頼らず、単独で収益を上げられることは、持続的な経営のために重要である。

4）の「地域経済循環」については、近隣の人口の多い街に対しての阿久根市ならではの独自性となりうるだろう。チェーン店は、安定した商品の供給網で消費者への利便性は高いが、街の均質化につながりやすく、中央部に大部分の収益が流れる仕組みである。地域の人々の生産と消費のサイクルが循環するためにも、地元資本は重要である。

1）～5）を概観すると、市は固定的な建築物、いわゆるハコモノは想定しておらず、立地を活かした人と人（観光客と地元民含む）の交流を産む場としての可能性が期待されている。

3.　阿久根市について

3-1. 阿久根市の地理

まず、前提として、阿久根市の概要をみていく。阿久根市は、鹿児島県の北西部に位置し、北部は激流が渦巻く日本三大急潮の黒之瀬戸を隔て長島町と接し、東部は出水市、南部は薩摩川内市と接している。高松川河口の阿久根港を中心に古くから海・陸交通の要衝として海運業・商業などが栄えた。

3-2. 市への交通アクセスと諸問題

◉**鉄道：**阿久根駅は国鉄・JR九州時代には比較的発着列車の多い駅であったが、新幹線駅が設置されず、アクセス悪化によって観光客は減少している。第三セクターの肥薩おれんじ鉄道は、県市町村振興協会の助成金により5年間（2028年度まで）の支援が行われることが決定したが、今回が「最後の支援」となっており、その後の見通しは厳しい。

◉**高速道路：**2015年には南九州西回り自動車道が阿久根北ICまで開通し、薩摩川内市方面への工事も進んでいる。全線開通はおおよそ10年後の2033年頃とされている。これらの道路が整備されると、**空港や近隣の都市間とのアクセスは向上するが、一方では国道3号線の交通量は減る**ことが確実であり、街道沿いのビジネスは大きな影響をうける。高速道路によって人やモノの流れは促進されるが、同時に通り道となり通過されてしまう可能性も高いため、阿久根で途中下車するだけの〈目的〉を作る必要とされる。

◉**空港バス：**2023年冬現在鹿児島空港からのバスが一日9本運行している。観光客にとって本数は十分と考えられるが、出水市を経由した路線になっているため、揺れの激しい山道を含めて2時間ほど乗車しなくてはならない。そのため、車酔いしやすい人には敬遠されている。

◉**レンタカー：**鹿児島空港周辺に多くのレンタカー屋があり、比較的安く借りることができる。鹿児島市以外をまわることを主目的とする観光客は、たいてい旅の最初から最後までレンタカーやレンタルバイクで移動している。しかし自動車免許がない都市部の若者にとっては、真っ先に旅のプランの選択肢から消えることになる。

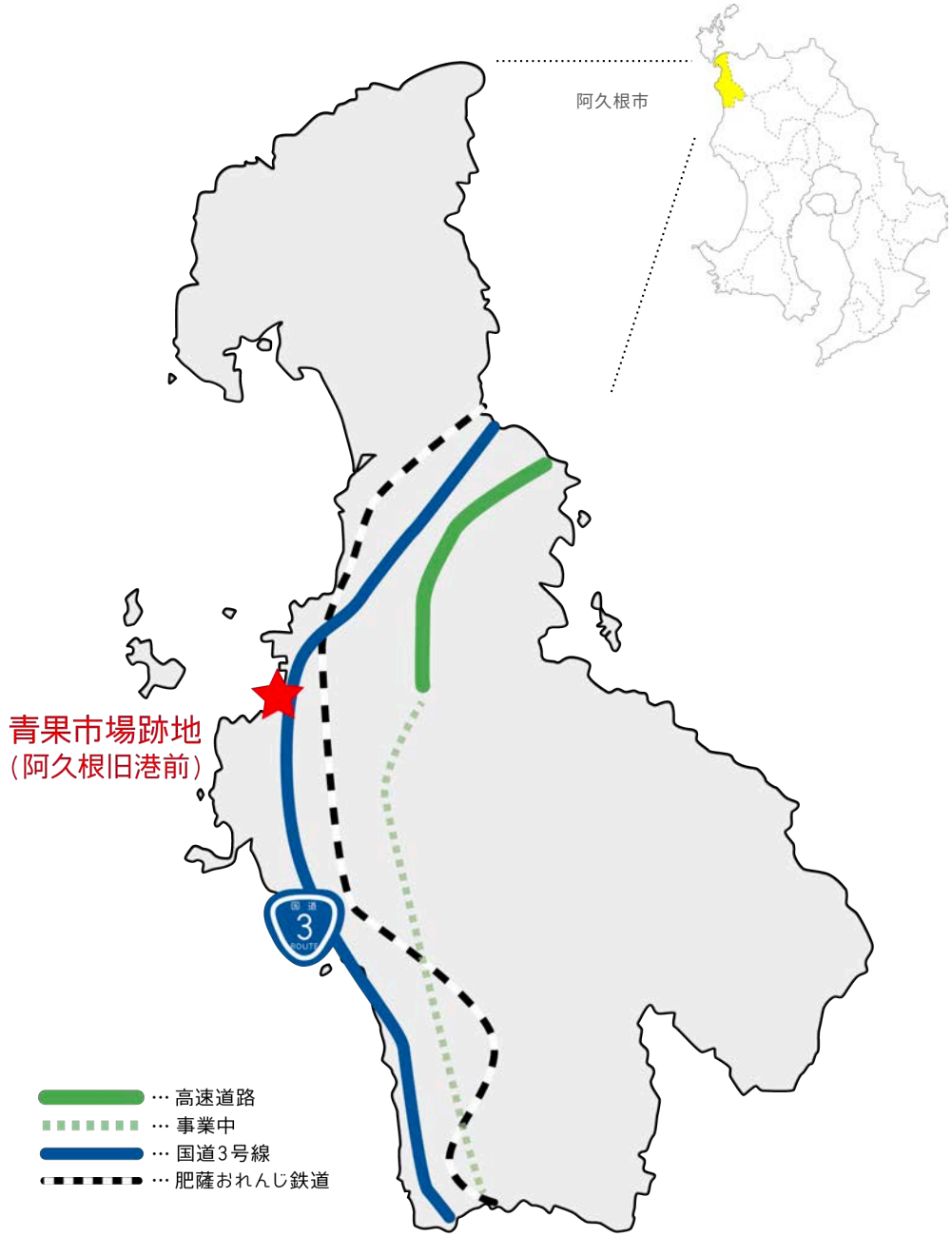


図2：阿久根市の地理

3.　市の現況と展望

3-3. 阿久根市の課題

◉基幹産業である漁業

北さつま漁業協同組合の数字に因ると、令和2年度（2020）は、年間水揚高 13,287トン、水揚げ金額21億円となっている。資源状況の悪化、魚価の低迷、燃油資材等の高騰などの影響で厳しくなっており、漁協組合員数も高齢化の傾向にある。また気候変動の影響で海流が変化し、南の海の魚が北上している。

◉人口減少と少子高齢化

2023年10月末現在、人口は18590人(市発表)。生産年齢人口率は男性51%、女性45%である。社会保障人口問題研究所の推定によると、令和42年（2060年）の人口は6623人と推定されており、市では10801人を目標値にしている。しかしながら、この数値はパンデミック以前の推定であることから、さらなる下方修正が予想される。

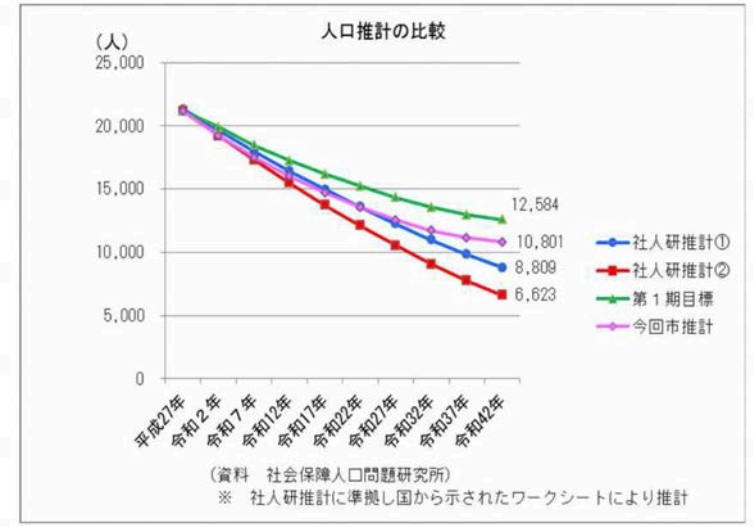


図3：阿久根市の人口推計

3-4. 外から見た阿久根市の強さ

◉ふるさと納税の活況

令和3年度以降、ふるさと納税の返礼品を600品以上追加し、寄附金額およそ5億円となった。鹿児島県内の自治体で伸び率No.1（令和3～4年度の納税伸び率）を達成し、阿久根産の返礼品が全国的に人気となっていることを示している。ふるさと納税の仕組み自体には賛否両論があるが、通常の小売ではなく、収益性を確保した新しい販路が開拓されている点は注目されるべきである。

◉住民の地元愛着度

人口と住民の幸福度は、直結しているわけではない。例えば、北海道の東川町は人口八千人強の極めて小さな町であるが、「Life（くらし）」のなかに「Work（しごと）」を持つという東川スタイルで知られ、まちを活性させる豊かな生態系が形成されている。それらは共感する移住者を呼び込み、住民のアイデンティティにもつながっている。

<u>阿久根市にも、自分たちの街を愛して特色ある活動を行っている市民や関係者も多く、観光客や移住希望者を魅了するだけの十分な観光資源のポテンシャルがある。</u>それによって住民の幸福度を上げていけるだけの下地は十分にあると考えられる。

図4：一般社団法人あくね夢のまちプロジェクト

図5：下園薩男商店　イワシビル

とおまわり
TOMAWARI

図6：小川紗良さんによるメディア〈とおまわり〉

図7：阿久根市職業体験型ワーケーションプログラム

4.　調査の内容と方法―何を明らかにするのか？

4-1. 阿久根の新しい拠点として、何が可能か？

◉「阿久根らしさ」とは？

青果市場跡地を活用して建設される場を、観光客と地元の人々がともに過ごせる“みんなの場所”という意味で、ここでは仮に**「パブリックスペース」**と呼ぶ。この調査報告書の目的は、この**パブリックスペースに、何を作るべきか？この問いに対する直接の解答ではなく、解答となりうる選択肢を広く洗い出すこと**である。

まず、観光客の視点からは、よくあるショッピングモールやアミューズメントパークが求められているわけではないことを押さえる必要がある。阿久根まで来て、わざわざ他の街にたくさん存在するものを体験する必然性はない。そもそも都市部からの観光客は、都市の日常にはない〈非日常の経験〉を求めて遠くからやってくるのだ。

つまり、観光客が味わう文化として、「阿久根らしさ」を際立たせることが重要であり、すなわち**阿久根らしさとはいったい何か**を明らかにすることである。具体的には、すでにあるものを掘り起こし、そこで育まれたものを味わい、共有可能な言葉にする作業である。

一方で市民の視点からは、「阿久根の文化」は基本的に当たり前にあるものであり、かつ仲間内で味わうものである。そして伝統的に阿久根市民は阿久根を観光地だと思っておらず、外から来た人と関わりあう場はこれまで存在しなかった。 それらを自覚的に他者と共有できる場があれば、そこに行く独自の目的になりうる。こうした点を考慮して、以下の条件で調査計画を立案した。

◉Who?―調査する主体

上平研究室の学生が市を訪問し、実際の観光客の立場として感じる一人称の視点を取り入れる。それによって地元民だけでは気づきにくい価値を掘り起こすこと、取材では語られにくい本音を聞き出すことを狙う。また、観光とは長期的な文化醸成でもある。中高年の価値判断の比重が大きい行政主導ではなく、半世紀後にも生きている可能性が高い、若い世代が参加して考えていくことに意味がある。そのためシニアリサーチャーの立場の3名（上平/ 新井田/ 水上）は、若手を支援する立場とする。

◉How?―調べる方法

アンケートなどの量的な調査では、事前に想定した質問にしか答えることが出来ない。数値で説明するることによって一種の説得力はあるが、「なぜそうなのか」を探ることには向かない。そこで今回は観光の〈質〉を探索することを狙って、質的な調査を行う。

1）フィールドワーク

学生たちが自分の身体で現地を味わう。

- ▶「自分たちでやってみる」
- ▶「関係者に話を聞く」
- ▶「自分の目で観察する」

などから感じたことを深掘りして解釈する。またリサーチツールとしてDiscord, CoMADOを取り入れることで、他者の視点や時間軸を持った視点を重ね合わせ、多角的に検討する。なお、専門的な視点を深めるために、人類学者の水上氏に同行してもらい、フィールドワークの際に「何をするか」、「調査したこととして何を残すか」に助言をいただく。

2）旅行者と市民による協働ワークショップ

上平研究室の学生たちが単独で調査するだけでなく、市民の思いを聞き、ともに考える場として、オリジナルな協働ワークショップを計画し、その結果をもとに分析する。

4.　調査の内容と方法―何を明らかにするのか？

◉When?―いつ調べるか

調査活動は、2023年5月～12月に渡って行った。
以下、5つのフェーズに分割して概要を解説する。

フェーズ1（5月～6月）：「訪れる人々、住んでいる人々、双方の立場から来たくなる、時間を過ごしたくなるパブリックスペースとは、何か？」に対して、全国各地で自分が経験した事例を参考に、学生それぞれで事前に考えを深め、準備する。

フェーズ2（第1期｜実地調査 6/29～7/3）：阿久根市役所からの説明を受け、青果市場跡地に公園を作るというプランに至ったかの文脈と目的を理解する。阿久根の重要なポイントを訪問し、経営者にヒアリングを行う。

フェーズ3（7～10月）：阿久根での実地調査をもとに、フィールドノートとしてまとめ、冊子化する。さらに全国各地の事例調査を通して集めた情報を整理する。「どのようなアクティビティ/ 施設 / によって、上述した問いへの解になるか？」学生それぞれが自分の仮説を立てる。

フェーズ4（第二期｜実地調査 10/24～10/30）：仮説をもとに、再度現地で調査を行う。阿久根市市民と協働でワークショップを開催する。

フェーズ5（11月～12月）：これまでの調査結果、全国の事例などを総合化し、提案内容をまとめる。報告書を作成する。1月に阿久根市役所へプレゼンテーションを行う。

◉Where?―調べる場所

阿久根市を訪れる人は何を目的としてやってきて、どんなことを楽しんでいるか、今後にどのようなポテンシャルがあるか、どのような制約があるかについて、ミクロ・マクロの両方から理解することが必要である。そこで、建設されるパブリックスペースがどのように位置づけられるかについて、以下の3つの視点から状況を検討する。

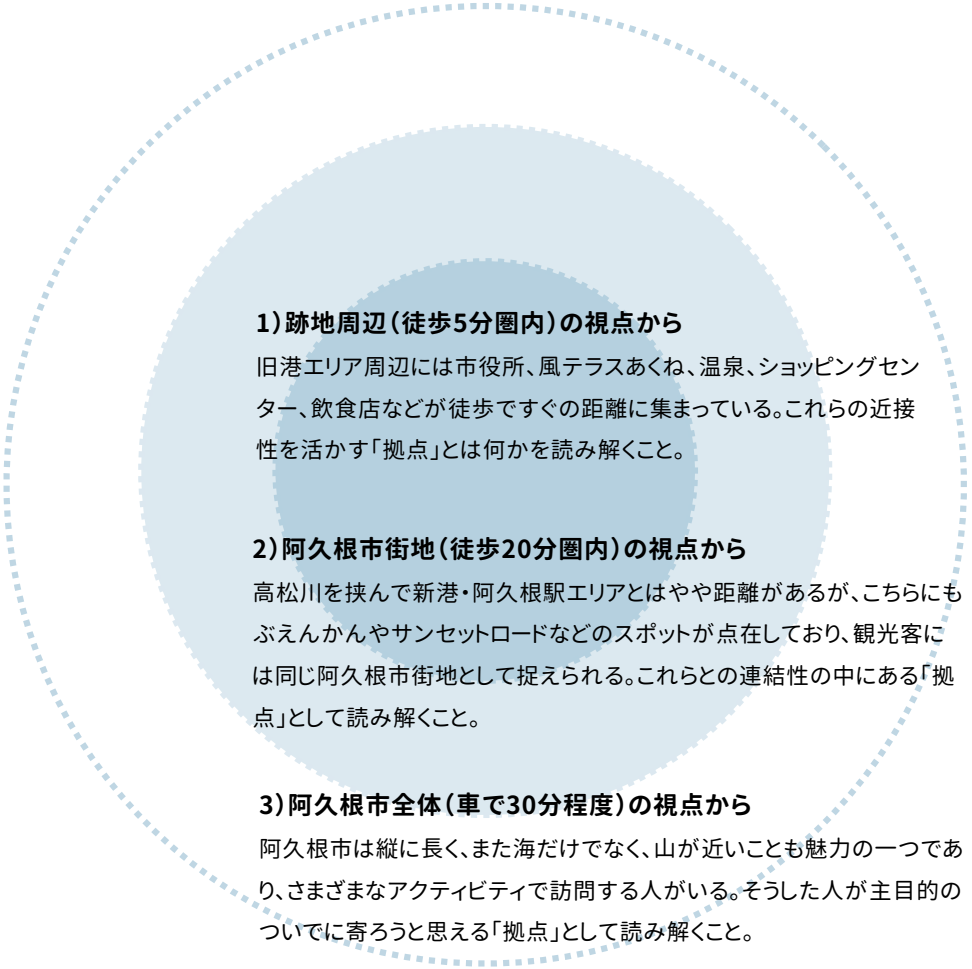


図8：調べる場所の3つの視点

5.　予備調査からわかったこと

5-1. 都市から来た若者たちにとっては、すべてが新鮮

6月の阿久根訪問において、阿久根市内を10数カ所訪問し、11人で分担してフィールドノートにまとめた。フィールドノートとは、調査したフィールドで得た事実、見聞きしたこと、感じた主観的な感情などを記録したものである。
このフィールドノートをまとめた冊子には、水上・新井田・上平による座談会が収録されている。その際、人類学者の水上氏が重要な発言をしている。現地において、何をどういうプロセスでみて、どう感じて、その時何を思ったか細かくノートを書く意味について、**「初めて訪れた場所の感情は、初めて訪れたときにしか発生しないからである」**と。
その湧き出た感情は、二度とやってこないのである。それほど貴重なものでありながら、我々はあまりその儚さを意識することなく、忘却していく。逆に言えば、それを丁寧に記述したものは十分に意味があるということである。学生たちのノートからは、阿久根の訪問で見たもの、聞いた話のすべてが新鮮で、彼らの価値観を強く揺さぶったことが詳細に記録されている。**旅先として、十分に刺激的であることの証拠とも言える**。
右に数名のノートから記述の一部を抜粋する。

図9：冊子「阿久根に投げ込まれた11個の小石」(210mm ×210mm, 120P)

総括して私は、阿久根は観光地ではないと思った。これは「何にもない廃れた田舎だ」という意味ではない。きらきら観光地ではない、人に媚びていないからこその暖かさと余白が、新しく心地よかったのだ。続く暮らしをこの場で繋げ営んでいくという姿勢・暮らしの中で労う文化・暮らしとして役割のない触れ合い。これらは観光のために物事を区切らず、人と生命が背筋を伸ばして共存しているからこその感想だ。

阿久根色とは何だろう。阿久根を知らぬ私たちに、興味と関心を持って受け入れてくれたこの土地は、懐かしさと新鮮さを持っていた。町の景観も、人々の暖かさも、とれる特産物も、ここでしか出会えないものばかりだった。一人に話しかければ、波紋が広がるようにもう一人、また一人と繋がりの輪が広がっていく。

阿久根は、キラキラした「観光地」ではなく、日常のありのままの姿でいる地でいいのだ。だからこそ、無理に新しいものを取り入れなくてもいいと思う。今在るものを壊してまでやる必要はない。市民には何もない地に見えるかもしれない。けれども、外から見れば、その「着飾らない場所」が魅力なのである。そこで生活している人の様子に触れられるのは、観光地ではできないことだからだ。それは、市民が作るアットホームな空気感があれば、それは可能なのではないだろうか。

5.　予備調査からわかったこと

5-2.「時間帯」を細分化して捉える必要性

阿久根におけるアクティビティを調査していると、一概に〈日中〉だけで捉えられず、**最適な時間帯はそれぞれバラバラである**ことがわかる。
例えば、県外からも多く訪れている釣り客は、イカを狙いに真夜中に、あるいは夜明けから日の出までの前後1時間程度の時間帯“朝マズメ”を狙ってやってくる。食事目的の訪問客は、「ぶえんかん」や「大野庵」に遠方から訪れているが、混み合うのはランチタイムである。SUPは夕方の日没時が人気である。スナックや居酒屋での語らいを求める人は夜にやってくる。

図10：日の出直後にはもう大勢が竿を並べている
阿久根旧港（民宿あくねの部屋より撮影）

図11：夕焼けとともに楽しむSUP
（脇本港より撮影，落合健二氏提供）

5-3. アクティビティが、連動していない

早朝(5:00~8:00)/ 朝（8:00～12:00）/ お昼（12:00～16:00）/ 夕方（16:00~19:00）/ 夜（19:00～）の5つの時間帯にざっくり分割して捉えてみると、それぞれのアクティビティはあまり繋がっていない。また、それぞれのアクティビティが別個に行われており、訪問客と訪問客、地元民との接する機会が少ない。こうしたことから、滞在時間が短くなっていることが想定される。（例えば、釣り人は九州各地の遠方から来て、直帰している）

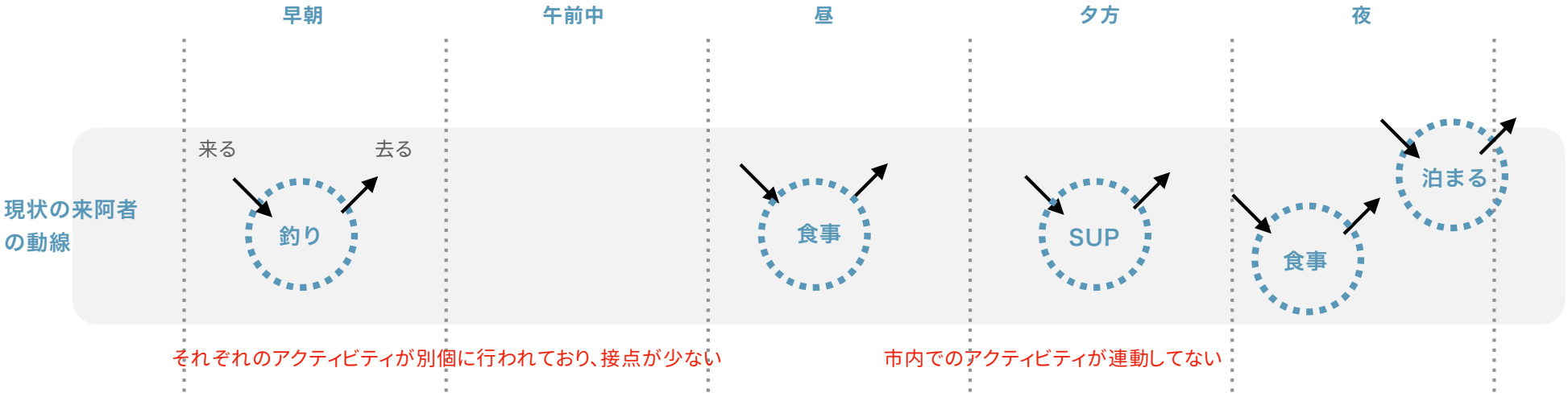


図12：アクティビティを時間帯でみる

5.　予備調査からわかったこと

5-4. 仮説：動線が重なる接点が〈にぎわい〉を生む

釣りやSUPは個別で行われることで、目的のアクティビティ自体は集中して楽しめたとしても、すぐ近くにあるはずの知らない世界と接する機会は少なくなる。
しかし、同じ場所に、それぞれのアクティビティの動線が重なり合う接点をつくる（図の黄色部分）をつくることで、「別の観光客」と「別の観光客」、あるいは「観光客」と「地元の人」、あるいは「帰省した同級生」と「地元の人」が交わる場となる。

こうした接点となる仕掛けは、よく見ればあちこちにある。例えば、下園薩男商店の〈イワシビル〉は3階のゲストハウスの宿泊客と1階の喫茶スペースに立ち寄った客が会話したり、2階で工場見学して、丸干し加工に対する理解を深めることができるように作られている。また「帰省した同級生」と「地元の人」の接点という点では、以前大丸町にあったファミレスの〈ジョナサン〉が思い出される。盆正月の帰省シーズンには、単に食事をするだけでなく、別々に訪問した同級生同士が遭遇し、近況交換する場となっていた。
今回想定される「拠点」が、滞在時間を延ばし、人々の〈出会い〉や〈にぎわい〉を作り出すのであれば、動線が〈混ざる〉ことによって相互の接点を作り出す機能が求められると言える。

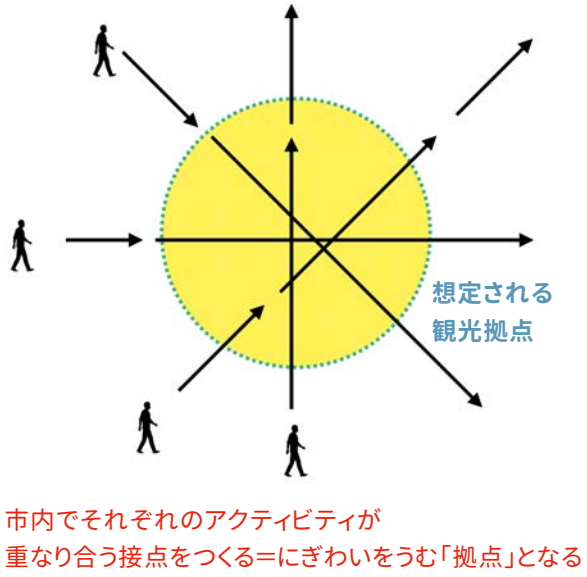


図13：重なり合う接点としての拠点

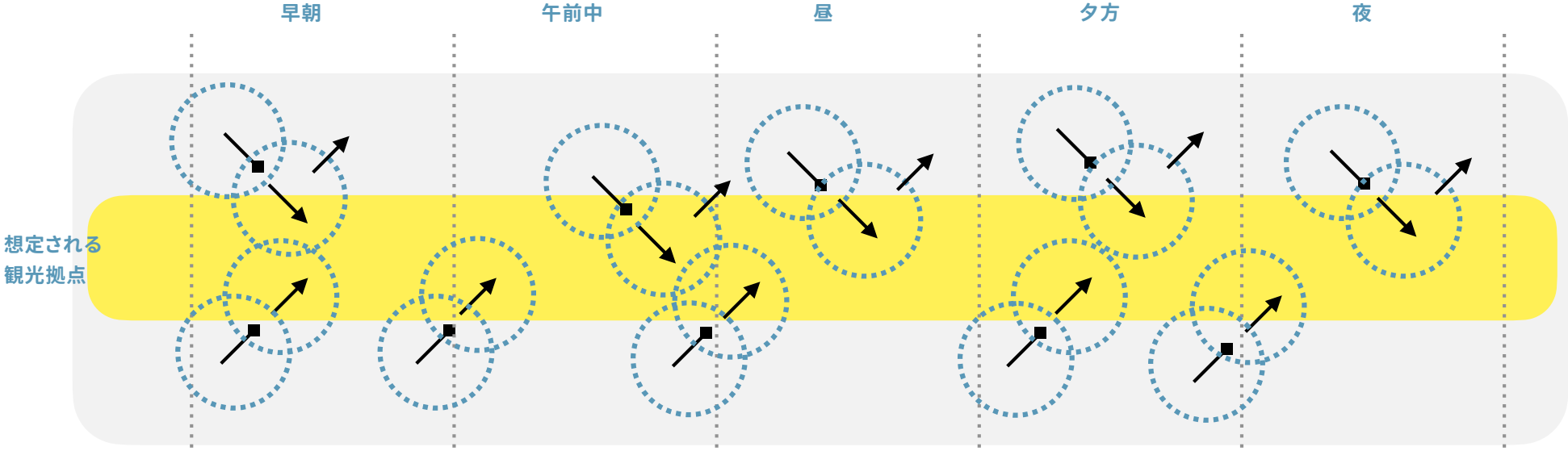


図14：重なり合うアクティビティ

6.　市民から教わり、共にアイデアを生み出す

6-1. 市民と観光客によるワークショップの実施

◉開催の背景

外部者が観察や体験を重ねても、長年住んでいる市民の思いや積み重ねられた歴史はなかなか見えてこない。そして立ち話でなく、市の未来についてじっくり対話する機会をつくるのは難しい。そこで**阿久根市の暮らしや文化ついて市民から直接教わり、住み続ける街としての阿久根を知る機会**を設定するために、ワークショップを企画・実施した。予備調査を経て、西廻り高速道路が開通して市へのアクセスが変わるとされる〈およそ10年後〉をヒントに、「10年後に訪れる2033年の阿久根市での過ごし方」をテーマに決定した。

◉ワークショップのねらい

ワークショップの目的は、**「ガイドブックに載ってない、阿久根の過ごし方について市民から教わるとともに、まだ無い新しい体験の組み合わせを考えること」**である。

ワークショップでは、前述した5つの「時間帯」と、観光体験に関係の深い「動詞」3つを組み合わせたテーマを設定し、阿久根にまつわる架空の新聞、「2033年阿久根新聞」を各グループで作成した。5つの時間帯には、「阿久根への滞在を単体ではなく、連続した体験にするため、複数の時間での過ごし方を発見したい」という目的がある。観光体験に関係の深い「動詞」のピックアップには、ガチャガチャを取り入れた。単に話し合いをするだけでは得られない偶発性を生み出し「これまで分断されていた行為（例：〈釣る〉と〈さばく〉 など）に文脈的な広がりを持たせたいという意図」が込められている。そして「市民と観光者が阿久根の未来に本気でワクワクし、アイデアが実現できる」という楽しさを共有できるような演出を考慮した。

◉実施内容

日時：2023年10月29日（日）10:00-12:30
場所：風テラス阿久根　交流室1
方法：4~5人の少人数グループ
参加学生（観光者）：10名＋上平＋木村（KDDI） / 阿久根市民：16名
合計参加人数：28人

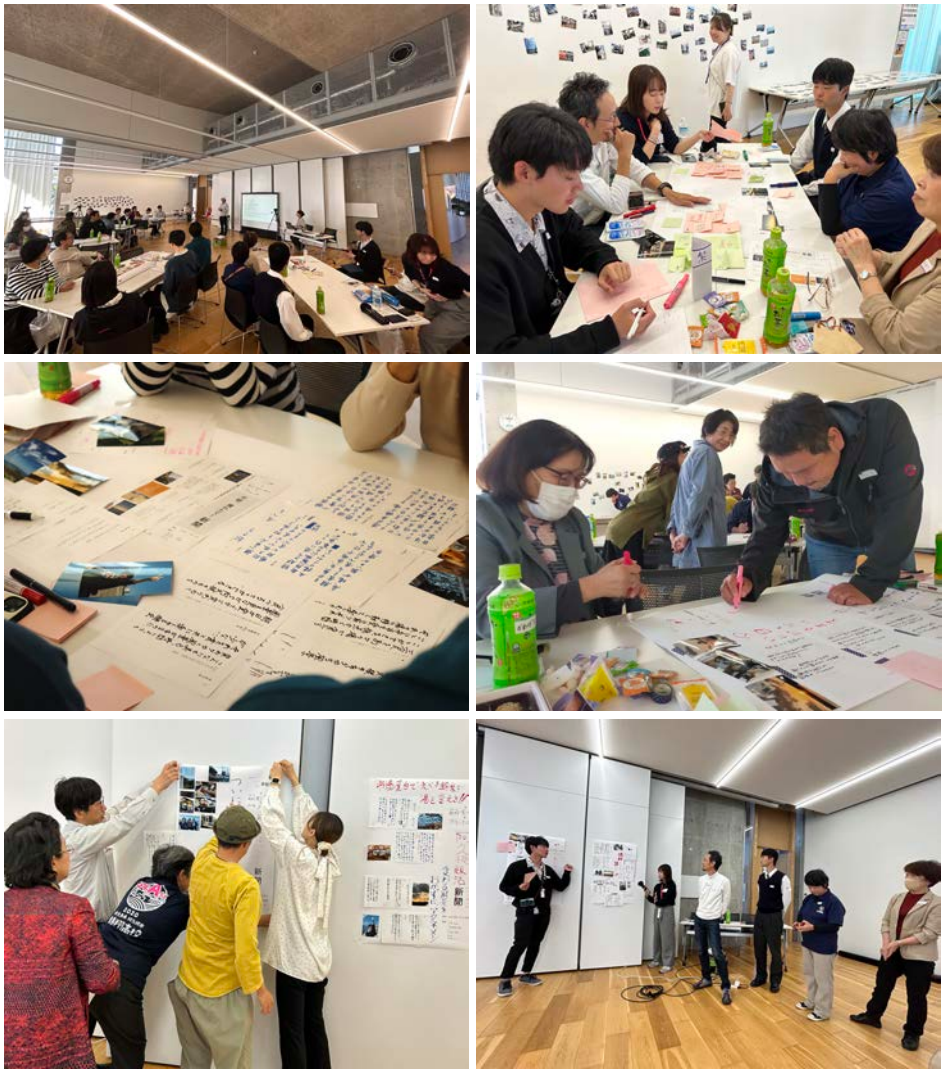


図15：ワークショップ風景

6.　市民から教わり、共にアイデアを生み出す

6-2. ワークショップのプログラム

市民と学生の混成グループ（5〜6名）をつくり、以下のプログラムを行うための素材を事前に用意し、ワークを実施した。

1. 自己紹介・テーマ設定

自己紹介後、グループごとに大テーマである「時間帯」を確 認。5つのグループが、それぞれ「早朝」「朝」「昼」「夕 方」「夜」のテーマを持つ。

2. ガチャガチャから連想トーク

偶発性を生み出すために用意したガチャガチャを使い、各グル ープ3つの小テーマを定める。時間帯と3つの動詞、それぞれか ら連想される事柄を付箋に書き出し、グループ内で共有する。

3. 話題に関連する写真探検

書き出した話題を元に、学生が用意した500枚の写真の中から、 関連する写真をピックアップ。阿久根の街並みとの結びつきを思い返し、テーマに関するイメージを膨らませる。また学生た ちの体験が写真を通じて語られ、新たな気づきを狙う。

4. テーマに合わせた新聞づくり

1~3で設定したテーマ・写真・対話を元に、各グループで未来の阿久根新聞を作成。発行日は「10年後の2033年」と設定してお り、未来の阿久根に対する希望や願いを語る。

5. 発表 と共有 / アイデアを元にした対話

グループの新聞を張り出し、どんなテーマ・内容になったかを 全体で共有。新しい阿久根での過ごし方や阿久根らしさが埋め 込まれた新聞を作成する。

6-3 生まれたアイデアの活用

ワークショップの開催は、市民と観光客との交流の場になったことに重ねて、時間帯や行動から広がる魅力の発見に繋がった。5グループから2づつ計10点のアイデアが生み出された。成果物となった阿久根新聞の事例を掲載する（左下図）。これらの成果物で得られた多数の知見は、内容を精査したのち、本報告書の中に活かされている。

なお、これらのプログラムはすべて上平研究室で設計したものである。上平研究室の一部学生は、ワークショップの専門家である中西紹一氏（株式会社プラスサーキュレーション / 専修大兼任講師）による「ワークショップ演習」と「質的調査法」を受講しており、ワークショップを活かした活動についての専門的知識を持っている。これらの実施報告書は別途PDFにまとめられた。（右下図）

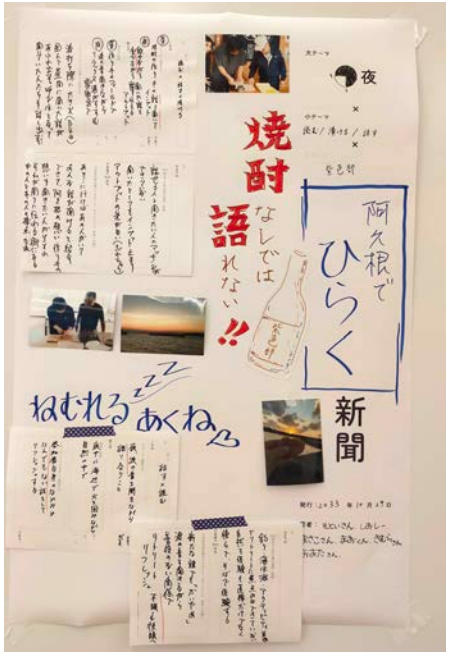


図16：成果物「阿久根新聞：夜の巻」の例

図17：ワークショップ
「みんなでつくる!2033年の阿久根新聞!」
実施報告書（15P）/ 運営資料(56P)　PDFで作成

7.　分析の方法…動詞を用いた「タグ」化

7-1. 観光にまつわる「動詞」の抽出

◉強制発想法としての「動詞」

フィールドワークを行うとしても、滞在時間の制約から市内全域や四季の出来事すべてを調べることはできない。また観光客の視点では、阿久根の看板である「美味しい食事」や「美しい夕日」に比重がかたよりがちになり、それ以外に目がいかなくなる懸念がある。今回の調査では「埋もれている価値」を発掘することが重要であるため、できるだけ視野を広げて観察する必要があった。

そこで、観光体験に関係の深い「動詞」を、基本的な日本語から50個抽出した。右に一覧化する。経験の言語化の際にこれらを活用することによって、語彙を広げる「格子」となる。また、一覧化した際には**「タグ」**として出来事と別の出来事を関連づけることをねらう。

この動詞リストは、見落としやすい経験にも焦点を広げるという点で、言語化の際には一種の**「強制発想法」**としても機能する。

食べる	涼む	尋ねる	贈る	預ける
集まる	入る	書く	待つ	買う
飲む	味わう	眠る	聴く	読む
話す	巡る	育てる	学ぶ	走る
気づく	守る	助ける	浸る	写す
見る	料理する	乗る	重ねる	乾かす
安らぐ	親しむ	変える	釣る	歩く
温まる	創る	奏でる	祈る	迷う
遊ぶ	誘う	起きる	訪れる	泳ぐ
過ごす	染める	獲る	触れる	帰る

表1：観光に関係の深い動詞50個の一覧

7.　分析の方法…〈KA法〉の部分的応用

7-2. 価値モデリング技法〈KA法―Kawakita-Asada Method〉

◉KA法の本来的な目的

ユーザの日常生活のある行為に関する調査結果から、**ユーザの行為の背景にある“価値”を導出するための手法**である。調査から把握された定性的な情報を、分解・カード化・マップ化を通して導出された価値をもとに、新製品開発のためのコンセプト・アイデアのヒントを得ることになる。

◉特徴

紀文食品の浅田和実氏が2006年に開発し、消費財のマーケティング開発分野で注目された。数年後にUX研究者の安藤昌也がUXリサーチの手法として取り上げ、広く普及させる。広く行われてる文化人類学の川喜田二郎氏による〈KJ法〉と比較して、価値に変換している点で抽象化の焦点のブレが少ないことが特徴である。

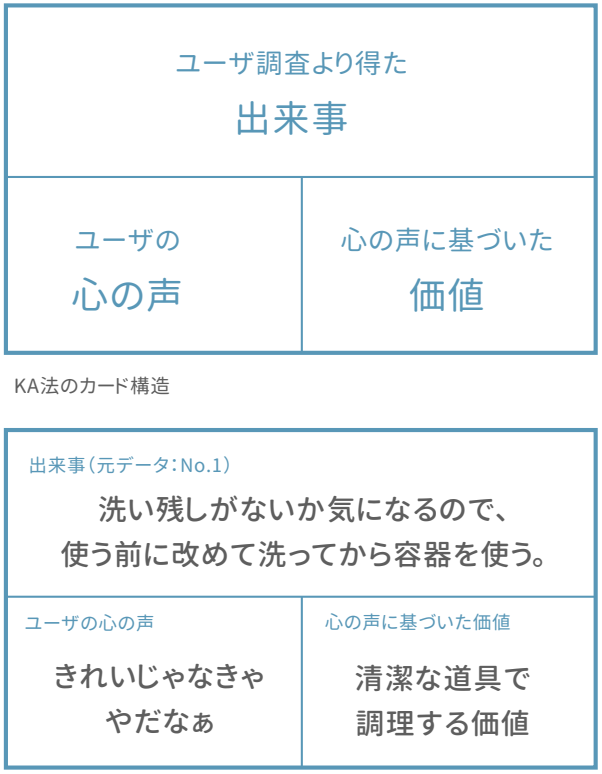


図18：KA法のカードの記入例
（出典：安藤研究室ノート http://andoken.blogspot.com/2011/11/ka.html）

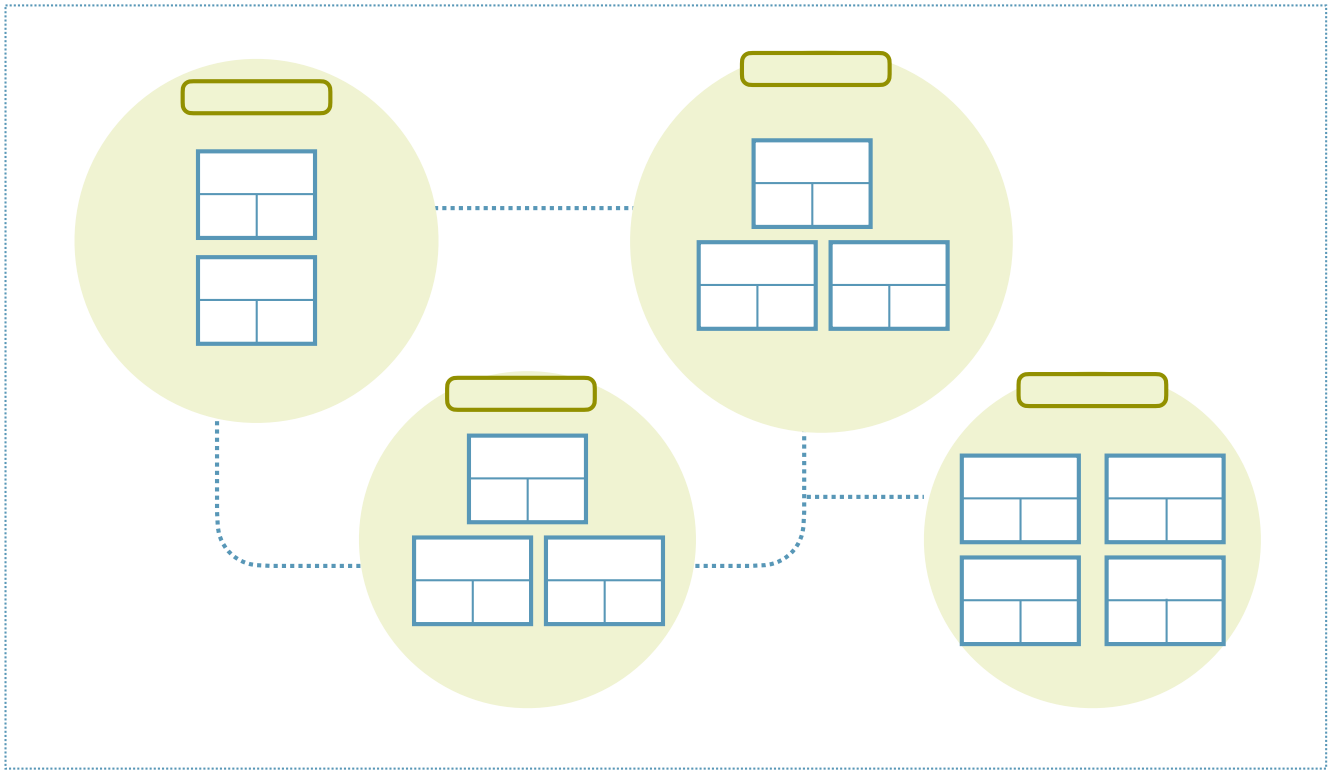


図19：通常はカードをマップ化してモデリングする

7. 分析の方法…〈KA法〉の部分的応用

7-3.〈KA法〉のセオリーと、今回の調査の相違点/ 応用点

◉観光客は「ユーザ」ではない

KA法は、もともと消費財のマーケティングのためのユーザ分析の手法として考案されたものであり、ニーズと現実のギャップを埋めるような製品開発色がつよい。そのため、基本的に「人の嗜好は変わらない」という前提に立っており、観光のように人の行動変容を伴うような体験にはなじまないところがある。たとえば、前ページのKA法カードの記入例にみるような「心の声」は、その人の中に経験的に形成された〈清潔感〉というモノサシを基準に判断にしている。つまり、**人の内部にある価値基準をいったん固定した上で、それを探り当てる**という手法であることがわかる。

◉価値観のモノサシは変わりうる

その一方で、綺麗好きの人でも期せずして既存の価値観が揺さぶられる機会に出逢えば、モノサシは簡単に変わりうることも我々は知っている。観光には、至れり尽くせりのパックツアーのように消費財に近いものもあれば、その人自身の行動力が試される冒険に近いものもある。都市生活者が阿久根市に来る体験は、おそらく後者だろう。未知の世界に足を踏み入れることで、本人すらそれまで想像もできなかったことを感じたりもする。**〈旅が人の価値観を変える〉というのは、非日常の場所に行き、普段と違う感覚モードになることで、価値観が（強引に）リフレームされるからである**。

◉カードの構造は有用

KA法は、出来事をそのまま記述するのではなく、焦点を整理してカードを記述する点にも特徴がある。**今回はチームで調査しているため、データを統合する際や全員で粒度をそろえるためには非常に有用である**と判断した。次ページに、応用した記入項目を示す。

◉モデル化のかわりに、「連関性」を出す

今回の調査は、拠点づくりの基礎資料であり、最終的な建設物のコンセプトを導くのは我々ではない。そのため、抽象化することは逆に現地の手触りが消えてしまうおそれがある。そこで今回はモデル化は行わず、収集した出来事の連関性を〈タグ〉と〈コメント〉によって出すことにする。

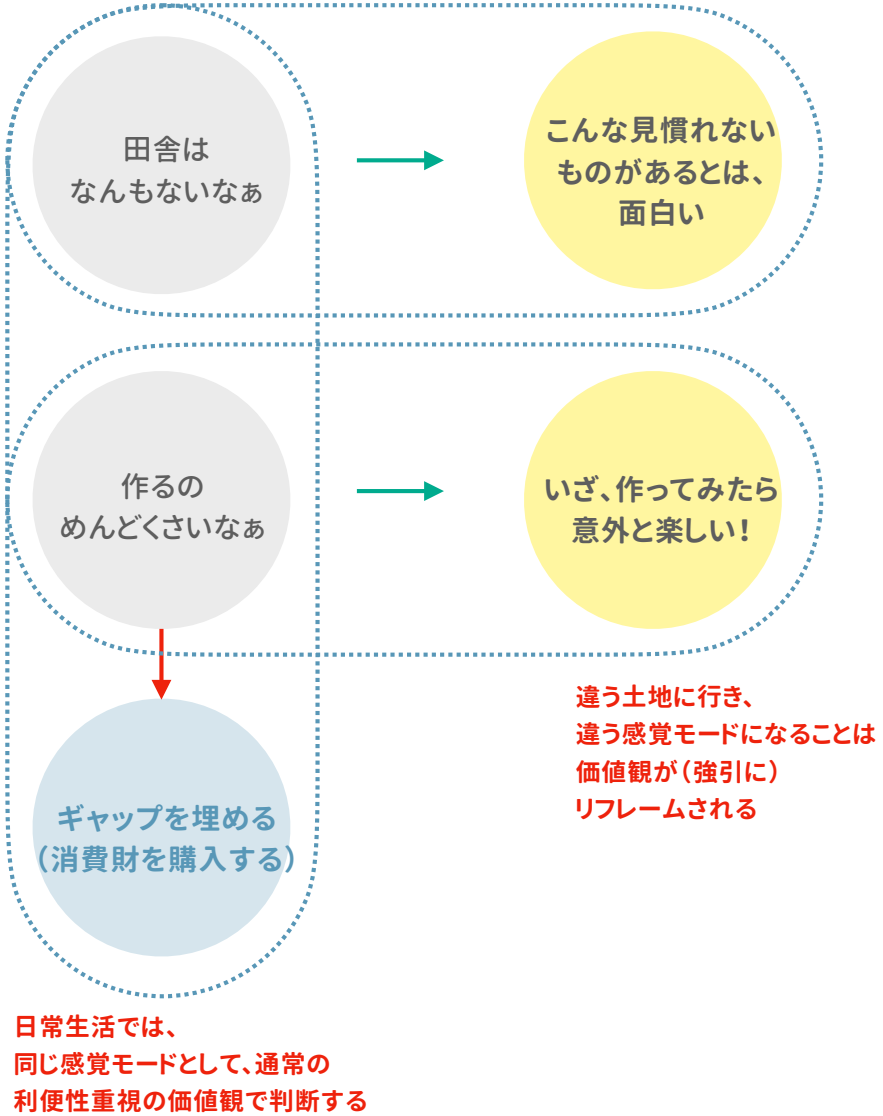


図20：価値観という「モノサシ」

8. 調査データの構造化

8-1. 調査データのフォーマット

◉カード化によって粒度を揃える

データをもとに、観光者の視点で阿久根ならではの価値と感じ、拠点づくりに有用であると判断した場所の要素をまとめた。KA法カードを応用し、独自にフォーマット化している。

◉〈タグ〉と〈コメント〉によって意味の連関性をつくる

モデル化は行わず、50個の動詞を〈タグ〉として用い、どのように具体例に応用できるかについては、メンバーによる〈コメント〉で接続させることにした。

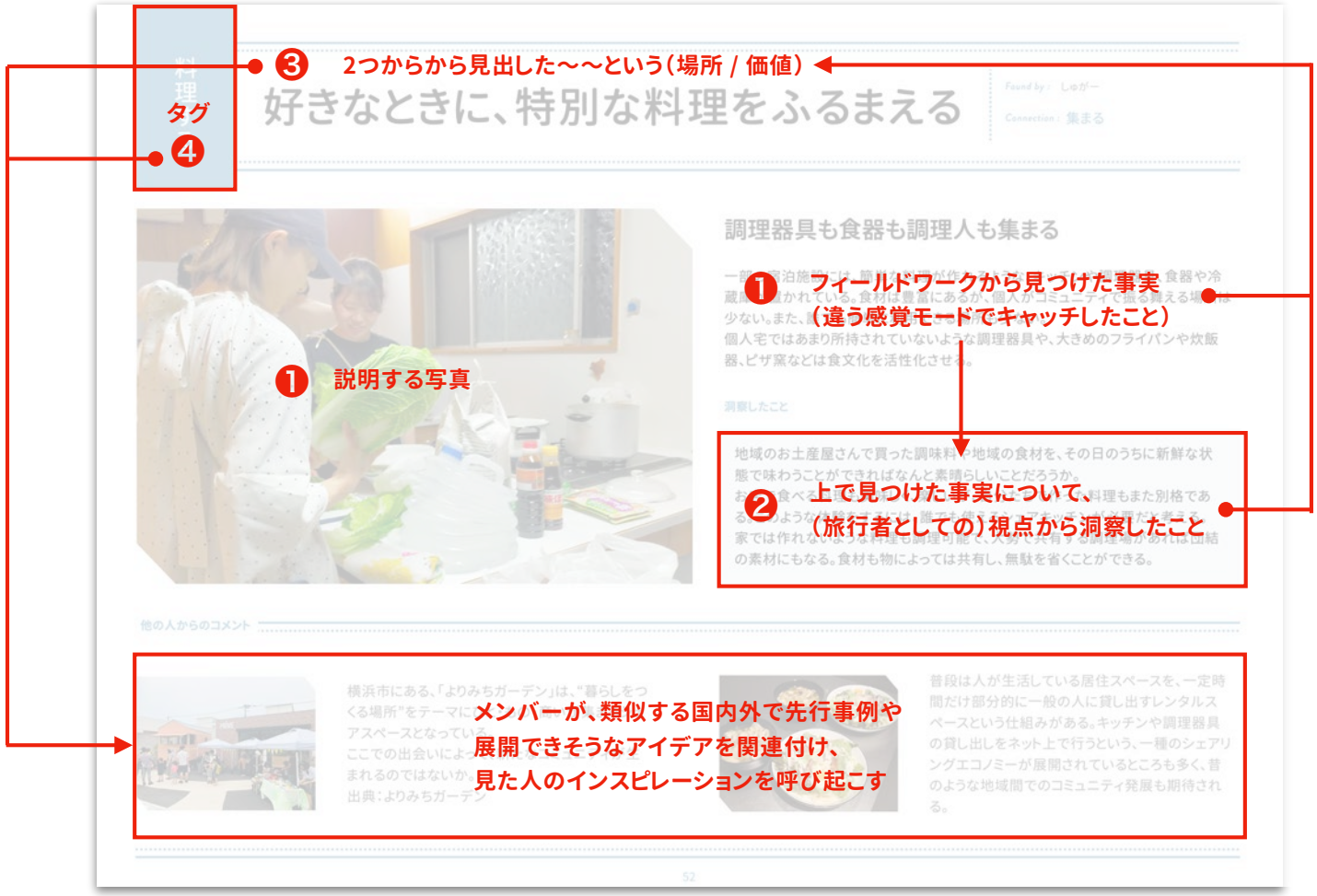


図21：調査データのフォーマット

9. 本報告書の構成

9-1.「100のあくねのタネ」と「11のストーリー」

本報告書は、ここまでの「調査の概要 / 目的 / 方法」に加えて、本題となるパート1・パート2の2部で構成されている。

◉Part 1：100個のあくねの体験観光資源（あくねのタネ）…P20-P122
初夏と秋に14名でおこなったフィールドワークのデータ、および秋に28人でおこなったワークショップのデータをもとに、**観光者の視点から「阿久根ならではの観光体験」として独自の価値を感じ、新しい拠点づくりのエッセンスとして役立てることができると考えた要素**を蒐集した。なるべく幅広い観点から、観光にまつわる50個の動詞を用いて統合・整理した100個にまとめたものである。
これらを、のちにデザインに活用されることを願い、花開く前の種子に見立てて、「あくねのタネ」と名付けた。

◉Part 2：新しい観光拠点のためのの11のストーリー…P122-P145
上平研究室の10名とKDDI総研の1名の若者たちによって、提案内容をストーリー化したものである。全員で蒐集した「あくねのタネ」を連結させて構成されている。「青果市場跡地」のままではイメージしにくいため、青果市場跡地・旧港をふくめて、つくられる拠点に**「あくねハーバー」**と仮の呼称をつけた。「港」や「隠れ場所」を意味する名詞であるHarborから取られたものである。
これらのストーリーはワークショップで取り入れた架空の新聞記事の手法と同じである。**フィクションではあるが、荒唐無稽なアイデアではなく、いま阿久根にすでにあるものを活用して提案すること、それぞれの「あくねハーバー」に引き寄せられる可能性を仮定しながら、SFと同じように、現実とつながる経験に立脚して書かれている。**

なお、報告書内の写真は基本的に上平研究室全員で撮影したものである。コメントとして国内外の事例を参照しており、サムネイルに図版の引用が必要な場合は、〈図版出典〉と引用元を記載している。またストーリー中のビジュアル作成には一部生成AIを用いている。

9-2. 報告書のキーカラー

本報告書のキーカラーは、すこし**灰みがかった青（#5897B7）**に設定した。この色は、阿久根新港の写真の海の色から画像処理ソフトウェアのスポイトで抽出したものである。

阿久根市のパブリックイメージは、一般的には鮮やかな青であると思われる。しかし、実際の阿久根には山間部も多く、その生活は単に空や海の青だけでなく、山の濃い緑がせめぎあう風景の中にある。

そしてあくねハーバー（青果市場跡地）は、高松川と大橋川に挟まされる場所に立地している。山間部から2つの川を経由して養分やミネラルが流れ込み、海中のプランクトンを育てている場の、まさに真正面である。**この濁りの中に、微生物たちを含んだ豊かな生態系が持続されることを願いを込めている**。

図22：キーカラー

Part 1　100個のあくねの体験観光資源（あくねのタネ）

阿久根は、こんなに誇らしい。
阿久根に根付く、未来のタネたち。

私たちの報告書では、調査で得られたエピソードを、
100個の**「タネ」**としてまとめています。

小さな種が、周囲の大地と馴染み合い、まだ見ぬ土地から伸びゆくように。
芽吹いた蕾が、雨やジョウロに役目を与え、明日の希望となるように。
実った果実が、暮らしの恵みや祈りを連れて、新たな栄養となるように。

生きる価値や文脈を動かし続ける力が、阿久根にはたくさん存在している…
そんな想いから、私たちは調査結果を「タネ」と名付けました。

タネには、体験や記憶の起点となる、50個の動詞が紐づいています。
1つ1つに関連事例やコメントを掲載し、タネの伸びしろをより大きくしました。
阿久根に根付いた可能性を探りながら、共にタネを育てていければと思います。

食べる

自分の手で命を頂く

Found by : きりは

Connection : 獲る / 料理する

明日を生きるための食事をする

初めて釣りをして、はじめて自分で捌き料理し、いただいた。
普段料理する際は、誰が釣ったのか、魚の大きさや種類に合わせて調理方法を考えることはない。なぜなら、作りたいものが決まっていたり、スーパー規格の魚しか購入しないからだ。魚が生きていたことを実感せず、自分が生きるために食べることを意識せず食べてしまうのは、機会的で味気のない食事なのだろう。

洞察したこと

普段の食事以上に美味しかったが、ただ美味しいだけではなかった。特に料理をする際にいつもよりなんだか心が動いた気がする。捌く時は、できるだけ綺麗に残さずにと無意識に動いていた。普段は自分のために料理することがあっても、作るものや規格は全て整えられ、一つの作業と化している。阿久根での料理は、単なる空腹満たしの料理ではなく、明日を生きるための大切な、互いの命を頂く時間になっていた。

他の人からのコメント

鮎の漁獲高全国1位の那須高原を流れる北関東屈指の清流那珂川では、やな漁が盛んに行われている。そこでは、鮎を掴み獲りして塩焼きにしてその場で食べることができる。手掴みで魚を捕獲することで命をいただくことを肌で感じられる。
[図版出典：那須高原リバーサイドパーク那須観光やな]（あかちゃん）

農泊体験サービス。このサイトの文を引用するが「自然と向き合い、自分で考えて行動することによって「**生きる**」ためのチカラも育まれます。」
普通に楽しそうですね。体験したい欲に駆られます。
[図版出典：農泊体験](めい)

食べる

刺身以外の楽しみ方を

Found by : あかちゃん

Connection : 味わう / 変える

よく食べるからこそ、色々な方法を

阿久根ではたくさんの魚が獲れ、それらが日々食べられている。その魚は獲れたばかりで新鮮で、刺身で食べるのももちろん美味しい。しかし生魚＝刺身ということのが多くある。それを変えようと思い、港町珈琲焙煎所では、予約制のサンドイッチに生魚を使用し、刺身以外の提供をしているそうだ。

洞察したこと

新鮮な魚は刺身で食べたいという気持ちはよくわかるし、私も新鮮なら刺身だと思っていた。しかし魚を食べる機会が多くある阿久根だからこそ、刺身以外の焼き・揚げ・煮るなどの料理があまりないと感じた。例えば魚の刺身を作って残った骨の部分をじっくりとあげた骨せんべいがあれば、骨まで味わうことができとても美味しく魚をいただくことができる。またその骨せんべいが、その日の釣果で種類や調理方法も変われば毎日楽しむことができるのではないだろうか。

他の人からのコメント

魚は骨が喉に刺さったことがあり、苦手だった。周りの小さい子も魚は嫌いという子が多い。例えば子供が好きそうなハンバーガーのパティを魚にしたりと、違う食べ方を提示することは「これなら食べれるかも！」と選択肢を与えてくれると思う。（めい）

鯖を生で提供できる海鮮丼専門店の今川商店では、鯖の骨せんべいも人気の商品だ。鯵の骨は寿司屋でもたまに販売されているが、生の鯖だからこそ骨せんべいも提供できる。身だけでなく、骨まで全てを味わい尽くすことができる。
[図版出典:今川商店](あかちゃん)

食べる

食の地域差を味わえる

Found by : しゅがー

Connection : 味わう / 親しむ

知らないけど、なんか知ってる味

連れて行っていただいた居酒屋さんで出されたご馳走たち。いい意味で居酒屋っぽさを感じない。空間やお店の人の優しさも相まって、まるで実家のお盆を思い出させる。カレーや唐揚げ、おでんまで出てきて、この大胆さが母の作る料理を思い浮かべた。どれだけ食べても美味しく、手間暇かけられているのが伝わってきた。
その愛情たるや、おかえりといってたらふく食べさせてくる第三の祖母である。

洞察したこと

外国に行っても、日本食を食べたくなる日本人は多いと聞く。どこに行っても、やはり自分を作ってきた食べ物は自然と自分の中に入ってくると思う。どこにいっても、顔見知りの味がするのは落ち着くものだ。
旅の中で、自分のよく知っている味と、その地域ならではのトッピングがあることにより、日常の中に非日常感を食で味わえるようになるのである。安心感とワクワク感が良い塩梅で込められており、疲労を癒してくれる。

他の人からのコメント

お雑煮やうどん一つとっても、その地域の地形や気候によって作られ方や味・食材は変わってくる。こういった、マニュアル化されていない調理法は、家庭の味と地域の味が異なることを教えてくれる貴重な場所なのだ。
[図版出典：居酒屋かあさん] (しゅがー)

八王子ラーメンは、同じ地域の中でもあっさりこってり、太麺細麺など、多少の特徴は違うものの、共通してどこか食べたことのある味という感覚になる。ただ、八王子を出るとこの感覚を味わうことができないからこそ、「八王子だから味わえるソウルフード」だと感じさせる。(ゆーな)

食べる

市販じゃない美味しさを味わえる

Found by : めい

Connection : 味わう / 安らぐ

誰かの家庭の味

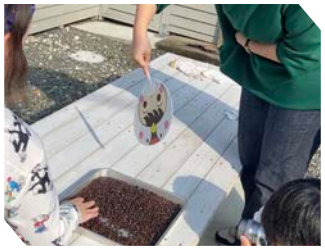
大石酒造を訪れた時に出していただいた、蒸かし芋と天ぷらのお菓子。パートの人が休憩時間にみんなで食べようと持ってきたものだそう。市販のお菓子を用意する方が、圧倒的にコストがかからないのに、素敵な人だと思った。お話を聞きながら、手に取るお菓子。私はついつい手作りの方に手が伸びてしまう。他の人にも残さなきゃという思いと、私がもっと食べたいなという気持ちが対立していた。

洞察したこと

今の時代、特にコロナ以降、人の手作りを食べる機会がめっきり減ってしまった。私自身、家にお邪魔した時くらいしか、誰かの手料理を味わう機会がない。だからこそ「職場」という思いもよらないところで、家庭の味を食べれることに嬉しさを感じた。「休憩時間、みんなで食べようと思って」そう言って手作りのものを持ってくるのはどのような背景があるのだろうか、、職場の人のことを考えながら作ったのだろうか。誰かを想う気持ちが美味しさを倍増させると常々感じる。

他の人からのコメント

伝統の味 家庭の味は師匠や親から受け継ぐ機会がないと廃れてしまう。このようなレシピを集めることは、今までの歴史を途切れさせないために重要なものとなるし、知らない土地を知る機会にもつながると考える。
[図版出典：農林水産省 うちの郷土料理]（めい）



地元の珈琲店にて。ここでは、この時、都心で行くようなカフェとは違い、コーヒーを自分で1からつくる工程を体験し、そしてそのコーヒーを味わうこともできた。市販で売っているコーヒーとは全く異なる、新たな美味しさを感じることができた。
（なっしぃ）

食べる

夕日を食す

Found by : あかちゃん

Connection : 安らぐ / 温まる

手作りと夕日のあたたかさ

阿久根の住人は夕日に特別な思い入れがあり、どこで見るのが1番素敵か、自分のお気に入りのスポットがある。若松商店の方は、オレンジロードから夕日とともに阿久根の町を見るのが好きだと話していた。日嗣屋で販売しているぼんたん最中はおばあちゃんの手作業のあったかさが味わえ、心安らぎほっとすることができる。

洞察したこと

ぼんたん最中を堤防の上で夕日を見ながら食べるのは、まるで目の前にある夕日を食べているのと同じような感覚だった。気づいたら夕日が綺麗だったという経験はあるが、この季節はこの時間・この場所で夕日を見たい、見にいくという体験はしたことがない。夕日という日常の1コマの中に特別感を見出し、それをかけがえのない1コマにするというのは新しいし、友達と語り合いながら、ゆったりと過ごすというのはなんという贅沢なことなんだろう。自然に目を向け、その一瞬一瞬に目を向けることがなくなった今だからこそ、夕日をゆっくり見るだけで涙が出そうになった。

他の人からのコメント

こちらの新潟にある旅館では、田んぼの中や雪の中などでお茶会を催されている。田んぼの景色も雪の景色も見慣れぬ人には、感動と癒しを届けてくれる。
[図版出典：SATOYAMA JOURNAL]（きりは）

山梨県にある金精軒では、名水で名高い白州町の綺麗な水を極限まで少なくした寒天で固めた「水信玄餅」。ちゃぷちゃぷ揺れるほどの柔らかく、透明な水信玄餅は、周りの景色を全部溶けさせ、その景色を食べることができる。
[図版出典:金精軒](あかちゃん)

食べる

自分たちで選んだ場所で食べる

Found by : めい

Connection : 歩く / 親しむ

地元猫と並んでご飯を食べる

お弁当の利点、それは自分の好きな場所で好きな時に食べることができるということ。阿久根には美味しい飲食店が沢山ある。店内の雰囲気を味うことも食事をする上で必要なことだ。しかし、店内に縛られなければ、予測していなかったことが起こるかもしれない。この時、お弁当を持って海沿いに座って食べていたら、野良猫がそばに来たのだ！普通に店内で食べていたらこのような体験はできなかっただろう。

洞察したこと

朝から経営しているお弁当屋さんがあればいいのになと、前期に訪れた際感じていた。朝から釣りやドライブをする人のお供や、いつもと違う朝ごはんで特別感を味わえたり、仕事のエネルギーチャージにしたりと、様々なターゲットに刺るのではないだろうか。また小さな弁当マップがあると、フリーペーパー配る・読むという構図で、地元民と観光客の交流ができると考えた。

他の人からのコメント

食べる場所を選ぶときに、座れそうなところを探すのが大変だったことから、テイクアウトと共にピクニック用の道具（レジャーシート、折りたたみ椅子など）レンタルもできるといいかも。手ぶら行って帰れることが気軽さを生む！
[図版出典：Picnic Here]（ゆりゆり）

簡単な荷物と椅子だけを持って、特に目的もなくくつろいだり、軽食をとったりすることをチェアリングというらしい。それプラス、弁当だけじゃなくておひつご飯とか味噌汁までセットだと嬉しいかもしれない。
[図版出典：『聞き書　千葉の食事』　東京湾奥の食]（しゅがー）

魚から始まる、集まりの連鎖

Found by : もっちー

Connection : 獲る / 訪れる

魚の集まりで人が集まる

早朝に行われる阿久根の港での競り・入札では、漁師だけでなく、魚を選別する主に女性や仲買や漁協の方が集まっている。選別する女性は、漁師側から給与を受け取り、朝に集まって作業をしている。また、人だけでなくサギや鳶などの鳥たちも、漁港の屋根の上で水揚げ作業のおこぼれを貰おうと律儀に揃って待機している。自動選別機に挟まった魚や、誤って床に放置された魚は、人が選別を終えたタイミングで一斉に鳥が攫っていくおかげで漁港も綺麗になっていた。

洞察したこと

イワシなどの魚たち、秋には秋太郎と呼ばれる芭蕉カジキまでもが獲れる豊かな海を持つ阿久根では、魚の集まりが、人を集めていることに起因していると感じる。選別のために集まった女性たちは、ただ作業して帰るのではなく、水揚げ開始までに女性たちで集まって食べ物を持ち寄り会話を楽しんでいた。魚の集まりが、地元の女性たちが集まって雑談をする機会を設けているのだ。自然の集まりが人たちの集まりへと連鎖していく様子を体験できたのは非常に感動的であった。

他の人からのコメント

ボランティアなどで行うゴミ拾い。地域の人たちが集うという意味では近しいものがあるのではないだろうか。普段行うことをイベントごとにするのも何かヒントになるのかもしれない。
[図版出典：清走中]（めい）

祭りは地域ごとに伝統があり、さほど交流がない人々も祭りのときは一致団結して盛り上げる。祭りには老若男女集まり、その様子を見ようと日本全国、海外からも多くの人が集まる大切な文化である。（きりは）

十人十色のイワシのかたち

Found by : ゆーな

Connection : 巡る / 書く

捉え方は人それぞれの「イワシ」

イワシビルの2階にある工場にある絵や写真。見学に来た幼稚園〜小学生くらいの年齢の子供たちを中心に、自分たちが思う「ウルメイワシ」を飾られている。自分たちが思うイワシは翌日、翌年・・・と違うものになるだろうから、近くでみて「そのときのウルメイワシ」がどのように感じたのかという記録になっている。

洞察したこと

同じイワシでも、色や形の工夫がそれぞれ異なるのが面白いと感じた。人によって感じ方がそれぞれ違うからこそ、観光で見学に来た人がどのようにイワシを記録するのかをまとめると面白い結果が出て、阿久根のイワシを広められるきっかけになるのかもしれない。

他の人からのコメント

魚拓の展示を見たことがある。その魚がどんなものなのかを気にするだけでなく、その人がどんな思いで色を写したのかが気になり、同じ魚の魚拓でも、全く違うストーリーを感じた。そして釣る先にも楽しみがあることを、初めて知った。自分の成果や体験を共有できることは、それだけで新しい発見になるのかもしれない。
[図版出典：クーリエジャポン]（まいまい）

旅に出ると、その場の空気を持って帰りたくなったり、目の前にある何気ないものが新鮮に見えたりする。「旅の標本カード」は、その発見や驚きを、標本のようにそのまま閉じ込めて相手に送ることのできるカードである。
[図版出典：福永紙工 旅の標本カード]（きりは）

食べ歩きもできる阿久根クレープ

Found by : まいまい

Connection : 味わう / 読む

ボンタン味も、海鮮味も、包んでパクリ

自分たちで作り味わったものの一つに、手巻き寿司がある。食材を選んで組み合わせてできた味を片手で楽しんだ記憶は、他のお店では味わえない特別な時間だった。片手で歩きながらでも食べられる巻物があれば、外やアクティビティー中にも手軽に食べられる。また今回はしょっぱい味しか食べられなかったが、ボンタンやお芋といった美味しい甘いものも食べられたら、絶対に楽しい。

洞察したこと

売り手も買い手も手軽に楽しめる巻物として思い浮かべたのが、クレープだ。甘いものもしょっぱいものも合わせられるクレープ屋さんがあれば、新鮮な名物になるのでは。また食べ歩きができるという特色を生かし、ラッピングや手拭きに一工夫するのも楽しいと考えた。使用された魚の出身地やおすすめスポットを印刷し、地図のように添えておけば、食べた後の動線にも繋がる。クレープだけでなく、ライスペーパーやトルティーヤで包む形式も盛り込めば、レパートリーも増えそうだ。

他の人からのコメント

日本の伝統的なお菓子である「たいやき」をオリジナルで作り食べることができる施設が浅草にある。本格的な道具を使い、たいやきの歴史まで学ぶことができる。
[図版出典：浅草たい焼き工房 求楽]（きりは）

クレープやフルーツサンドで都会でも有名な「ダカフェ」は、元々ダイワスーパーでの買い物を快適にすることから始まった。「夏の暑い日には、店の外で汗をかきながらかき氷を食べ、冬の寒い日には、寒さに震えながらフルーツサンドを待ってくれている」…そんなコンセプトで生まれたサンドやクレープは、ただの田んぼも絶景に変えている。
[図版出典：Daiwa]（まいまい）

偶然出会える

Found by : しゅがー

Connection : 話す / 起きる

強制的に「初めまして」の会話が始まる

阿久根に滞在している間、外から訪れた人同士の会話はあまり発生しなかった。旅先では、出会った人と協力したり競争したりすることはあまりない。
また、自分から話しかけに行こうという人も、年代に差はあるかもしれないが、あまり多くはない。だが、こういった普段とは違うところでまったく接点の発生しなかったような人たちと触れ合うことは、旅の中でも有益な行動だと思う。

洞察したこと

ボードゲームカフェという施設が存在する。そこでは、お店の人と一緒にプレイしたり、初めて出会った人たちと協力・競争したりして、時間を楽しく過ごすことができる。阿久根にも、こういった仕組みを取り入れることで、地域内外の人たちと交流することも可能になると考える。阿久根にまつわるボードゲームや昔からのあそびがあれば、それを楽しめる場にすることも考えられる。偶発的な出会いは新たな想像力やそこでしか発生しない経験・価値を生み出すだろう。

他の人からのコメント

「谷本せせらぎふれあいの道」では、道端に人形が置いてあり、そこから見知らぬ人との交流が盛んに行われている。高齢者から小学生までが集う場所で、急にそこらの琵琶をとって食べたり、そこで出会った人が同じマンションの人だったり…自然に新しい交流が生まれる場所は、心の栄養だった。（まいまい）

リアル脱出ゲームでは、複数人で挑戦するゲームがあり初対面の人とチームになる場合が多々ある。そこから、次のゲームを一緒にやったりコミュニティが広がることも。
［図版出典：リアル脱出ゲーム］（きりは）

何もなくても人が集まる

Found by : りさ

Connection : 誘う / 気づく

椅子がなくても人は座る

ホテルまでの帰り道、おばあちゃんが3人道端に座りおしゃべりをしていた。井戸端会議だなと遠くから眺めていたが、ここは井戸どころか何も無い空き地である。海も見えないし目の前は住宅。でも、その3人はそこに集まっている。一見何も無さそうに見える場所だが、ここは「ちょっと座れる場所」があり、「おばあちゃんが集まる場所」になっていた。

洞察したこと

3人がいた場所は丁度腰かけられる高さの石垣になっていた。ごつごつとした石は座ると痛そうだが、明らかに人の手で配置された平らなプレートが丁度3人分置いてあり、ここなら座ってもお尻が痛くならなそうだ。椅子が置いてあるわけでは無いし、井戸やバス停があるわけでもない。一見何も無いように見えた場所だったが、ここに来れば長時間座っておしゃべりできることをおばあちゃん達は知っているのだろう。そして何より、誰かがここに来ることを知っている。

他の人からのコメント

雨上がりの時には、手すりは傘掛けとなる。無意識に掛けたかもしれないが、環境（フェンス・傘の形状）が手を動かした(アフォーダンスを持つ)とも解釈できる。同様に「平らな台は物を置くことができる、傾斜した台は物を滑らせることができる」と自然に判断できるのが人間なのである。(もっちー)

阿久根の年末年始は神社で集まっていも焼酎を飲むという習慣があると地元の方から聞いた。神社でお参りするという目的がありながら、その目的が達成した後は何もなくても人が集まっているそうだ。（しおしー）

飲む

お金を払いたい水

Found by : あかちゃん

Connection : 味わう / 浸る

阿久根の川にも目を。

阿久根の海はよく注目されるが、川にはあまり目が向かない。しかし、阿久根の川はとても綺麗で、特に大川地区を流れる「平出石の水」の湧き水はとても冷たく地元住民も飲み水を汲みに来ている。実際に湧き水を飲んだが、美味しさが全く違う。そのお水を使って炊いた新米はいつも以上に美味しく、おかずがなくてもお米だけで食べたくなるほどだった！

洞察したこと

阿久根の海には自然と目がいくが、川にはあまり目がいかない。しかし阿久根の川の水は自然のまま飲め、山太郎蟹という大きなカニが住むほど綺麗だ。そんな阿久根の川に目がいかないのは勿体無い。ただ平出石の水を汲みに行くにはかなり危険な道を通る。そのため、湧き水を旧港付近で売ることで、「危険な道を通ることなく、安全に美味しい水を味わえるようにする」ということができるのではないか。

他の人からのコメント

静岡県を流れる柿田川付近にある湧水広場では、実際に水に足を入れて湧き水の冷たさを体験できる。また綺麗な水を利用した柿田川百年水豆腐や柿田川の湧き水を見られる展望台も人気で、水が観光資源の一部になっている。
[図版出典:柿田川名所湧水の道](あかちゃん)

この場所まで水を汲むのは地元民ではない私たちからしたら、道幅も狭く、本当にこの道であっているいのかという不安と共に命の危険を感じるとても危険な場所に感じた。この達成感は他にも変え難いものであり、阿久根に来なければ味わえないものであると思う。（しおしー）

飲む

オリジナルクラフト飲料が作れる

Found by : しゅがー

Connection : 重ねる / 気づく

飲む〈夕焼け〉

阿久根の特産品でもあるボンタンとコーラを掛け合わせた独自のクラフト飲料。酸味や甘味がほどよく感じられ、柑橘系の爽快感も相まってさっぱりした味である。
阿久根とボンタンの知名度をあげるため、さまざまなボンタンを使った製品が開発されている。特筆すべきは味だけではない、上から下にかけて時の移ろいを再現しているような見た目は見るだけでも感動する。

洞察したこと

複数の液体が組み合わさったドリンクは、それぞれの比重によってグラス内の配置が変わる。明るい橙と暗い橙が重なる様子は、阿久根で愛されている夕焼けのようだ。刻々とその姿を変え、わずか数分後には全く見えなくなってしまう夕焼けを、このボンタンコーラで再現することができる。透明感のあるボンタンのドリンクと、さまざまな色のドリンクを来訪者自身が掛け合わせ、多様な空や海といった自然のグラデーションを体現する、その時だけのオリジナルドリンクができる。

他の人からのコメント

元クックパッドの人たちが開発したRINDAというクラフトビネガー飲料は、「ノンアルコールでありながら、スパイスの香りと刺激でリフレッシュでき、それでいて味わい深いドリンク」として作られている。実際、非常に美味しく満足感を味わえる。(かみひら)

三重県にあるFLOWNALでは、食の守り神と呼ばれる伊勢神宮のおひざ元で「食べることを育てることで人を健康にしたい」という思いでコーラを作っている。シロップは飲料以外にも使えることで、ドリンク以外にも様々なものに掛け合わせることができる。
[図版出典:FLOWNAL フローナル](あかちゃん)

飲み比べをもっと身近に

Found by : しおしー

Connection : 学ぶ / 迷う

自分に合うお酒って?

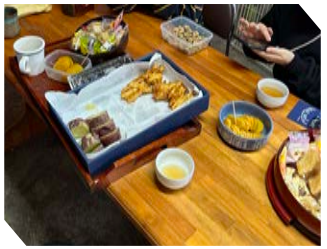
私は阿久根にきて、毎日のように飲み会をした。そのおかげもあり、いも焼酎の美味しさを知ることができたが、多くの種類を飲んでいるわけではなく、お勧めされる美味しいと言われているものしか飲んだことがなく、本当のいも焼酎を知らないのだと思った。しかし、大石酒造の見学の際に飲み比べをしたところ、やっと本当の、自分の大好きな味に出会うことができた。

洞察したこと

これだけいも焼酎と関わっていく中で一つ疑問を感じた。酔い潰れるまで飲んだ日もあったが、二日酔いはあまりしていなかった。あくねで過ごす最終日、終わりということもあり最後の飲み会でかなり飲んだが、あれだけ飲んで次の日に全く影響がないのは珍しいとも思った。二日酔いになりにくい、酔いやすい、芋の香りを楽しめて、どんな食事にも合う、そんな魅力的なお酒であることを、もっと世の中に広めることができないだろうか。

他の人からのコメント

愛媛県にある「10factory」というお店ではみかんジュースを飲み比べできるメニューがある。その場で比較するため、明確な違いと自分に合った味の発見を体験できる。、馴染みがないようなものでも気軽というだけで強みになると思う。
[出典:ORICON NEWS](めい)



阿久根でお酒を飲み比べさせていただいた時には、お酒だけではなくお芋やお砂糖といったものが一緒に用意されていた。迎えてくださった方の優しさだったが、お酒に強くない自分にとってはお酒以外の食べ物があることに大変救われ、弱いながらも美味しくお酒に触れることができた。お酒以外の特産品にも触れられると、弱い人も飲み比べしやすくなるのかもしれない。(まいまい)

飲む

自分で選んで飲める果実ジュース

Found by : まいまい

Connection : 味わう / 浸る

ノンアル・炭酸なしの、新鮮な味

阿久根の有名な飲料としてボンタンコーラや芋焼酎があるが、実は炭酸やアルコールのものが多く、飲む人を選ぶようなラインナップとなっている。お酒の席を積極的に楽しまない人は、用意された飲み物を一緒に飲めないような状況もあった。またジューススタンドやカフェで出される飲み物は新鮮なものを使われているはずだが、新鮮さが飲む側には伝わりにくい印象もあった。

洞察したこと

阿久根のふるさと納税には、デコポンはもちろん、スイートプリングやデコポンといった果実がたくさん並んでいる。阿久根の旅の中ではあまり見られなかったことが勿体無い。規格外個体を活用し、果実の味を丸ごと楽しめるタイプのジュースになったら、もっと阿久根市内でもこの味を楽しむことができるのでは。また単にジューススタンドから出てくるのではなく、自分で味や形を選んで飲める形式にすれば、阿久根のこの場所で飲む良さも倍増すると考えた。

他の人からのコメント

三重県伊勢市には、オレンジやグレープフルーツなどの果実を、皮はそのままの状態で中の果肉をジュースにしたものを味わえる施設がある。これは果物の果汁を余すことなく堪能できるサービスだ。[図版出典：伊勢志摩観光ナビ]（しゅがー）

デンマーク・コペンハーゲンの「カルチャーナイト」では、アップルジュース絞りを、0から参加者が体験できる。包丁でりんごを切るところから、大きな絞り機でジュース絞るところまで、一連の流れが並びながら進んでいく。全ての過程を共有することで、見ず知らずの人同士が協力し合い、喉を潤すだけではない、新しいコミュニケーションの場となっている。[図版出典：コ・デザイン]（まいまい）

話す

待つ人も一緒に過ごす

Found by : めい

Connection : 待つ / 奏でる

作り手も待ち手も楽しい時間を

キッチンと居間が隣同士であるため、話しやすい。待ち手も近くに居場所があるのでコミュニケーションがとりやすい。キッチンが隔離されていたら、それぞれが強制的に離れ離れになってしまい、会話が生まれにくい。きてんでの調理と塩屋ホステルでの調理を比べることで気がづいた。話しやすさは、相手との相性なんかもあるのかもしれないけど物理的距離も重要な要素だね。

洞察したこと

食を通して人は親密になるという一説を私は信じている。食べるときだけでなく、作るときの交流もあれば良いのにと考えている。待ち手も一緒に作れたらどうだろうか。つけ揚げの形を好きなように形成する。餃子の皮を包む。ピザの具材を乗せる。料理の手伝いをするワクワク感、自分が携わったものを食べれる嬉しさなど、幸せと楽しさを共有し合うのが良い。そこで阿久根の材料の知識を知れると嬉しい。地元民の知恵を沢山教えてもらって自宅に持ち帰りたい。

他の人からのコメント

香川県には和三盆の型抜きを体験できる施設がある。1対少数のワークショップ形式で、和三盆の成り立ちや特産品としての知識を教えてくれる。最後は作ったものをお店の人と一緒に談話しながら、抹茶でいただける。共に作り、食べることによって親密になれるからか、リピーターも多いらしい。(しゅがー)

広島のお好み焼き店では、鉄板を囲んで座るスタイルが定番だ。お好み焼きが出来上がるまでの工程を目の前で見れるから、一種のパフォーマンスを楽しむようで待ち時間もあっという間に感じる。また、店主と客の距離が近いからこそ、自然と話しやすい環境なのがいい。(ゆりゆり)

話す

ネットでは聞けない、地元を聞ける

Found by : しゅがー

Connection : 巡る / 学ぶ

阿久根コミュニティの充足感

阿久根駅の近くの商店を訪れたときに、お話しした市民の方々。阿久根を訪れた際、特に驚いたのが、阿久根の人々の、地域のお店や施設に対する認知度だ。どこで誰が何をやっており、その人がどんな人なのかまで知っていることが多かった。自分たちが住む街を理解し、一体感を持って生活しているという雰囲気を感じることができた。検索するだけではわからない情報を、みながたくさん教えてくれる。

洞察したこと

街の人が自分の住んでいる地域にプライドを持っているからこそ、こういった一体感が生まれているように考える。その施設を経営している人を知っているからこそ、外部の人へおすすめすることができるし、街について丁寧に説明できるのだと感じた。ネットで調べても、Webサイトも写真もレビューもない。そんな、ガイドブックにもネットにも転がっていない生の声が聞ける場所が阿久根には多い。
街の人みんなが、街の案内所として役割を共有している。

他の人からのコメント

北海道十勝の清水町では、町長が率先して民泊「まちごとホテル」を推進している。ホテルではなく、町の人の家に泊まることで、現地ならではの話を聞き旅行の幅を広げることができる。
[図版出典：Sittake]（きりは）

前行った場所で偶然話した人は、案外その場所の地元民だったりする。ふとした時に話すと、コミュニティの交流感を感じられる。話した内容は日常的なものでも、話した雰囲気は、それはネットでは聞けない、地元民ならではの情報だった。
（なっしぃ）

話す

秘密のスポットを情報交換できる

Found by : かみひら

Connection : 尋ねる / 獲る

「他の釣り人に阿久根を知られたくない」

阿久根旧港周辺で、夜釣りに来ている人々にインタビューした。北九州から交代で運転する車でやってきた来た3人組の車は釣り道具を収納するようにカスタマイズされていた。イカ釣りのためにわざわざ狙って遠方から阿久根に通っているという。彼らは「ライバルが増えて良いことがないので、阿久根がいい釣り場であることを広く知られなくない。誰も知らないからいいんじゃないか」という。

洞察したこと

釣り人たちは、密かな口コミやここで釣れた実績に惹きつけられてやってきているようだ。少し聞いただけでも、近隣の市町村だけでなく、広範囲（九州一帯）から阿久根に集まり、たくさん釣って朝には急いで直帰している。こうした釣り人の実態を市民は知らないし、地元経済にもほとんど貢献していない。彼らは釣れるスポットやタックルの情報を不特定多数には公開しないが、顔見知りになれば情報交換している。釣り人が交わる場は、阿久根にお金を落とすことに繋がるはずだ。

他の人からのコメント

インタビューした仲買人は、「個人の釣り人がどれだけ釣っても、阿久根港の水揚げ統計にはまったく記録が残らない。魚は貴重な資源なので、自分で食べる分は別にしても、何割かは港に申告するべきだし、そういう仕組みがほしい」と語った。（かみひら）

岐阜県千代保稲荷神社の近く、おちょぼ稲荷参道に商店街がある。どて煮が串に刺さっており、勝手に取って好きなだけ食べ後から精算する。道路が味噌で汚れないように、足元に段ボールが敷いてあり汚れ具合が美味しい場所の印なのは地元民しか知らない秘密の話。（きりは）

話す

時間を忘れてお喋りができる

Found by : めい

Connection : 学ぶ / 訪れる

「へー！そうなんですね！」

時間が余ったからふらりと立ち寄ったパン屋さん。工房の中では調理人の旦那さんが、レジ前には奥さんが、近くのテーブルには職場体験の女学生が。メンバーと「美味しそー」などと雑談をしていると奥さんが話しかけてくれた。気さくな方で、質問したら沢山答えてくれる。話が途切れることがなく時間を忘れて話し込んでしまう。このパン屋さんだけでなく、阿久根で出会って話してくれた人は、みんな色々な知識を教えてくれるので、話し込んでしまうのだ。

洞察したこと

有名な観光地に行く際、地元の人と話す機会はほとんどないと思う。主観かもしれないが、有名観光地は映えて話題性のある場所に訪ずれ写真をとり、美味しいものを食べて観光客同士で完結する。これも一つの楽しさであるのは間違いない。しかし地方を観光する楽しさは、地元民と話すことが多いに含まれると感じる。飲食をするだけでも、店員さんと雑談をしたり、おすすめの場所を聞けたりと、交流において少し積極的になる。そのような交流の場があれば良いのにと考えた。

他の人からのコメント

近所の駄菓子屋さんでは、お昼になると、店主さんが店先のテーブルに座り、おしゃべりを楽しんでいる。全く知らない人だが、会話ダダ漏れで話す姿が、道を通りがかるだけでも微笑ましい。入りにくい駄菓子屋さんにも親しみを持て、ちょっと声を掛ければ、通りすがりの私にもお喋りをしてくれた。店先のただのテーブルだが、漏れた会話が街の温かみになっているのかも。(まいまい)

武宮鮮魚店にお邪魔した際に、地元の人とお会いして、お話をしてくださった。他所者の我々に対しても非常に楽しそうに、これまでの阿久根の街並みや、どのような場所で友達と会っているのかなど、観光ではなく住民目線のお話が聞けたのは大変貴重で興味深かった。(もっちー)

気づく

ぶえんな魚を食べられる

Found by : もっちー

Connection : 触れる / 育てる

ぶえんな魅力のジレンマ

阿久根の海で船釣りをした後、漁業関係者の方から魚の捌き方を教わった。自分で釣り上げた魚を自分の手でその場で捌いて食べた魚は、格別な味がした。阿久根新港の近くには、ぶえんかんという新鮮な阿久根産の魚介類を提供している食事処がある。もちろん海鮮は最高なのだが、ぶえんかん以外に新鮮な魚を味わえる場所なかなか存在しない。

洞察したこと

我々は市の施設にて魚の捌き方を教えていただいたため、釣ったばかりの新鮮な魚を捌くことができた。しかし実際の阿久根漁港周辺ではなかなか釣った魚を捌く場所はない。私自身、滞在中に阿久根港周辺で10回近く釣りをした。漁港周辺で見かけた釣り人には20代や30代ほどの方々も多かったが、釣りに来ている人は釣りを終えるとそのまま帰ってしまう。そのため市内では漁港にいる釣り人のような若者たちが歩いている姿はほとんど見かけることはなかった。

他の人からのコメント

八景島シーパラダイスにあるうみファームでは、釣った魚をそのばで調理して食べることができる。魚によって調理方法が異なっており、どんな料理を食べられるかワクワクしながら釣りを楽しむことができる。時期によって釣れるものも異なるため、何度も訪れる理由になりそう。
[図版出典：八景島シーパラダイス]（しゅがー）

全国に支店がある「ざうお」は、お店の中にある生け簀で釣りができたり、寿司を握れたりというエンタメ性をとりいれている居酒屋として人気だ。釣れた場合はただオーダーするよりも魚の値段がちょっと安くなるというゲームを取り入れているのが面白い。ただ、魚をさばくのは技術が要るので、スタッフにおまかせですね。(かみひら)

気づく

地元民と旅行者で、「見え方」が違う

Found by : かみひら

Connection : 見る / 学ぶ

みな、たかぜ、しったか（馬蹄螺貝）

昼食時に立ち寄った「道の駅阿久根」の海産物販売所コーナーで、湯がいてある三角ミナを発見した。倉津港をベースにする福美丸水産の商品である。三角みなは全国に広く分布しており、磯辺で誰でも捕まえられ、阿久根市民には馴染みの深い貝である。これは潜らなければ手に入らない大きなサイズで、整った三角錐の貝殻に思わず見とれた。ネットから「貝殻だけでいいので」とお願いして注文したら、大型で真珠のように輝く貝殻だけを選んで送ってくださった。

洞察したこと

三角ミナを始めて食べる旅行者は、可食部が非常に少ないことに驚くが、立派な三角錐のかたちにも驚かされる。一方で、阿久根市民は誰でも知っているし、普通はまじまじと見ることもなく捨ててしまうものである。**同じものでありながら、地元民と旅行者で、貝殻の見え方はまったく違う。それは会話がうまれやすいとも言える。**でも地元民でも、ここまで大型の貝殻を差し出されれば、その希少な美しさや見えにくい“阿久根らしさ”に改めて気づかされるのではないか。

他の人からのコメント

直島の「かぼちゃ」のオブジェは、現地のアイコンとして機能している。夜になるとライトアップされ、黄色が一層幻想的になる。三角ミナはじめ、ウニやサザエなど他の海産物も阿久根らしい空間を演出する「かたち」になりうる。
[図版出典：ベネッセアートサイト直島]（かみひら）

その貝の中に入ることも考えられる。昨今の夏の高温化を考慮すると、日中に屋外で語り合う場合には日差しよけのパラソルが不可欠である。屋根の形状などを工夫して、こうしたセミプライベート空間を演出するテーマとなる。
[図版出典：Amazon]（かみひら）

気づく

〈声無き者〉との対話ができる

Found by : もっちー

Connection : 巡る / 聴く

人以外を考える精神性

我々が市役所で行ったワークショップにて、阿久根で暮らす人から「声を出す人だけが利益を得るのではなく、声を出さない、出せない人・自然があることを考えて、街を変えていく必要がある」と仰られていた。何か学問に携わっていたりそのような専門家ではない、いち市民の方がそのような発言をするというのは驚くべきものだった。

洞察したこと

阿久根の北側には、恐ろしいほど綺麗な砂浜が存在する。その海岸では、海亀が産卵しに来ることもあり、阿久根の生態系の保全のために、月に一回ほど地元の人が集まって砂浜の清掃活動をしている。山と海と川の全てが居住地から近い阿久根では日常的に自然と隣り合わせにあり、無意識にも自然と自分の繋がりを感じられる環境にあるのだと感じた。

他の人からのコメント

そうめん流しの大野庵の社長さんにインタビューをすると、「お店のある場所はもともと人間が住んでいる場所ではないのだから、夜はなるべく本来の住民である野生動物に場所を返す」意識で営業をしているという。食品の製造過程も工夫を凝らし、産業廃棄物は0を達成している。(もっちー)

近年では、川が人間に対して「意義あり!」と申し立てる時代が来ているという。自然が声をあげることはありえない話だが、フロリダ州では人間だけでなく自然にも権利があるとし、声を出せる人間と同じように扱っている。声無き者と対話することは、生きる世界の手直しにもつながるかもしれない。
[図版出典:WIRED](まいまい)

気づく

市民の想いを投影できる

Found by : きりは

Connection : 書く / 祈る

駅の短冊で見つけた光たち

6月下旬の阿久根駅には七夕に合わせて、2階まで伸びる笹の木と短冊があった。その中に「あくねだいすき いつも元気」と書かれている短冊を発見した。小学生低学年くらいの字だろうか、なんだかほっこりする気持ちになる。
他にもたくさんの願いや感謝の短冊が掛かっていた。

洞察したこと

しっかりと文字に起こして、自身の住んでいる地域を好きというのは、なかなか難しいと感じてしまう。しかし、この方のはっきりした言葉が普段から感じていることなのだろうと私は読み取った。
地域の人からそのように思われる場所は暖かく、素敵だ。

他の人からのコメント

広島県のおりづるタワーでは、来場者が平和への想い・祈りを寄せながらおりづるを折り、投入する「おりづるの壁」がある。言葉がなくても、鶴が積み重なってできる壁を見て、平和への願いを強く実感できる。（ゆりゆり）

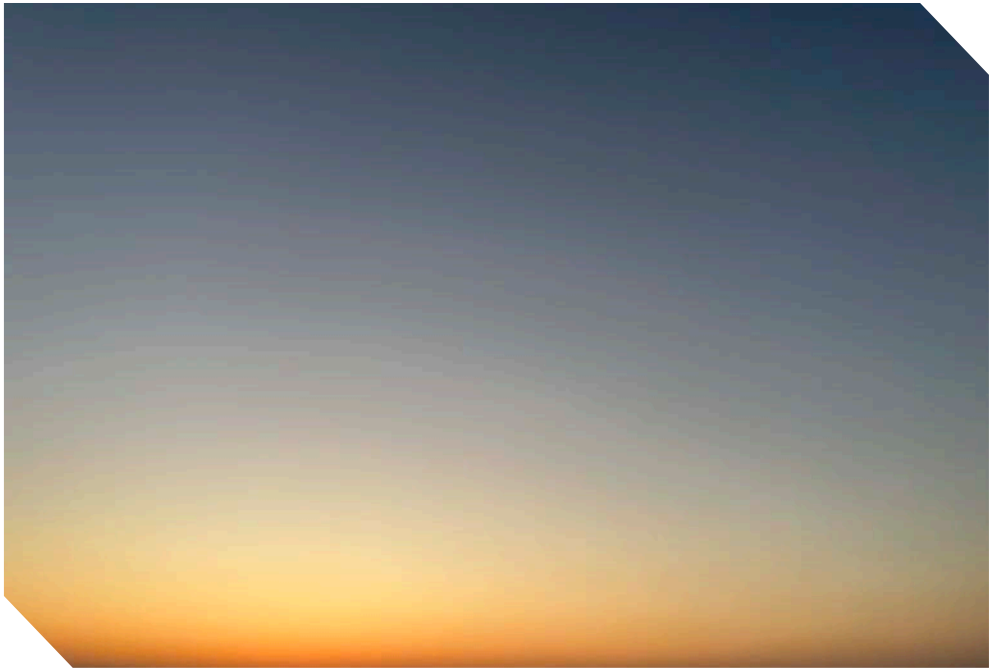
百貨店では、クリスマスの時期に願いを貼る壁があったり、1年後の自分に手紙をだしたりと思いを書く場所が増えるように感じる。人にとってなにかを書き出すことの意味は大きいようだ。
[図版出典：自由丁]（きりは）

見る

空のカラーパレット

Found by : ゆりゆり

Connection : 写す / 染める



毎日表情が変わる空色

阿久根市民の方に魅力を聞くと、口を揃えていうのは、「夕日」である。阿久根の夕日は毎日色味が変化する。ある時は青っぽかったり、赤っぽかったりする。この日の写真は、青っぽい時のものだ。写真で見るよりも、実物を見る方が何十倍も美しい。だからこそ阿久根の魅力となり、市民にとって誇りなのである。

洞察したこと

そんな変化の著しい夕日だからこそ、「昨日より〇〇が違う」「明日はどうだろう」というように考える楽しさが生まれる。もし、誰かと一緒にいるのならば、弾んだ話題にもなるだろう。誰かと同じものを見上げて話すのは、ロマンチックだ。また、夕方から夜の間という短い時間に変わりゆく表情を見て、その一瞬一瞬を見逃したくないという気持ちにもなる。

他の人からのコメント

SANAAによるJR日立駅は、水平線が一望できる地形を活かした駅舎の設計になっている。雄大な海原を遮らない空間と、特別にデザインされたフラワーチェアと合わせて、時間を忘れて滞在できる。ここで朝焼けをみるためだけに訪れる観光客も多い。(かみひら)

愛知県佐久島にある「おひるねハウス」は奥に海と景色が透けていることで、自分が風景に溶け込むことができる。名前の通りおひるねしたりのんびりして過ごすこともできる。
[図版出典：佐久島癒しとアートの島](あかちゃん)

見る

朝獲れの魚に魅せられる

Found by : もっちー

Connection : 味わう / 誘う

潤目で潤う港町

阿久根の港では早朝から競り・入札が行われている。7:00に港に見学をしにいくと、船の中央にある生簀から、見たことの無いような長さと大きさのたも網でイワシを掬い出している漁師の姿があった。すぐに選別担当の方達が手作業で大きさ別にトロ箱へ振り分けていく。近くで見せてもらうと、大きく潤った目に堤防からではまず釣ることのできない立派な身をしており、これは潤目イワシであると一瞬で分かった。

洞察したこと

印象的であったのは、魚が競り落とされると、即座に走ってフォークリフトに乗り、スーパーなどの出荷先や工場に向けて荷積みを開始している男たちの姿であった。古くからぶえんな（保存のために塩漬けされず食すことができる）魚で栄えてきた阿久根だからこその鮮度を守る思いを目の当たりにした。また阿久根市内にはイワシビルというイワシをコンセプトにしてショップとホステル・工場を統合した施設が存在する。まさにイワシと共に潤ってきた街であることの象徴だろう。

他の人からのコメント

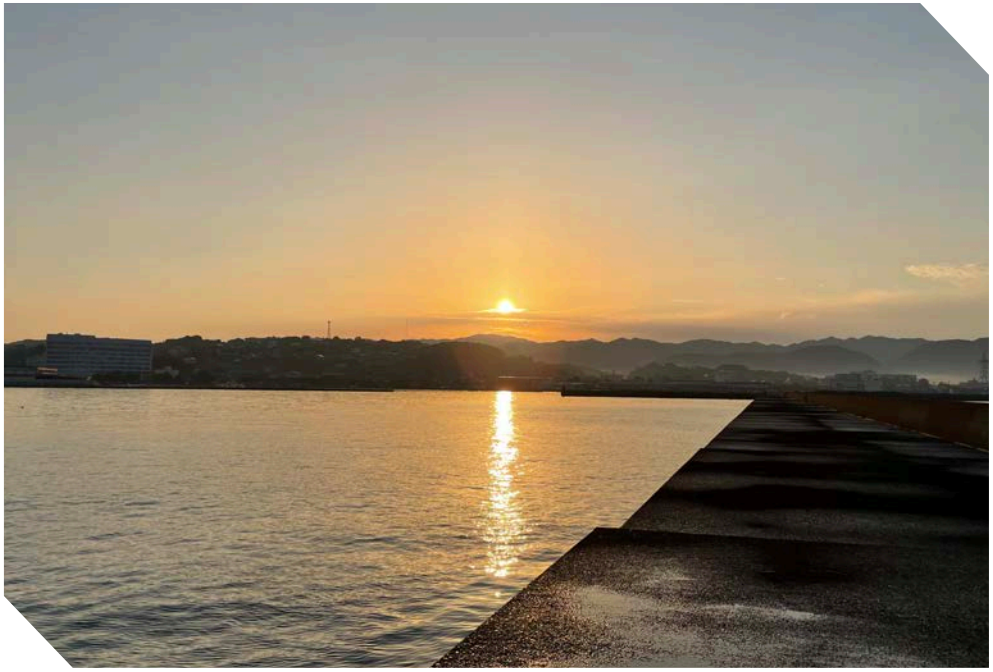
以前釣りに行った際、苦労して釣った早朝のシロギス。天ぷらにして食べた。その後、ふとした時にスーパーに立ち寄ると、自分が思っているよりも高い値段で売っているシロギスに遭遇。朝獲れの新鮮な魚は思った以上に価値があり、いつもより美味しく食べれるきっかけになるかもしれない。（なっしぃ）

いちご狩り体験をする横で、収穫されたての真っ赤なツヤツヤいちごが並んでいるのを見て感動したのと似たようなものだろうか。このいちごたちも農園の方の手作業によって店舗に並べられる。中々見る事の出来ない、裏事情を見ると商品がより美しく見えるよね。（めい）

〈野生〉のイルカが見える場所

Found by : しおしー

Connection : 眺める / 現れる



朝日を眺めに海へ

阿久根では山の方から日が昇る。海から朝日を見ていると、おじさんが現れた。何をしに来たのだろう。不思議に思っていると、数分後にイルカが現れた。水族館では見たことがあったが、野生のイルカというものを初めて見れて興奮した。誰かがいるということは、きっとそこに何かがあることを知っているからだろう。イルカがいる。人がいる。鳥がいる。見ることでさらに広がる景色がある。阿久根はそんな景色に囲まれている。

洞察したこと

人がいるということはその場所に何か魅力があるということ。それを感じる時間であった。しかし、イルカがいるのはそこに人が少ないからなのかもしれない。この場所は旧港からも見ることができる景色だと思うが、人が増えることでイルカの群れがいなくなってしまう可能性もある。イルカが見れるスポットとしても旧港を活用できそうであるが、考えていきたいところでもある。

他の人からのコメント

船釣りしているとイルカに出会えるという話。イルカが出没したら、釣り人は釣りをやめるらしい（お魚釣れないからね）。だけどその人は「イルカを眺めて仲間たちとゆっくり船の上で語る時間が最高だよ」と言っていた。いいなその時間。(めい)

伊豆諸島の御蔵島は、長年の世話によって野生のイルカが懐いていて、イルカといっしょにおよげる島として知られている。子どもたちのダイビングキャンプでは、ただ海の中で泳ぐだけではなく、海中のプラゴミや下水などの海中環境を体験的に学ぶ機会にしている。(かみひら)

疲れた身体ごと洗い流される

Found by : ゆりゆり

Connection : 食べる / 気づく

非日常の世界で過ごす

ここは行列を作るほどの大人気のお店「そうめん流し大野庵」である。山の奥深くに位置し、簡単には辿りつけない。険しい山を上ほど、まるでジブリ映画の世界に入り込んでいくように大自然の中へと入っていく。食事ができる場所の環境も、緑豊かな木々と激しく流れる大きな川、鳥の鳴き声など自然を存分に満喫できる。Wi-Fiが届かないので、より一層現実世界から離れた環境に身を置ける。

洞察したこと

ここに辿り着くまでには、相当のクネクネ山道を越えなければならない。それでもここに来たいと思うのは、「食べる」以外の目的があるからだ。ここは、日常の世界とは大違いの環境だからこそ、日々のストレスや疲れを解放できる。特に通信機器との分断は、情報社会に慣れ親しむ我々にとって大きな影響を与えるだろう。技術の発展により、完全に分断できる機会がないからこそ、一度離れられる場所を求める人も多いのではないだろうか。

他の人からのコメント

香川県にある地中美術館は、館内全体が地中にあり、独特な空気感を味わえる。写真は撮ってはならず、スマホも極力出さない。 一部では大きな音や声を出してはいけないなど、制約ともとれる場所があるが、デジタルデトックスができ、普段の喧騒や煩わしさを一掃できる場所でもある。
(しゅがー)

長野県にある戸隠神社奥社の杜は、随神門から約500メートルにわたって200本以上のスギの巨樹が続く杉並木がその象徴として広く知られている。歩いてゆったりと進むことで、自分の体が透き通っていくのを感じることができる。
[図版出典:戸隠神社](あかちゃん)

静かに輝く

Found by : あかちゃん

Connection : 親しむ / 過ごす

自然の輝きを楽しめる夜

阿久根で過ごす夜はとても静か。駅の周りも夜10時頃には灯りが減り、星を楽しめる夜が訪れる。きてんはより暗い夜を楽しむことができ、灯りをつけないと歩くのさえ怖く感じる。だからこそ、ぼーっと夜空を見るだけで楽しみに繋がり、流れ星を見るのが普通に感じるほど流れ星もよく見える。また、月の明るさがよくわかり、月明かりの綺麗さとそれだけでも十分な灯りになる。

洞察したこと

都会（特に駅周辺）では夜も明るく騒がしさが残るが、阿久根では朝が早いこともあってか、夜も早い。街の灯り（作られた灯り）で輝くのではなく、星や月の灯り（自然の灯り）が輝いていることで、自然本来の素朴な灯りに心を落ち着かせることができる。また静かな夜に静かに輝くからこそ、その夜という時間すらも人それぞれの楽しみに変えることができると感じた。笑い話をしたり、ゆったりとお風呂に入ったりそれぞれの楽しみを彩らせてくれるのも静かに輝くからこそだと。

他の人からのコメント

静岡県を走る岳南電車では、夜に富士を望む岳南電車の夜景電車を走らせている。電車の車内照明を消灯し、特別ダイヤで運行している。静寂な空間や暗闇に包まれた工場の夜景といった夜の気配を楽しむことができる。
[図版出典:岳南電車](あかちゃん)

早朝。車から景色を見ていると、どのライトよりも輝くものは、人工物ではなく、月だった。
車の窓を窓を開けて、静かで澄んだ早朝の新鮮な空気を味わい、星たちと共にこの月を見た瞬間は、ただ目的地へ直行する移動時間ではなかった。
（なっしぃ）

安らぐ

釣りの休憩を

Found by : あかちゃん

Connection : 眠る / 待つ

眠れる釣り

早朝から多くの釣り人が旧港付近には集まる。北九州の人や熊本の人など阿久根や鹿児島の人以外にも多くの人が訪れる。そんな多くの方が訪れる阿久根の朝だが、眠れる場所がないため、徹夜で阿久根に来て、そのまま釣りをするという現状。釣りをして、何も釣れなくても来てよかったと楽しそうに話していた。そして釣り人は釣りが終わるとすぐに帰って行った。

洞察したこと

現状では、徹夜で釣りをしに来た人が釣りが終わるとすぐに帰ってしまう。眠らずにきて、眠らずに帰ってしまう。それか自分の車で寝てしまう。それでは寝不足による運転も怖くなってしまう。だからこそ、阿久根に来て少し泊まれる・少し休める場所があることで、釣り人も自分の車ではなく安らかに眠ることもでき、阿久根に滞在する時間を増やすことにもつながる。また、釣りが終わって休憩した後に店が空いていたら、より阿久根に滞在したいと思えるのではないだろうか。

他の人からのコメント

地方に釣り旅行に行った際、ホテルではなく初めて民泊施設を選んだ。釣りが長引き到着が遅れると連絡をするとオーナーの方は快く承諾してくれたり、台所を貸していただけたり、深夜の外出の際もシャッターを開けて宿を出入りできるなど民泊ならではの柔軟な対応に感服した。（なっしぃ）

釣りの際には、お手洗いと食べるもの・場所はいつも考えておかなければならない。おにぎなどをコンビニで買って車内か堤防で軽く済ます人はかなり多い。簡単に休んだり食事を取れるスペースが近くにあれば大変助かるだろう。(もっちー)

〈だし汁〉を飲みたい！

Found by : しゅがー

Connection : 味わう / 飲む

食べるだけじゃない、魚の味わい方

10人で魚を大量に釣ったあの日、食べるだけじゃない魚の味わいをみんなで楽しんだ。だしは日本の文化で、宝である。あまり身を食べられない魚だとしても、煮詰めてだし汁にすることもできる。余すことなく食べ物を最後まで美味しくいただくことができる技でもある。
この旨みを作り出し、味わうことができるのは”海があるだけ”ではいけないのだ。

洞察したこと

肉のだし汁と魚のだし汁は作り方は全く違う。魚は煮込みすぎると濁り、魚臭さが出てしまう。だが、一方で比較的短時間でだしを取ることが可能という面もある。
調理に時間がそこまでかからず、うまいだし汁を飲めるということだ。
コーヒーで目を覚ます朝も温まる夜もあっていい。だし汁やあら汁で目を覚まし、体を温める日があってもいい。
最後まで素材を尊重し、味わう文化を全ての人がいつでも味わえますように。

他の人からのコメント

東京、渋谷にある「かつお食堂」は削りたての鰹節を堪能できるごはんを提供している。日本のうまみを味わうために朝から行列ができるのだ。
なんと偉大な日本のUMAMI。
[図版出典：Harumari Tokyo]（きりは）

東京駅にオープンした茅乃舎のだしスープバー。SNSでは賞賛であり、需要がありそうな予感がする。一度訪れてみたいものだ。だしを片手に出勤している人が増える未来もそう遠くないのかもしれない。（めい）

浸かる前後に阿久根の資源

Found by : まいまい

Connection : 安らぐ / 入る

温泉はただ体を洗い流すだけの場所ではない

ぼんたん湯に立ち寄り、阿久根の温泉が持つ役割の広さを実感した。温泉の張り紙には、昭和10年頃の阿久根温泉発祥地が紹介されていた。近郊の農村から田植えの休暇を兼ね、1週間ほど自炊で湯治に訪れる人々が多かったのだという。新鮮で安い海産物・野菜・薪を調達し、自炊をし、温泉夜景を浴衣で楽しむ様子は、今考えても全く古びたものには見えなかった。

洞察したこと

阿久根で過ごし、温泉をはじめとする施設は、その場所一つで完結しているのではなく、仕事や文化の間に入っていっているからこそ成立する場所なのかもしれないと感じた。スナック街が漁師の休憩場として栄えていたように、釣りの後に五右衛門風呂を紹介されたことがあったように、温泉に入る前後の動線や季節・時間帯が増えれば、さらに温泉の魅力も増すのではないだろうか。

また「温泉と自炊がつながっていた」というのも、「温泉は旅行先で浸かるもの」という認識がある現代からすると、新鮮な発見だった。湯元であり、かつ農作物が育ち、魚まで集まるという阿久根の環境は、土地の豊かさをこれ以上ないくらいによく表している。 さらに収穫作業をした身体を、その場で綺麗に流せ、上がったら美味しい食べ物が待っている…という連鎖は、物事の前後を上手く補完している。これは温泉だけではなく、全ての生き物が充実している阿久根だからこそ生まれる体験かもしれない。温泉の薪を自分で作れたり、温泉のそばで野菜を栽培できるのも面白そうだ。
また阿久根でよく聞いたお話として「駐車場や個室空間が無いから行きにくい」という声があった。現状の温泉にはない要素を取り入れれば、阿久根の資源と温泉の距離も縮まっていくのではないかと考えた。

他の人からのコメント

都会の方には温泉型テーマパーク施設がある。このような場所は意図的に様々なお店が集まっていており、温泉だけでは終わらせていない。しかし阿久根は自然と街全体がそのテーマパークになっているようなものなのだ。このタネを読みそのことに気づいた。当たり前で見過ごしているかもしれないが、需要がある場所であることには違いないと改めて感じた。[図版出典:空庭温泉](めい)

都市では火を囲めない

Found by : あかちゃん

Connection : 待つ / 集まる

そこにある流木の、遊び方が広がる

阿久根の海岸に転がる流木を集め、そこに火を灯す。じんわりと赤く光っていく木。その木を掴み松明の如く走り回る人と、流木で戦い合う人。明るく灯った流木の塊の上で、流木にマシュマロをつけ炙る。マシュマロが少しづつ溶けながら、垂れていく。それをただ見つめる人。ゆったりとじんわりと温まる空気と人の会話。

洞察したこと

海岸に大量に転がる流木にも様々な使い方がある。流木を剣に見立て、チャンバラのように戦う人もいれば、流木を椅子に見立てすわす人、端のようにマシュマロを刺す人、燃やして温まる以外にも見立てながら違う方法を試すことができる。流木がじんわりと温まるのを待つ間に、人は流木で他の遊びをする。そして流木が温まると今度は人が周りであたたまり始める。ゆらめいている火を眺めながら、流木を集めながら、人はまた温まる。火は原始的な活力と癒やしを与えてくれる。

他の人からのコメント

静岡県藤枝市瀬戸谷では、自然の中でリラックスした時間を過ごす「むかし田舎体験」を行なっている。囲炉裏を使った和風バーベキューや屋外で焚き火をして、焼き芋を楽しんだりと火を使ったアクティビティも人気。燃え上がる火を見て、癒されるという楽しみもある。
[図版出典:むかし田舎体験](あかちゃん)

関西を拠点とする「FUKUDA FACTORY」は日本で唯一の流木ガラス専門店で、災害な度で薙ぎ倒された天然の流木と年間200tにもわたり廃棄するしかなかったガラス屑を再利用し空間が少し贅沢になるオブジェを作っている。
[図版出典:流木ガラス](しおしー)

遊ぶ

阿久根らしさ全開のかわいさ

Found by : きりは

Connection : 見る / 気づく

阿久根ブランド遊具

番所ヶ丘公園や中央公園などには、アクネブランド遊具(勝手に命名)があった。遊具にはなんと、ボンタン型の屋根や魚、海老の飾りがついている。アクネブランド遊具は町中を歩く観光客からすると「阿久根市に来た!」と心が上がる。大人でも実際に遊んで、写真を撮りたくなる可愛さがある。

洞察したこと

地元の子どもたちからしたら普通の遊具だろう。私にとっては、とってもポップで可愛い、阿久根チャームが詰まった遊具に見えた。阿久根市民の子どもたちは小さいころから、この遊具で遊び、ぼんたんや魚などと近い距離で接していくのだろうと感じた。

他の人からのコメント

おもちゃを使いながらごっこ遊びをすることは、子供にとって良い教育になると思う。香川県では、うどん店がセルフの場合が多いためか、木で作られた具材を自分でチョイスし、セルフ店に慣れさせる施設がある。…子供が小さい頃から自分の地域性や社会性に触れ、学ぶことは何より重要そうだ。(しゅがー)

阿久根の公園に存在していた小さな神社(鳥居?)にも、ボンタンらしきものと、エビとお酒が添えられていた。いろんなところでこのような形の神社を見かけるが、ボンタンが置いてあるのは初めてで、いつもとは違った場所にきた実感が強く、感動した。(まいまい)

年齢を気にせずに居れる

Found by : めい

Connection : 浸る / 触れる

どの年代も楽しめるもの

番所ヶ丘公園のゴーカート。この日遊んだのは、私たちしかいなかった。21歳の大学生と40を過ぎたおじさんしかいなかったのだ。ゴーカートで遊べるとわかった瞬間、みんなのテンションが上がった。やる以外の選択肢はなかった。「ゴーカートは小学生くらいまでが楽しむもの」という先入観があったが、全員が楽しんでいた。懐かしいもの、昔からあるのものは年代問わず楽しめる傾向がある気がする。

洞察したこと

年代問わず楽しめることや交流できるものは、昔から伝わるような遊びだったり場所だったりすると感じた。海沿いでは子供がキャッチボールをしていたり、大人は釣りをしていたりと、違うことをしているのに一つの場所に集まっているのが好きだ。阿久根には広く伸び伸びと過ごせる場所がある。跡地には子供を中心としたものを作る。阿久根の人は面倒見が良い。子供に昔ながらの遊びを教えるような機会を作ったり、室内・室外で幅広い年代の人が交流できる場所があると良い。

他の人からのコメント

誰もが一度は幼いころに作ったであろう泥団子をつくることができる施設が愛知県常滑市にある。色づけをしてひたすらに磨き、光泥団子を目指す。子供から大人まで訪れる近年人気のスポット。
[図版出典：INAXライブミュージアム]（きりは）

「ココロの積み木」は、大人に手に取って遊んでもらいたいものとして作られたものである。特に積み木が崩れたときには、イメージ通りに積み木を積めても積めなくても崩れると自然と笑顔になる。どうしても“積み木”と聞くと、“子供のおもちゃ”という印象が強いがそれはワクワクする心は、大人ももちろん変わらない。
[図版出典：ココロの積み木]（ゆーな）

遊ぶ

世界で一つの貝のお皿を作る

Found by : ゆーな

Connection : 重ねる / 味わう

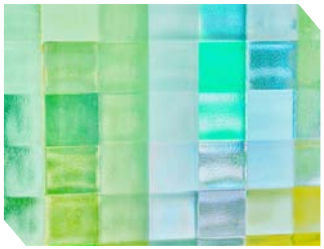
天然の貝を使って

その場に置かれている普通の皿である。一般的にお皿は土や石から作られているが、脇本海岸で落ちているシーグラスや、貝殻を拾って加工し、自分なりのお皿(食器)を製作することができれば、海の近くにいなくても、阿久根の海や思い出を感じることができ、世界で一つだけの特別感を持つものになる。

洞察したこと

実際に海岸に行って、貝やシーグラスを拾ったが、それぞれ形状や色などは異なり、自分の理想の貝やシーグラスを探すのが、まるで童心に戻った感じがしてワクワクしたことを覚えている。思い出を形にすることで、「阿久根」という場所の存在を残せるのではないかと感じる。

他の人からのコメント



カラフルなガラスで自分好みの小物が作れる工房が東京都浅草にある。自由自在にガラスを並べ替え自分だけのお皿を作ることができる。
[図版出典：るるぶ&more]（しおしー）

東京都代官山にあるArt bar東京では、ワインを片手に自分だけの絵画を描く体験を行っている。阿久根特産飲み物を片手に阿久根の貝殻を使った何か作れたら、阿久根に囲まれた形と記憶に残るものになりそうだ。[図版出典：artbar]（めい）

自分で彩る阿久根の景色

Found by : あかちゃん

Connection : 染める / 重ねる

変わるものと変わらないもの

阿久根めぐみこども園には、このような絵の具で塗られた?窓ガラスがあった。話によると、絵の具で遊んでいたときに、作ったものだそう。窓ガラスに行うことで、奥が透けて見えて、自分の描いた模様と景色が一体となる。他にも、WSの中で、植物に絵の具を塗り、それを筆のように使って服に描いたりするという行事もあるということを教えていただいた。

洞察したこと

小さい頃の思い出は意外と大人になると忘れている。だからこそ、窓ガラスに残ってその奥の風景が大人になるにつれ変わりながらも、自分の描いた模様は消えないというのがとても素敵だと感じた。また、小さい頃に自分が描いた服を家族分作り、家族でお揃いのを着る。子どもが大きくなったら、その服は巾着にするなどでリサイクルし、いつでもそばでお揃いを感じられるようにする。また、家族によって柄や色が違えば他の家族との会話も進むきっかけになりそう。

他の人からのコメント

神奈川県にあるこどもの国では、園内に入るとまず広い坂道がある。その坂道では、チョークを使って、坂道に直接らくがきができる。普通、道に落書きをするなんていけないこと。しかしここではそれが許され、むしろみんな様々な落書きをしている。大人も混じって思わず落書きしてしまう。
[図版出典:こどもの国](あかちゃん)

"REEAST ROOM”の池袋店では、屋外屋上にある高さ2mほどの壁と屋上に通ずる階段に直接落書きができる"FREE ART WALL”を展開している。誰しも幼少期にやってはいけないことで怒られたことがあると思うが、誰にも怒られることなく落書きができて童心に戻って自分を表現できる。
[図版出典:PRTIMES](ゆーな)

そこにしかない伝統行事を体験する

Found by : めい

Connection : 守る / 食べる

三月十日祭り

阿久根には旧暦の3月10日に「三月十日祭り」という独自のイベントがあり、重箱にご飯を詰めてピクニックするという風習がある。観光客は伝統行事を体験するのになかなかタイミング合わない。しかし祭りにちなんだ特別なお弁当箱でご飯を食べられることができれば阿久根にしかない体験ができるかもしれない。

洞察したこと

地元ならではの伝統はその地域の特色を色濃く映し出す。特に観光客にとっては、普段体験できないことを旅の中で経験し、思い出として持ち帰りたいと思う人が多くいるのではないだろうか。重箱に詰められた食事と提供理由を添えれば、簡易的ではあるが観光客も阿久根市の行事を体験できる。阿久根の人々が積み重ねてきたものを人口減少によって絶させてほしくない。外部にも知ってもらえるような機会があれば良いと思い、このようなアイディアが思い浮かんだ。

他の人からのコメント

香川県では、粉から作る本格うどん作りが体験できる施設がある。学校をコンセプトとし、うどんを作りながら楽しく学ぶことができる。だからこそ、他県や海外から来ても気軽に体験できるのだと考える。[図版出典：中野うどん学校](ゆりゆり)

八王子には、個性豊かな獅子舞や八王子車人形などの伝統芸能が継承され、今も昔も人々の熱気が集結するお祭りが、各地域で行われている。
日々歴史や文化を身近に感じることは少ないが、行事が近づくと、「地元の祭りが行われる」と感じる。
[図版出典：八王子市役所](ゆーな)

ソバーキュリアスの飲まない選択

Found by : きりは

Connection : 話す / 飲む

ひとりでも、何人かでも過ごせる空間がほしい

まだ眠りたくない夜にひとりで、何人かで集まってゆっくりと過ごすことができる場所がなかったように感じる。家や宿ではない、どこかに行きたいけれど、どこに自分の行き場があるのかわからない。そんな状況を優しく迎え入れてくれる空間がほしい。
居酒屋やスナックでは、お酒がメインでソフトドリンクは烏龍茶かコーラの二択という選択肢では心から楽しみ、ゆっくりとできないだろう。

洞察したこと

阿久根市は実は24時間眠らない街でもあると思う。漁師の人は真夜中から動き始める人もおり、それぞれの役割によって順番に活動している。
常に人が動いているのなら、夜に営業している商店があってもいいだろう。
また今よりもノンアルコールの選択肢を増やすことで、車の人やお酒に弱い人も共に深い夜を楽しめるようになると感じた。お酒をあえて飲まない「ソバーキュリオス」という概念が作られるように、ノンアルコールの需要は高いと考えられる。

他の人からのコメント

ノンアルコールドリンクやモクテルの需要は年々高まっており、「Low-Non-Bar」という場所もある。一般的なバーと変わらない空間で、本格的なドリンクがいただけると話題の場所だ。
[図版出典：Low-Non-Bar]（きりは）

ゆったり、こじんまりとした場所で甘いものを食べながら過ごすひと時が人気の「夜カフェ」。自分の時間をより大切にする文化と共に、都内だけでなく、日本全国に広まっている。
[図版出典：はらへり]（きりは）

トロピカル感を演出する南方系の植物

Found by : まいまい

Connection : 親しむ / 誘う

バナナ、ソテツ、アコウ、ワシントンヤシ・・・。

大川地区鈴木段の3号線沿いで撮影したバナナの木。阿久根では、関東や関西ではあまり見られない南方系の植物が多く見られる。自生しているわけではなく、植えられているものも多いが、旅人の目は、国道沿いのワシントンヤシだけでなく、葉っぱが独特なバナナの木も珍しく映るようだ。これらの植栽はさりげなく「トロピカルな場所に来た」という旅行気分を高めるものとして機能している。

洞察したこと

市内各地には豊かな植物が見られる一方、旧港周辺は車の往来も多く、アスファルトやコンクリートで固められた人工的な街の風景となっている。確かに海は美しく、誰もが目を奪われるが、市街地の方に目を移せば風情があるとは言えない。すぐ近くの戸柱周辺など緑が少ないわけではないが、整備されていない空き地が雑草で緑になっているのが目立つ。逞しく生きる南方系植物を大胆に配したスペースがあれば、観光客にとって南国ムードを強く感じれる場になるのではないか。

他の人からのコメント

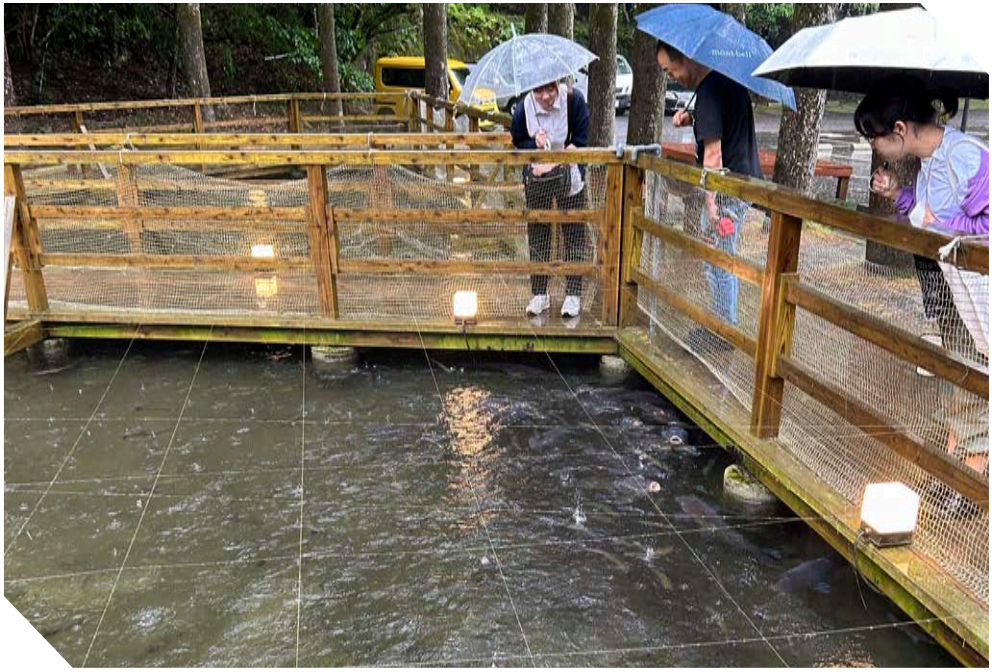
市内の「農園ガーデン空」には庭造りの技術があり、人々が集まる場所を演出する植栽には応用できるはずだ。また「ぼんたん湯」の露天風呂も、岩風呂の脇で佇んでいるバナナの木は自然の中に居る感じをつくる上で重要だ。（かみひら）

千葉県館山市の館山駅周辺では、道路沿いに多くヤシの木が植えられ、南欧風の建物が並んでいる。子供の頃は館山ではヤシの木が生えるのだと信じていたのだが、行政がリゾート開発の町おこしのために植えたものであった。本来の景観を変えることへの議論は尽きないだろう。
[図版出典：館山市観光協会](もっちー)

魚は泳ぐ、人はそれを見て涼む

Found by : ゆーな

Connection : 見る / 集まる



呑気に泳ぐ魚、人間は大変だ

「そうめん流し」を堪能した大野庵で泳いでいた魚を見ている人たち。魚の種類までは把握できなかったが、大きい魚から小さい魚まで様々な魚があちこちで泳いでいる。魚は黒く、普段から自分たちのテリトリーにいない人間に興味を持っているのか、集中的に集まっている。

洞察したこと

魚にとっては普通に泳いでいると感じていても、見ている人間側からすると「呑気だなー」と感じる。普段から慌ただしく、喧騒ある場所で過ごすことが多い私たちは、魚がのんびり泳いでいるところをみて、自然と笑顔になったり、話のタネになったりする。自然の音がほとんどで、ストレスとは大きくかけ離れたこの場所。観光者側の視点から考えると、魚がのんびり泳いでいるのを見て、人間はそれをみて気持ちが和らいでいる。

他の人からのコメント

水族館にいると心なしか涼しい。エアコンがとかではなく、やはり青色や水は涼しさをより感じさせやすくするのだろうか。水族館は個人的に時間が過ぎるのがあっという間だと思う。気がつくとゆらゆらと泳いでいる魚に目が奪われている。(めい)

真夏に地元・広島の妹背の滝に行き、その場所にいた瞬間涼しかったのを思い出した。滝の勢いよく流れる音、水面の波紋、小魚が泳ぐ姿。それを見るだけでデトックスされた。人間にとって水や他の生命を見ることは、自分を一瞬忘れる方法なのかもしれない。(ゆりゆり)

自然のエアコンで涼む

Found by : ゆーな

Connection : 見る / 集まる

自然のエネルギーを体感

7月上旬でも、阿久根市の朝はすぐにでも暑くなりそうだった。食べたり休んだりすることで涼める場所はいくつかあったが、基本的に特定の場所があるからこそできることだった。場所によっては、時間などに追われてしまい、満足に涼められないこともあるだろう。ここでは、時間や費用の制約を気にせず、自分が満足するまで涼むことができる。

洞察したこと

夏の平均気温は、30℃近くと暑く、夏日は10月、11月まで続くことも多い。外に出たくても暑いからという理由で外出たくない人もいるだろう。ここでは、涼めるだけではなく、何か思い詰めた時に自然のエネルギーを感じることができる。

他の人からのコメント

長野県軽井沢町にある白糸の滝はマイナスイオンを感じることができ、街中と体感5度以上は低くなっている場所にように感じる。夏場でも長袖が欲しくなるほど冷えており、自然のエアコンの一つである。水の流れは人を涼しくさせる何かがあるのかも知れない。（しおしー）

山は涼しい。わたしは群馬生まれ育ちだが、夏は避暑地として山を登る。そして今年縁があり夏に海辺に行くことが多かった。海も涼しい。涼しいというか気持ちが良い。この二つを兼ね備えている阿久根は強い。（めい）

蟹と格闘できる清流

Found by : もっちー

Connection : 獲る / 遊ぶ

誰もいない小川で童心に返る

阿久根市の南側には、大川川という澄んだ小川がある。そこで阿久根で山太郎と呼ばれる川に生息する蟹をとることができると聞き、タモ網と針にスルメをかけた釣竿を持って川に向かった。水が透明なため川底もよく見え、そこでは本当に川の中をカニが歩いていた。計八匹ほど捕まえることができた。塩茹でをすると、濃厚な味噌と詰まった身を味わうことができた。

洞察したこと

大川川は比較的水深も浅く、マリンシューズがあれば子供でも入って膝ほどまで浸かって川遊びをすることができる。私たちは偶然、山太郎の採取地に詳しい方にお話を伺うことができたが、観光客など阿久根に縁が少ない方々にとってはなかなかこのような情報を得ることは難しい。海だけでなく山や川も美しいが故の阿久根の海の豊富さがあることを体感できる価値は大きなものであると心底感じた。

他の人からのコメント

秋川渓谷にある十里木ランドでは、人が手を加えていない、そのままの雄大な大自然の中、川べりでマスを掴み取り、そのまま焼いて食べることができる。川で遊ぶこと自体貴重になっている場所も多いが、川で魚を取って自分で食べるという機会は良い思い出になる。
[図版出典：十里木ランド](ゆーな)

北海道利尻町にある神居海岸パークは絶好の「カニ釣り」スポットである。体験者が自由に取る体験のため道具の貸し出しを行なっているにもかかわらず制限時間はなく、料金は無料である。
[図版出典：神居海岸パーク](しおしー)

入る

塩湯に入り、サウナで整う

Found by : しおしー

Connection : 過ごす / 浸る

似ている二つの体験価値

ここ数年ブームがきているサウナ。サウナ好きな人は魅力的なサウナがあれば何時間かけてでもサウナを求めまだ見ぬ地へと足を運ぶと聞いたことがある。阿久根にある魅力とサウナを掛け合わせたら知る人ぞ知る有名なサウナができるのではないかと思う。その魅力とは「塩湯」である。塩湯もサウナも毛穴の汚れを排出しその他に新陳代謝の促進や肌の調子が整うといった似たような効果を持っている。

洞察したこと

塩湯で体を温めてからいきなりサウナに入って急激な温度変化による肌へのダメージなどを考えるとサウナと似た環境の塩湯で体を慣らしておくのは新しいかつ体にも良いのではないだろうか。また、海に近いという利点から、水風呂の代わりに海に飛び込み、整っている時間を砂浜で寝るなど、より新しい体験価値のある革新的なサウナが出来上がるのではないだろうか。

他の人からのコメント

今、プライベートサウナというものが世の中には蔓延っている。人に裸を見せる抵抗感を持つ若者や自分だけの時間を作りたい人にぴったりな場所だ。わたしはサウナで整う時に星空を眺めるのが好きだ。阿久根にもし、サウナが出来て、整う時に阿久根の海を眺められたら…と思うと素敵だ。（めい）

近年のサウナブームに伴い、キャンプ場などにテントサウナを設置している施設も多くなった。渓流の横にあるテントサウナに入った後、水風呂代わりに川に飛び込んで紅葉を見上げながらハンモックで整った時は至福の時間であった。サウナを置くだけで付加価値を生んでいるのだ。(もっちー)

知らない間に巻き込まれる

Found by : きりは

Connection : 集まる / 過ごす

お昼の〈ラジオ体操〉につられる

阿久根市市役所ではお昼終わりにラジオ体操の音楽が流れる。職員はみんなでラジオ体操をするのだ。たまたま、市役所にいた私たちも音楽が流れると体操をはじめてしまった。職員の健康のためにはじめてことだそうだ。市役所に用事があり来ていた方々も体操をしていた。

洞察したこと

突然音楽が鳴り、多くの職員の方々が体操を始めた。驚きと戸惑いがありつつも、みんなにつられて体操したくなった。すこし奇妙だが、面白いく楽しめた。盆踊りや歌などでは、全国的に知られているものは少ない。ラジオ体操であれば、誰でもできる一種の共通言語のようだ。一緒にすることで一体感や同じ場所にいる共通認識を持つことができるとも感じた。

他の人からのコメント

合奏練習の休憩中。急に誰かが練習すると気づいたら誰かが演奏が始まり、部屋にいる全員が演奏をしている状態に。「音楽」が共通の人たちで偶然演奏が重なった終わりはメンバーと繋がっているように感じた。(ゆーな)

市役所の中にはなぜか入り込んでいた野生のカニも一緒に踊っていた。きっと普段から一緒にラジオ体操しているのだろう。そういった自然も知らない間に巻き込んでいるお昼のラジオ体操はまた違った魅力が見えてくる。(しおしー)

山と海の接点

Found by : まいまい

Connection : 触れる / 食べる

青の濃さから、緑の濃さへ

阿久根の海で泳ぐ魚たちは、住民が意識するほどに魚影が濃い。魚影の濃さは、資源の豊富さや豊かさを表しているという。海の栄養が豊富だからこそ、魚がたくさん泳げるからだ。そんな海の栄養の源は、緑の栄養だ。山の資源がミネラルとなって、海の豊かさが生まれている。釣りのスポットで知られがちな阿久根だが、実は土地の中で恵みがめぐりめぐっているからこその場所だった。

洞察したこと

海を見て、緑を思う。緑を見て、海を思う。そんな逆転的な循環は、なかなか普段目に見えにくい。一見目に見えにくい循環が可視化されやすいのも、阿久根の特徴のように思えた。水を汲みにいくことでゴツゴツした地面に触れ、大地の豊かさに気が付いたり、漁師さんがお芋を食べて農業を感じたりと、上を見て下に気が付く、という瞬間が多かった。山の幸を海辺で食べたり、海の幸を山の中で食べたり、魚を食べていたら自然に山になっていったりしたら面白いのでは。

他の人からのコメント

南伊豆のとある場所では、車から降りてすぐに歩いて行ける島があった。
その場所は遠くからは緑豊かな島だと認識するものの、いざ島に着くと一面の海を意識して見るようになり、灯台下暗しとも言えるその自然の偉大さに、五感で感動覚えた。（なっしい）

射楯兵主神社では「かまふたの岬に立ちて未来をみる 大川」とあり、山と海とが交わる部分は神社になっていた。
そこでお参りをしたりした後に海を背に写真を撮ると、この自然の中の場所に言語化できない意味を感じられるのなるのかもしれない。（なっしい）

マイペースに移動する旅をしたい

Found by : ゆりゆり

Connection : 走る / 遊ぶ

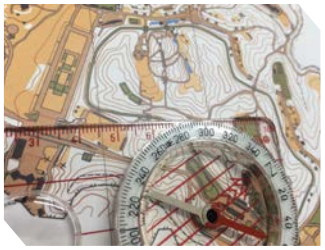
目的地の途中に聖地的な場所

塩屋ホステルには、サイクリング目的で阿久根に来た人が、休息のひと時を過ごすのに滞在しにくる。阿久根市を最終目的地に訪れるというよりも、天草市の方面から南の鹿児島市を目指して向かう途中にこの辺りで泊まりたくなるらしい。サイクルマップを見れば、どのルートも海に沿って走るようになっている。さらに、鹿児島県内だけでなく、その周辺の県まで巡るようになっているので、他県からのサイクリストも多くいることだろう。

洞察したこと

ガチのサイクリストにとっては、長距離の長旅で阿久根市は一つの通過点に過ぎないのかもしれない。が、皆、阿久根の夕日に感動を覚える。
普通に旅人として訪れた者にとって手軽さを備えた自転車はあると便利だ。立地的にどこに行くにも徒歩では時間も労力もかかる、かつ交通手段少ない中で、「自分で移動する」方法があれば、もっと活発に市内観光ができるはずだ。自然豊かな阿久根は、レジャーも活発であるため、釣り人等のマニアも好きなことをしながらマイペースに市内をを堪能できそうだ。

他の人からのコメント



地図と磁石を用いて山野に設置してあるいくつかのチェックポイントを、できるだけ短い時間で探しあててゴールするオリエンテーリング。自分でルートを決めたりできるのがとても楽しい。
[図版出典：こどもの国]（あかちゃん）

映画『アナログ』を追体験できる宿泊プラン。地図を手掛かりに待ち合わせ場所で再開し、2人で協力して目的地を巡る。携帯を持たないアナログな時間が、いつもより思い出を豊かにしてくれるだろう。
[図版出典：アナログ旅]（しおしー）

阿久根の夕日に染まる日常

Found by : まいまい

Connection : 贈る / 見る

冷や酒に後から効く、阿久根フィルター。

阿久根から横浜に帰ってきた、次の日。友達と出かけていて、ふと「あっそろそろ夕日が落ちちゃう!!急がなきゃ!」と焦っていた。そして「いやそんな夕日の時間気にしないだろ…」と我に返った。そこで初めて、阿久根で恐ろしく夕日を気にしていたこと・夕日を目指して生活を組み立てていたことに気がついた。夕日自体は阿久根で無くても見られるため、もういつまでも阿久根のことを思い出してしまった。

洞察したこと

夕日が綺麗とは言えど、あくまで日が沈むだけの、天文現象だ。そんな自然の一瞬を、こんなにも気にかけられることに驚いた。また実家に戻りながらも阿久根の見方が思い起こされるところに、旅の持つじわじわと後から効いてくる、冷や酒のような効能を想起させる。魚や空など、どこでも見かける対象物が印象深くなる阿久根には、別の場所に帰っても掴んで離さず思い起こさせるような力がある。また旅の特性を言葉的に大きく拡張し、海の冷たさで楽しめる冷や酒があったら、「阿久根フィルター」の特徴を説明しやすくなるかもしれない。

他の人からのコメント

初めて行った場所で、海面を照らす夕日。その日は終わり際、あまりいい思いじゃなかった状況だったあったが、そんな中夕日が心を照らしてくれて、落ち込みを儚いに変えてくれた。どんな場所でも、夕日に照らされると、雨じゃなくて今日も最後は幸せだった、そうと思える瞬間になる。(なっしぃ)

夕日を見たくなるのは、自分と向き合う時間を作るためなのかもしれない。毎日夕日の表情が変わるように、それを見る者の感情も毎回違っていた気がする。何を思ったのか、見たままの夕日の画と共に感情を日記感覚で記録できるものがあれば、後に振り返れていいな。(ゆりゆり)

暮らしに散らばる、祈りで満ちる

Found by : まいまい

Connection : 見る / 祈る

願いを込めて生きること

阿久根での暮らしでは、願いや祈りのかけらが多く感じられた。大漁を願って作られた大漁旗は、その筆頭だ。大漁旗の役割は、単に魚が釣れることを願うだけではない。街の中で役目を伝えたり、祈りの対象が同じであることを確認したり、ハレの日を知らせたり…伝わりますように、と願いを込めて日常の中で大事にされる行為は、単に神様任せにするのではなく、自分たちの暮らしを紡いでいくための行為に思えた。

洞察したこと

阿久根では他の土地以上に、願いたいことも多かったように思う。海が荒れませんように。早く起きて漁に行けますように。いい魚が釣れますように…例えば釣りを題材にしても、作業の中でいくつもの願いポイントがある。これはボンタン栽培や、サップ体験の中でも同様のことが言えるだろう。さらに流れ星が日常的に見れたことから、願うことそのものも自然と想起される環境だった。祈りたい対象が近くにあり、自然に祈りと共存する様は、新鮮で貴重な体験になるのでは。

他の人からのコメント

研究室では、全員が協力して大漁旗の制作を体験させていただいた。自分たちの手で、作業を共有しながら描いた作品は、描いている間も「上手く描けるように」描いた後も「これで卒業式を迎えたい」と、全てのタイミングでささやかな祈りを生み出した。願うことが、コミュニケーションの一つとして機能したと実感した、貴重で代え難い体験だった。（まいまい）

タルチョは、5色の旗に託された文字や絵が風になびくことで読経したことになるという、チベット仏教の信仰のひとつで、冬はマイナス20度にも下がるという厳しい自然環境に暮らしているチベット民族が、厳しい暮らしの中で生きると同時に信じる象徴となっている。
［図版出典：TIRAKITA］(ゆーな)

仕事を育てる仕事が見える

Found by : まいまい

Connection : 巡る / 学ぶ

米袋から垣間見る仕事の循環

酒造での芋切りでは、座椅子に米袋が使われていた。単にクッションとして使われている…それだけだ。それでも個人的にこの光景を目にした時、普段目に見えない大切なものが見えた気がした。お米を使った発酵が行われるからこその生活用品を発見し、仕事を支えている別の仕事を垣間見た。そして阿久根の中で、目に見えにくいたくさんの仕事が、育ち育てられているのではないかと感じた。

洞察したこと

阿久根の魅力の一つとして、自然や命・社会の循環が垣間見れる点がある。漁業や農業をはじめとする命が豊富であることに加え、生産から加工までが暮らしの一部になっているからだろうか。これらは現状、関係者にこそ知られている魅力だと思うが、その循環を辿っていけば、実は旅行時に触れられる仕事や文化もたくさんあるのかもしれない。芋切りや選別などといった小さな接点でも、細かく仕事を救いとれば、子供でも楽しめる衝撃的で馴染みやすい接点があるかもしれない。

他の人からのコメント

イワシビルでは、洗面所の鏡や台に、漁業で使われるトロ箱やパレットが使われている。一見おしゃれな生活用品に見えて、実は漁業の裏側を自然に垣間見れるシステムとなっている。ただ物品を再利用するだけでなく、道具によって支えられている別の仕事にも触れられる点に、新しい魅力があると感じた。（まいまい）

農業機器メーカーのヤンマーは東京駅付近にて米ギャラリーを運営している。そこでは、日本の文化である米について楽しく学ぶことのできる。農業のことや米づくりの知恵など、これまで知れなかったことを発見できる。
［図版出典：ヤンマー米ギャラリー］（きりは）

育てる

共に関わり、育てられる

Found by : しゅがー

Connection : 助ける / 触れる

商店街に咲く共同街路植物の示唆

阿久根の商店街を歩いたときに何ヶ所かで見かけたプランター。通常、こういったものは自身の家の庭やベランダで完結することも多い。商店街などでも市などが管理する街路樹が多いが、ここではプランターが道の脇に置かれている。しかも土が入っただけ、よく見る雑草が生えているだけ、といったものは少なく、誰かがきちんと世話をしているのである。

洞察したこと

人は、何かを育てて何かと繋がることで、自分と自然・地域と関わることができると考える。商店街での生活を見て、植物を栽培し、見守り、支えていく人情や繋がりを強く感じることができた。この街では自然が愛される対象にあることがわかる。新天地でも、市民やそこを訪れる人たちが共同で作物を育てられる場所があれば、愛着や親しみが生まれると考える。
コミュニティとその場を育て、大勢で世話をし、共に変化し続けることができる。

他の人からのコメント

最近では、普段では関わりを持たないような人たちが一つの畑に集まり、作物を育てるシェア農園が増えてきている。植物を育て、その土地への理解や新しいコミュニティ形成に一役買っていると感じる。誰もが気軽に訪れ、交流し、一つの目的に向かって協力できる仕組みだ。(しゅがー)

福岡県にある大木町では、共同経営で<きのこの里>を経営している。最初5人ほどから彼らの活動は、町全体に広がり、女性が活躍できる場が作られたり、その女性たちが作った食材をレストランに活用したりときのこを通して町のコミュニティが広がっている。
[図版出典:ミツカン水の文化センター](ゆーな)

誰でも漁師になれる

Found by : きりは

Connection : 走る / 巡る

漁船に乗り、釣りをした

釣りをするために、漁船に乗った。これまで観光地で遊覧船やボートに乗ることはあったが漁船は初めてだった。船には釣竿を置いておく場所や網があった。大きな船には魚を入れる地下倉庫があり、そこから魚を引き上げる様子をみることもできた。船のスピードは想像より速く、晴れていたこともあり、海風が気持ちよかった。

洞察したこと

海の近くに住んでいたり、海に関係する仕事がないと漁船には乗れないイメージがある。実際もそうだろう。今回は釣りのツアーとして乗せていただいた。釣りをするための設計が面白かった。昼間に見る場合と夜に見る場合では、光などもありことなるだろう。きっと船の上で、ピクニックや星を見ることができたら、風と海の音とのマッチングが素敵な時間をくれそうだ。

他の人からのコメント

釣り体験ができるというのは知らなかったことだ。私も沖縄に行った際、船釣りの体験ツアーをさせて貰った。その時まで釣りの楽しさやを知らなかったが、釣れた時のあの竿を引っ張る感覚が忘れられなく、身近に海があったら絶対にハマっていたと思う。（めい）

お台場や隅田川といった都会でも海や広い川に出て仕舞えば大自然と変わらないという「船上デイキャンプ」船の上でBBQをしたり釣りをしたり、あんな場所やこんな場所で自然と共に都会の喧騒から離れることができる。
［図版出典：アニバーサリークルーズ］(しおしー)

私たちを乗せる「おれんじ鉄道」

Found by : ゆーな

Connection : 巡る / 待つ

沿岸沿いに橋わたす列車

熊本県八代市・八代駅～鹿児島県薩摩川内市・川内駅間を結ぶ鉄道で、阿久根市では唯一の鉄道となっている。紙のきっぷのため、ローカル線感のような雰囲気が大きい。1両しかない電車内で切符を購入できたり、バスのように到着駅その場で支払う仕組みになったりして、普段は見られないものを体験できた。

洞察したこと

今だと、ICカードで支払いすることが主流になっており、切符の仕組みが廃れつつある。そもそも1両で電車が来ることもほぼないし、周りの人たちもスマートフォンがメインで、景色を楽しむ余裕などもない。何もかも機械化が進んでいる今だからこそ、普段目を背けていたアナログな体験をこの電車内で味わうことができるのではないか。

他の人からのコメント

奈良県に生駒山上遊園地という1929年に開園したレトロな遊園地がある。そこに行くためには、これまたレトロなケーブルカーに乗って上まで登る。若い世代にとって初めて見て体験するものなのに、どこか懐かしい古き良きものを感じる。
[図版出典：生駒山上遊園地 instagram]（きりは）

広島市内には路面電車が主要な公共交通機関として走っている。時に、飲食ができる列車「トランルージュ」が走り、市内を旅しながら食事をし、特別な時間を過ごすことができる。
[図版出典：TRAIN ROUGE]（ゆりゆり）

乗る

使われていない船をもう一度

Found by : しおしー

Connection : 守る / 集まる

船って個室になるよね

旧港に並ぶもう使われていない船。かつては多くの漁師と共に大海原を駆け、大量の魚を運び、人々の生活を支えていた船。しかし旧港に並ぶ多くの船は時代の移り変わりと共に古くなっていき、役目を終えたものも多い。

洞察したこと

船が陸にあっても面白いのではないだろうか。船が個室になるのではないだろうか。ホテル、グランピング施設、レンタルスペース、コワーキングスペース、サウナ、個室レストランなど船と組み合わせるだけでまだみたことのない施設に早変わりする 。また、見た目も船というかっこよさとかわいさと、見る人によって見え方の変わる視覚的にも楽しい場所になるのではないだろうか。廃船を陸にあげるだけで魅力的な場所に早変わりするのではないだろうか。

他の人からのコメント

静岡県では期間限定で「土肥温泉丸」という、実際の船をそのまま利用した温泉が地元の人々に愛されている。海水浴に訪れた人も利用しており、海で疲れた体を癒すこともできる。
[図版出典:土肥温泉丸](あかちゃん)

TABISAUNAが企画する「絶景エクストリームサウナ」では、諏訪湖の上に、テントサウナなどが設置された島がある。サウナでの定番の水風呂の代わりにそのまま湖にダイブすることができるのだという。海でも廃船を利用して同じようなことができるかもしれない。
[図版出典:TABISAUNA](もっちー)

人が集まる魅惑の〈揚げたて〉

Found by : きりは

Connection : 守る / 食べる

手作りのつけあげ

阿久根市の名物、水産練り製品といえば「つけあげ」だ。これは魚のすり身と豆腐を擦り合わせて、鹿児島の醤油で味付けをして揚げた食べ物だ。伝統的で歴史ある食べ物で、おやつとして食べられることが多いようだ。揚げたてがあるとつい手が伸びてなくなってしまうこともあると地元の方も話してくださった。

洞察したこと

練り物マニアとしては、気になる食べ物である。家で食べる伝統的な食べ物はそれぞれの家で引き継いでいる味がある。そのため、可能なら多くの家庭のつけあげを食べてみたかった。
魚をすり身にして、豆腐と合わせてというのは手間がかかる。しかし、その手間が家庭の味や人とのつながりを生むのだと感じる。

他の人からのコメント

神奈川県の小田原駅にある創作煉處籠清では、「揚げかまぼこの専門店」で、注文をしてから揚げるため、出来立ての揚げかまぼこを楽しむことができる。
[図版出典：小田原籠清](あかちゃん)

築地市場にあった紀文総本店では、店内で揚げたての練り物も店に並べている。食べ歩き用の練り物も売っており、移動しながらでも揚げたてを楽しむことができる。
[図版出典：デイリーポータルZ](ゆーな)

好きなときに、特別な料理をふるまえる

Found by : しゅがー

Connection : 集まる / 過ごす

調理器具も食器も調理人も集まる

一部の宿泊施設には、簡単な料理が作れるような、キッチンや調理器具、食器や冷蔵庫が置かれている。食材は豊富にあるが、個人がコミュニティで振る舞える場所は少ない。また、誰でも簡単に利用できる場所も少ない。
個人宅ではあまり所持されていないような調理器具や、大きめのフライパンや炊飯器、ピザ窯などは食文化を活性化させる。

洞察したこと

地域のお土産屋さんで買った調味料や地域の食材を、その日のうちに新鮮な状態で味わうことができればなんと素晴らしいことだろうか。
お店で食べる料理も美味しく、楽しいが、自分たちで作った料理もまた別格である。このような体験をするには、誰でも使えるシェアキッチンが必要だと考える。
家では作れないような料理も調理可能で、大勢で共有する調理場があれば団結の素材にもなる。食材も物によっては共有し、無駄を省くことができる。

他の人からのコメント

横浜市にある、「よりみちガーデン」は、“暮らしをつくる場所”をテーマにひと・もの・商いが集まるシェアスペースとなっている。
ここでの出会いによって、新たなコミュニティが生まれるのではないか。
［図版出典：よりみちガーデン］(ゆーな)

普段は人が生活している居住スペースを、一定時間だけ部分的に一般の人に貸し出すレンタルスペースという仕組みがある。キッチンや調理器具の貸し出しをネット上で行うという、一種のシェアリングエコノミーが展開されているところも多く、昔のような地域間でのコミュニティ発展も期待される。(しゅがー)

知ってても出来なかった〈体験〉ができる

Found by : なっしい

Connection : 獲る / 釣る

スーパーで買う魚にも、新たな想いが募る

東京の地を離れ、鹿児島という未開の地で、船に乗って海の真ん中へ。海水の匂いを嗅ぎ、自分たちの船を軸として見渡す限りの視覚が海と島という冒険的な感動がある中、海の中は何がいるのかわからない。一本の糸を垂らして、生き物がいることを触覚で知り、そして彼らを獲る。この感動は、スーパーでいつも買うだけで「取る」ことができた魚とは違う「獲る」感覚を得た。

洞察したこと

これまで日頃からやっていた「買って食べる」というのは「きっと限定的だった」と気づく。釣りは明らかに「非効率な魚獲り」であるが、それは実社会を深く感じるためには実は一番効率の良い手段なのかもしれない。そして、その喜びを誰かと共に分かち合うことができた時、新たな繋がりも生まれていく。外部の人間にとって、釣りに向き合うことができたかどうかで、普段スーパーの鮮魚店で買う魚に対する想いも変わっていくものだ。これは外部から来た人にとっても良い体験になりそうだ。

他の人からのコメント

「カレーライスを一から作る」という話がある。徹底的動物を育て、野菜を作り、皿も全て1から作って、あらゆる食材がどこでどんな道のりを経てくるかを考えられる。命を貰い受けることから逃れた民族はいないからこそ、自然の恩恵を受けるありがたみを感じる。
[図版出典：カレーライスを一から作る](ゆーな)

2017年に行われた調査によると、魚を捌くことのできる人は全年代を通して20%ほどだ。自分の手で釣り上げた魚は、自分の手で捌きたくなるものだ。そうやって食卓に並ぶまでの過程が存在する魚は特別な旨味を感じるものだ。
[図版出典：マルハニチロ](もっちー)

生産できて消費も出来る

Found by : なっしい

Connection : 獲る / 釣る

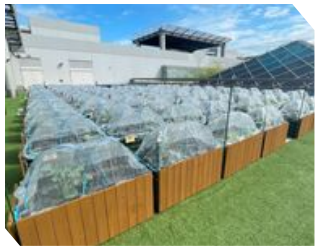
生産も消費も両方体験して、社会を見直す

民泊施設にて、全員で料理を作った。ただそれはただの料理ではなく、自分たちで釣ってきた新鮮な魚も料理した。せっかく釣った魚も、買ってきた野菜も、料理が得意な人も苦手な人も協力しあって、みんなで夕食を食べた。

洞察したこと

食べるだけではなく釣る。釣るだけではなく食べる。両方体験することで、新たな視点から社会を見れる。これは当たり前のことであるようで、実は日常的には意識できていなかったり、できなかったりする。
これを自分のよく知らない場所で体験することは、その知らない場所のことをゼロから知ろうとするとき誰も気づかないかちに気づくことができるかも知れない。

他の人からのコメント



百貨店の屋上で野菜を育てられるシェア畑。手軽に自分たちで春~冬まで1年を通じて収穫を楽しめさらには、自分でその野菜を食べられる体験ができ、季節や自然の変化を感じながら暮らせる。
[図版出典：シェア畑](ゆーな)

料理をするようになってから、食材を通して地元・広島の新たな魅力を発見することが多い。食材の原点を知ることは、社会の仕組みやその土地の歴史、関わる人々などさまざまな角度から発見する可能性があると感じる。(ゆりゆり)

眠る音に惹かれる

Found by : まいまい

Connection : 安らぐ / 聴く

街に眠る音を聞いて、眠りたくなった

宿・きてんに泊まった夕方。ふと散歩してみると、住宅街で小さな海辺を見つけた。地図にも名前は載っておらず、おそらく大川の海辺に辿り着いたようだ。夕暮れ時に誰もいない中で海を見ていると、空の綺麗さはもちろんのこと、ダイレクトに耳を叩いてくる波の音に、心打たれた。そして、その場にあった大きな岩で、自然と眠っていた。音の素晴らしさや眠りたくなる海の質感に、初めて気がついた。

洞察したこと

自然に眠る音の魅力と、そこから自然に生まれた「ここで寝たい」という気持ちは、海を目的とせず、奥まった場所だからこそではないかと感じた。思い返すと、海を目的とした旅行では、広くひらけた海ばかりをクローズアップしている気がする。日常の中に入り組み、狭くてこじんまりとした、すぐに立ち去るような海辺だからこそ、気づけることがあるのかもしれない。

また「眠り」を想起させたのは、その場にあった岩の存在が強い。岩があったからこそ、眠りという行動が生まれた。ただし自然の岩は非常に硬く、腰を痛めた。しかし自然の冷たさ・痛さを感じられることは、都会では生まれない貴重な経験だ。海辺に眠る音・自然と共に、寝られるような経験をもっとしたい。

そして、本来海辺以外にも、街に眠る心地の良い音は、たくさん存在するのではないかと感じた。もちろん海辺が一番音を感じやすいのだが、酒造で芋を切る音や、電車を待っている間に聞こえてくる川のせせらぎなど、実は街中に溢れる音は、自分が自覚しているよりも多いのでは無いかと気がついた。音を全身で聴くことは、ただ音声を耳中に響かせるだけにとどまらず、土地の情景や特徴を推察することにもつながるだろう。初めて聴く街や行為の音に、もっと感動できる動線があれば、旅行の思い出も膨らみそうだ。

他の人からのコメント

京都にあるアートホテルには梅田哲也氏の「だれのものでもない水 / なにもみえない場所」という作品の部屋がある。ないはずの水の音を聞きながら過ごすのは、これまでにない不思議な経験となる。[図版出典：BnA Alter Museum]（きりは）

眠る

自然の中で過ごせるハンモック

Found by : まいまい

Connection : 安らぐ / 涼む

旅らしい休憩の仕方

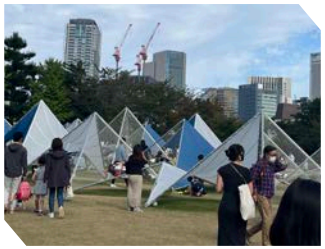
休憩したいと思った時、すぐに目に留まるのはスタンダードなベンチだ。しかしいつもとは違った時間を過ごしたいと思った時、優雅に過ごしたいと思っても、なかなかうまく休むことができなかった。特に海辺や木々の間では、風が涼やかで気持ちが良い。「この風を受けながら、足を伸ばしてリラックスしたい…」そんな気持ちが強くなった。

洞察したこと

涼やかな風や自然を取り込み、足を伸ばして旅らしい気分を味わえる…そんな休憩方法として思い浮かんだのは、ハンモックだ。布の素材を阿久根由来の大漁旗や網にすれば、阿久根ならではの体験が生まれる。場所を固定して子供連れでも楽しめる居場所になるのも面白いし、貸し出し式にして好きな場所で休憩できるのも新しい価値になりそうだ。ハンモックだけでなく、体を拭くタオルや膝掛け・ビーチサンダルやドリンクなんかもセットにすれば、ピクニック感覚でも使えるだろう。

他の人からのコメント

秋の終盤、早朝から堤防に釣りにいったが、間も無くしてあまりの寒さに脚から震え、立っているのが辛くなった。その中、堤防と垂直する少しの壁が自然の中で過ごせる風除け場の役目を果たし、そこに座ったりして寒さを凌いだ。普段無い休憩の仕方で、いつも以上に面白い旅に感じた。(なっしぃ)



東京ミッドタウンにある「海のハンモック」では、自由に寝そべったりよじ登って遊んだりしてリラックスできる。三角錐の傾き加減が、寝そべり過ぎなくて丁度良い。ちなみに、海洋ゴミをリサイクルして作られている。阿久根の旧港にあった漁用ロープが活用できそう?? (ゆりゆり)

隠れていた〈街の宝〉を見つける

Found by : なっしい

Connection : 見る / 気づく

手の届かないようなものは実は近くにあった

風テラス阿久根にて、説明を受けた際に紹介してもらったピアノ。国内でもとても貴重なピアノで、その神々しさは一目でわかる。ただ、その神々しさは扉の向こうにあり、全く気づかないようになっていた。ごくたまに使用されるそうだが、最近は利用者も減っていて活躍の場もほとんどなくなってきたという。

洞察したこと

グランドピアノというだけでも、なかなか日常的に体験することが一般的には難しい貴重なものである。その中でも価値のあるモノが隠されているのは、なんだか寂しそうに思えた。貴重なものであるため、扱いは大切にすると共に、流動のある環境の中でぜひ真価を発揮してほしい。

他の人からのコメント

名古屋駅すぐの百貨店に、面白いエスカレーターがあった。よく見ると、手すりが床に潜る珍しい形に驚く。なんと世界に3台しかない貴重なものだそうで、なかなか気づかずに通り過ぎてしまうことも。（きりは）

イギリスで、1,000円弱で買った胸像が実は4億円超の価値のある作品であったという記事があった。宝物は忘れ去れてしまうと、本来あるはずの価値が忘れ去られてしまうので、ものの価値が発揮できる場ですべきだと考えさせられる。
［図版出典：ARTnews］(ゆーな)

未知の世界に挑戦する心を持てる

Found by : なっしい

Connection : 聴く / 過ごす

人が少ないからこそ、一歩一歩階段を踏める

阿久根駅の施設内の隅にストリートピアノが置いてある。しばしば都心にもあるが、ピアノを少しだけ弾けるという人にはハードルは高いと思った。人が多すぎると緊張してしまうあまり、その知らない場所と人前でピアノを弾く”未知の世界”に挑戦する心が持てないかもしれない。奏者としては、町の中央に置かれるような配置より、こういった角にピアノを置いてもらえると安心感があり、人も少ないなら「自宅以外の演奏」に一歩挑戦できるかもしれない。

洞察したこと

奏者としては、ピアノを見ると弾きたい気持ちが必ず湧くと思う。新しい世界が開くかもしれない。そしてコンサートホールの聴衆ではなくむしろ立ち寄っただけの旅人に聞いてもらうことで、何か新たな繋がりも生まれるかもしれない。都心と比べて地方のストリートピアノは、地元民が集いたくなる場所に配置する仕組みにすれば、家を出てピアノを弾いてみたいと思う奏者にとって愛着ある挑戦環境になるのではないかと感じた。

他の人からのコメント

山奥の元郵便局を改良して創られたカフェ。人が少ない地方だというロケーションを言い訳にせず、旅行者が集いたくなるような設計と、元々郵便局だった場所を再びうまく使うという、地元民を尊敬してその土地の資源を有効活用し、循環させるという挑戦に、感動した。（なっしぃ）

真珠の作り方を知っているだろうか。三重県鳥羽市にある「ミキモト真珠島」では世界で初めて真珠の養殖に成功した場所である。まだ真珠の仕組みがわかっていない時代に、人の少ない場所でまんまるの綺麗な真珠を作り上げた功績は計り知れない。（しおしー）

誘う

釣果を目指さない、〈釣り〉に来れる

Found by : かみひら

Connection : 過ごす / 守る

「母を外に連れ出すために来ている」

日曜の午前中に、堤防釣りをしている10数名の人にインタビューを実施した。この二人は、出水市から来た親子。息子さん曰く、「ぶっちゃけ、釣れても釣れなくても構わないんだ。釣りは、母を外に連れ出す口実だから」。さまざまな事情で自由に外出できなくなってしまっている母親といっしょに休日を過ごすために、息子さんは母親を連れて阿久根まで釣りに来ている。もう以前のような会話はできないけれども、二人は同じ時間を過ごせている。

洞察したこと

誘われたお母さんは、竿を出しているわけではないが、釣りに同行している。ついつい、釣りに来る人の目的は「たくさん魚を釣ること」だと思いがちであるが、実際にはこの親子のように、釣果を目指すのではなく、休日の時間をゆっくりと海を見て過ごすために来ている場合もある。港の周辺は、近くの市町村の人々にとっても気分転換できる共有地であり、阿久根まで来るための十分な動機になっている。身体の弱った人々にとっては、海は季節によって寒暖が厳しく、暖まったり涼んだりする場所的なサポートが求められる。

他の人からのコメント

昔から父親と良く釣りをしに出かけているが、普段あまり会話するタイプではないので、2人きりで話すのは釣りに出かけるタイミングがほとんどだ。釣りは移動も含め1日中一緒にいることが多いので、私以外にも釣りが自然とコミュニケーションの時間となっている人も多いかもしれない。(もっちー)

新港・旧港の堤防は、足腰の弱ったシニアの方々がゆっくり散歩できる場所としても意味がある。日陰や風よけがないと、長い時間過ごすのは難しい。移動が楽しくなると、気軽に来やすくなるかもしれない。(かみひら)

誘う

樽の隣に座り、樽の中に入る

Found by : まいまい

Connection : 気づく / 守る

「ベッドに一升瓶置いておく」

阿久根の紹介を受けた時に、さらりと教えてくださった一言。焼酎文化が発達している鹿児島では、ベッドに一升瓶が置いてあるという。そこで使われただろう瓶は、街中や観光施設にも飛び込んでいた。「農園ガーデン空」では、綺麗に整えられた植物の端で、ズラリと瓶や樽が並んでいた。ガイド中にメインコンテンツとして紹介されることはなかったが、わかる人にはわかる抜群の存在感を放っていた。

洞察したこと

この樽隣文化は、そこにあるだけで、新しい覗き口を提示している。「樽がある」「瓶と寝る」という言葉は、外部の人間にとって、それだけで面白さやインパクトがある。しかしそこから「中には何が入っていたのか」「どこから来たのか」「いつから置いているのか」と、樽の中身を覗くように気になりだすと、それは樽ではなく阿久根やその土地・本人を覗くことに繋がっていく。実際これらは、酒や醤油の文化があってこそのものだ。新しい造形物よりも、よっぽど個性的で楽しい存在に感じる。

他の人からのコメント

醤油樽の活用方法として、樽材を使ったお箸が存在する。阿久根ではすでにテイクアウトのお弁当が地元で愛されているが、樽を活用すれば、新しいタイプの再利用容器になるかもしれない。この事例では樽の形を変えているが、阿久根ではむしろ樽の形を残す方が、インパクトが生まれるように思う。[図版出典：ヤマホシサン]（まいまい）

鹿児島は酒の文化も盛んだが、使い終わった酒瓶をリメイクできる。いいちこの酒瓶は、中に入れた液体をグラスに注ぎやすい構造になっているからこそ、水差しやデキャンタに活用しやすくなっている。瓶は、使い終わった後も、生活に彩りを与える。[図版出版：iichikoスタイル]（ゆーな）

訓練で感じる、朝の早さ

Found by : あかちゃん

Connection : 聴く / 巡る

朝7時の避難訓練

朝7時。緊急地震速報の放送があり、「地震により津波が発生する危険があるため避難するように」という放送が流れた。だが、スマホは何も動いていない。町もあまり慌てた様子がない。すると放送が続き、訓練ということが伝えられる。訓練か〜と思いもしたが、まだ朝7時だよ?という驚き。地元ではラジオ体操が朝7時だが、阿久根では避難訓練が朝7時なのか!漁も釣りも競りも朝早い。そんな阿久根の朝の速さを感じられる避難訓練の放送だった。

洞察したこと

海が近いため、もしもの時津波が来てしまう可能性がある。だが観光客は訓練なんて行ったことがない。もしこの訓練を観光客が一緒に楽しみながら、体験できるものだったなら、万が一の場合にも備えられるし、観光客も安心して過ごせるのではないか。また緊急時には観光客も地元民も関係なく、助け合いが重要になる。訓練を通じて仲が深まっていれば、助け合いもしやすいのではないだろうか。

他の人からのコメント

飛騨高山では毎朝朝市開催されていて、地元特産の陣屋もちや朝採れた野菜などが売られていて、朝から楽しむことができる。地元の方はもちろん多いが、旅人も楽しく早起きしたくなる。
[図版出典:飛騨高山宮川朝市](あかちゃん)

朝のラジオ体操はそれこそ地域の人たちが集まり交流するものだと思う。スマホを持たず、音声だけで参加者全員が同じ動きをするのだ。健康にも最適だ。体を動かすことで1日のパフォーマンス力を上げてくれ、目覚めの良い朝と人々の交流が開始される。(めい)

見知らぬ人と朝からあたたまる

Found by : あかちゃん

Connection : 温まる / 巡る

ためるあたたかさ

阿久根の温泉・塩湯は、海水並みに塩分濃度が高く、湯冷めしにくいことが特徴。栄屋旅館が経営する「ふれあい温泉ぼんたん湯」では、朝から温泉に入る人も多く、宿泊客以外の地元の方が訪れていた。宿泊客も朝から温泉に入りにきており、浴衣姿でうろつく人と外から来た住民が交わる機会にもなっていた。

洞察したこと

朝7時に友達と温泉に入りにくるというのは贅沢だなと感じた。そして湯冷めしにくい温泉だからこそ、朝に入りにきて、その暖かさを体に溜め込み、1日を快適に過ごすことができるため、朝の塩湯はなんといい文化だろう。例えば漁師の方が、漁にいく前に塩湯に入れば、体が温まり、海の上にいる間でも暖かさを保つことができる。そして漁から帰ってきた後も塩湯に入れば、寒くなった体もすぐに温めることができる。

他の人からのコメント

山梨県にある「ほったらかし温泉」は、日の出の1時間前から22時までオープンしていて、日の出も夜景も両方を楽しむことができる。その影響で元日に初日の出を拝みにくる観光客も多い。地元の人との助け合いによって開業し、今でも地元の人に愛されている。
[図版出典:ほったらかし温泉](あかちゃん)

朝塩湯に行って、知らないおじいちゃんに話しかけてもらった。塩湯の成分表を見ていたら声をかけてくれた李、体重計の使い方が分からなかったら教えてくれた。塩湯であったまるだけでなく人のあたたかさも感じ、阿久根の良さを再確認した。
(しおしー)

自分だけの〈名産〉を地図に残して

Found by : ゆーな

Connection : 巡る / 重ねる

無限の可能性を持つ地図

地図からどのような名産、場所があるのか書かれている。そこにチェキのようなサイズの写真を貼ってそれぞれどこにあるのかが知れる。よく知られている名産だけではなく、自分が思う阿久根の良いところを写真で貼っていって、無限の可能性を持つ地図となっていく。

洞察したこと

地元の人にとっては当たり前に思うことも、外側の人間にとっては、新鮮に見えることが多い。また今回行ったときには、普段の観光では、よく知る名産に行くことが多いが、地元の方のおすすめの場所を行ったことにより、ネットで調べたときには知らなかった場所を知ることができた。そのときに行った思い出の場所、自分の思う「名産」の写真を貼り付けることで、さらなる魅力を引き出せるのではないかと感じる。

他の人からのコメント

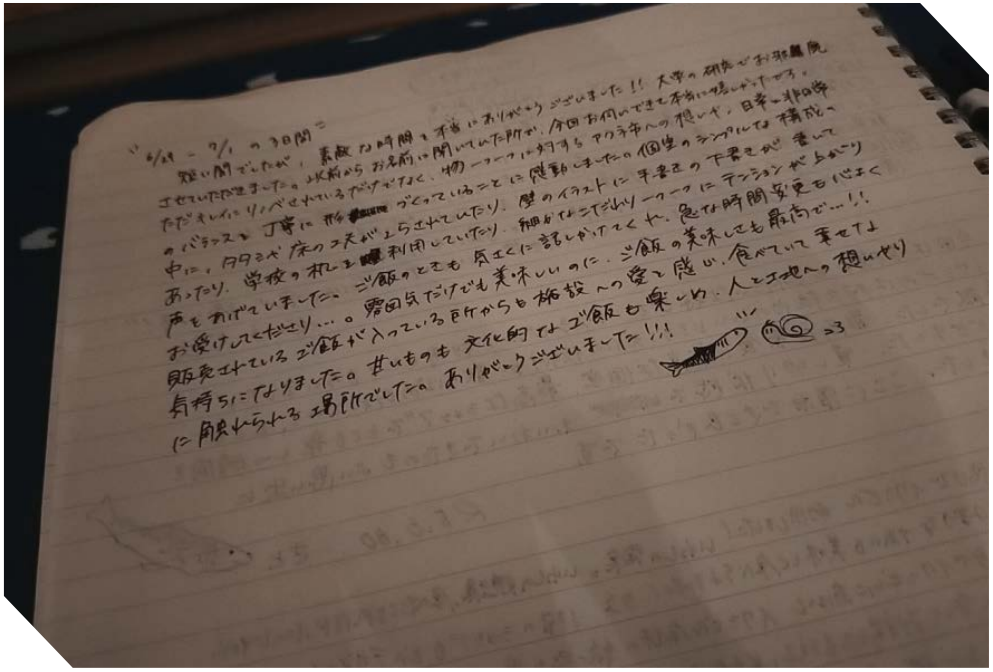
香川県にあるおもちゃミュージアムでは、香川県にまつわる特産品や建造物が木で形どられており、模型を香川県の地図上で自由に動かすことができる。自身が訪れた場所で体験したものを貼り付けることで、自分だけの香川体験マップを作ることができる。（しゅがー）

近所の施設でも、同じような試みが行われていた。誰もが自由にマップを書き込むことができ、訪れるたびにマップの形状や深さが変わっていた。「ここに新しいものができたんだ！」「あそこって無くなったの！？」マップを見て畳で話すだけで、眠っていた価値が膨らんでいった。何度も行きたくなり、お年寄りから子供も、移住者も住民も、全ての人が同じ目線で楽しめる仕掛けだと感じた。（まいまい）

旅の記録をここに残して出発

Found by : ゆーな

Connection : 訪れる / 巡る



「人と土地への思いやりに触れられる場所」

イワシビルにある宿泊者の感想を集めたノートになっている。イラストを書いていたり、長文を書いていたりと、イワシビルに泊まって楽しかったことを記述されていた。ここで文章をまとめたことで、自分がなぜ泊まったのかを形にでき、以前に泊まった人たちの思いを見ることで、思いの詰まった文章から、十人十色の思いを感じることができ、この場所から飛び立った時にまた行こうとなり、再び訪れて循環する。

洞察したこと

「ここに泊まってよかった！」と思う人は、ノートに自分の思いを残すのだと思う。なぜわざわざ宿泊者がここに書き残すのか。それは、イワシビルで良い体験できたことを始め、阿久根という場所と、そこに住む人たちの温かさに触れ、「よかった！また訪れたい」と感じたから、自分の思いを旅の記録を残したのだろうと思う。そこから会ったこともない宿泊者と見えないところで繋がっていき、阿久根の魅力が広がっていくと考える。

他の人からのコメント

写真付きの観光ガイドブックが用意されていて、写真の部分だけ、同一構図で観光者自身が撮影した写真に置換する取り組みのカダパンを思い出した。多くの人が訪れた証拠として、みんなが同じ構図で撮った写真を一箇所に集めると、時間を超えて出会った感が増すと思った。（しゅがー）

宿での思い出をを施設内の壁に寄せ書きのように書いている宿に宿泊した。
たくさんの人がこの宿を訪れ、オーナーの人柄に触れて、感謝の気持ちを宿に残していけるというのは、お互い話していなかった・見えなかった部分を知れるきっかけになるのかもしれない。（なっしい）

また会いに行きたくなる

Found by : ゆりゆり

Connection : 尋ねる / 待つ

小さなパン屋の大きな愛で結ばれた夫婦

お店に入ると、常連さんらしきお客さんが会計中で店の奥さんと親しく会話をしていた。平日にも関わらず、お昼前にはほとんどのパンが完売していた。そんな人気店のパン屋「パパン」を営むのは、とっても仲良しの夫婦。この店を開業するきっかけは、旦那様が奥様に喜んでほしいからというシンプルな回答だった。その愛情深さは見てわかるほどで、非常に仲の良い関係性だ。会話時も身内のように親しく接してくれ、二人の優しさが溢れていた。

洞察したこと

最初の開業のきっかけは、奥様のためであったが、次第に阿久根のみんなに移り変わっている。お店となると経営の問題で利益を優先しがちであるが、このお店は人とのつながりを最も大事にしているように感じた。黙々とパンの仕込みをする旦那様からは、誰かの幸せのために愛情をパンに精一杯こめる思いが、伝わってきた気がする。会話上手の奥様は、来店するお客さんと親身になって話す姿が印象的で、来店するたびにつながりを濃くしている。

他の人からのコメント

鎌倉にある「カフェ鎌倉美学」。「コミュニケーションカフェ」という冠が付けられたこの場では、世代や性別などを超えてそこに来るお客さんやオーナーの方に会いに来るために集まる。
[図版出典：マガジンハウス] (ゆーな)

地元の団子屋さん。月に1度は行きたいと思うのは何故だろうか。「美味しい」だけだったらそうならないのではないだろうか。人が優しかった、話せた、それだけで「団子屋に行きたい」とふと思った時に、すぐ思いつく場所になるのかもしれない。
[図版出典：Googleマップ] (なっしぃ)

土地のものを発見する喜びがある

Found by : きりは

Connection : 守る / 贈る

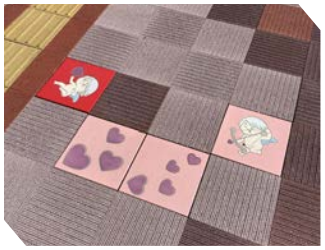
「昔は一家に一本あったのよ」

駅近隣を散歩中にぼんたんが生っているのを見つけた。どうやら、商店を営まれている方の木のようで、入って聞いてみることに。奥さんによると昔はどの家にも一本はあったのに、高齢化もあってもう育てている家は少なくなってしまったのだと。奥さんのぼんたんは立派で、たくさん生るので親戚に贈ると評判で今年も頼まれているそう。美味しいぼんたんをつくるには、水をあげて、肥料をあげてと大変だが、伝統をできるだけ残したいと話してくださった。

洞察したこと

地域の名産品や誇れるものについて自信を持って話せる人や所有している人は以外にも少ないのではないだろうか。ぼんたんの木を育てている本人からすると珍しくもないかもしれない。しかし、私には珍しく、散歩中に見つけたことがわくわくして1日の喜びになっていた。小さい木、大きい木と両方みて、その木の行末が楽しみになる温かい気持ちにさせられた。伝統を持ち続けることは、他の人に伝統を繋げる機会になる。

他の人からのコメント



広島の誇りといえばカープ。老若男女に親しまれ、カープ愛は街を歩いているだけでも感じられるほどだ。その表れとして、球場近辺の歩道はカープ愛を象徴するキャラクターが施されている。小さな施しではあるが、この場所を歩いたからこそ発見でき、その土地の雰囲気が感じられる。（ゆりゆり）

長野県御代田町では「浅間山八景」という標高2,568mの壮大な歴史のある活火山が綺麗に見える8つのスポットを選定し紹介している。ふと綺麗だなと思った場所がそのスポットであったりする時もあり、実際に行かなければ見ることのできない景色を堪能することができる。（しおしー）

命を守る木材の利用

Found by : しゅがー

Connection : 過ごす / 助ける

木のすみか

漁港に重ねて置かれていたトロ箱。プラスチックではなく、木が使われているのは珍しい。最近はプラスチックや発泡スチロールが多くなっているが、昔ながらの木製トロ箱やパレットを多く見ることができた。プラスチックと違い、一部が破損すれば修理したり、木材を再利用したりと物を大切にする風潮があることがわかる。木の温かみも伝わってきて、独特の風景を見ることができる。

洞察したこと

魚が海から引き上げられ、木でできたトロ箱に入れられ、保管される。木の温もりを感じながら魚はトロ箱で過ごす。
これらの木材はトロ箱として終わるのではなく、人が過ごす場所の家具や装飾品、嗜好品として生まれ変わることもある。人に対する恩恵だけではなく、阿久根で過ごす猫や鳥、他にも植物などの棲み家として、多くの自然と再び共生することも可能性として考えられる。

他の人からのコメント

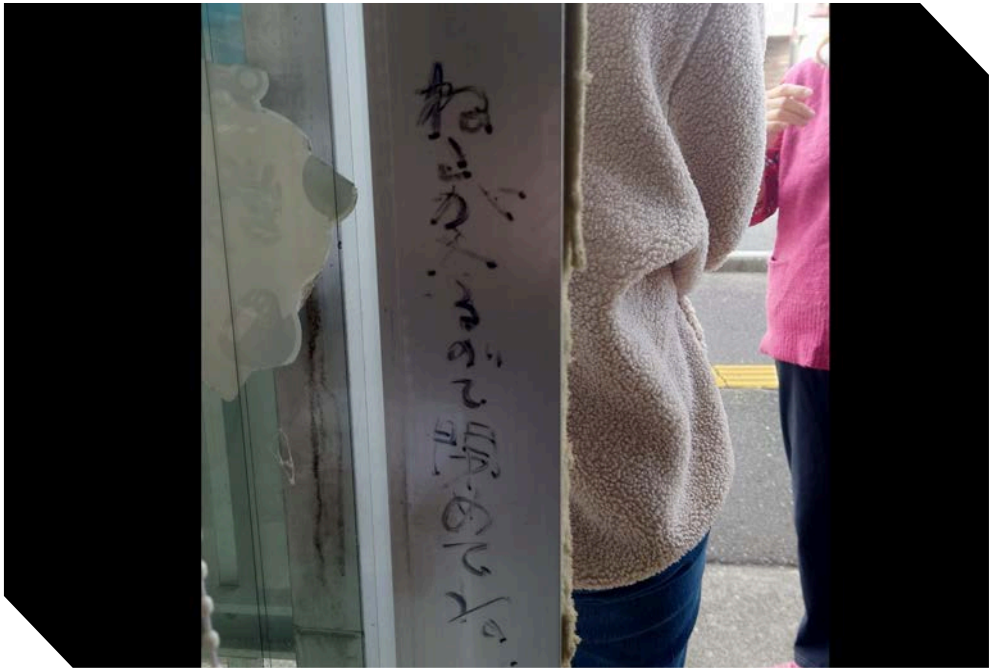
阿久根ならではの「海のギター」である、トロ箱3弦ギター。漁業の盛んな阿久根市でよく見かけるトロ箱を再利用することで、地元風にアレンジし、手作り感満載のギターを制作している。これも再利用の一環として、命を吹き込んでいる。
[図版出典：Rakuten]（なっしぃ）

軽井沢の本屋にて。インテリアが本のページを連ねたような場所に遭遇した。廃盤本など、捨てる予定だった本のページを、このように近接させ、整列されば、1ページではなく数百数千の集合となることで、途端に「インテリア」という新しい価値が急に発生することもあるかもしれない。（なっしぃ）

愛すべき隣人：地元猫と戯れる

Found by : しゅがー

Connection : 親しむ / 触れる



阿久根の地元猫の扱われ方

漁港近くに店を構える商店で発見した文言。「ねこが入るので閉めてね」。猫との共存を示した注意文だ。猫はこの街で人と生活を共にする生物である。
猫と人の生活領域を分けることにより、双方の安全を確立している。地域で見守る対象であったとしても、行きすぎた関係にはならず、ほどほどの距離を保つことが、地域に住む人と猫の約束だと感じた。

洞察したこと

海が近いところでは猫が住み着く。地元にある佐柳島も猫島として有名で、訪れたことがあるが阿久根の猫とは大きさや人懐っこさ、やんちゃ度も異なっていた。人柄はもちろんだが、猫柄が地域で変わっているのだと気づいた。土地の地理や普段から猫と接している人たちの差でも変わってくるだろうが、阿久根の地元猫と地元住民の繋がり方は他の猫が多い地域とは異なる価値を生み出しているように思った。

他の人からのコメント

猫が集まる場所には、自然と人も集う。猫島として有名になっているところもあり、写真家や猫好きが訪れる。招き猫は福と客を呼び寄せる。
保護猫カフェも増えてきているように、人々と共存する可能性がもっと多く広まってくれればと思う。
（しゅがー）

阿久根市ではさくら猫（無料不妊手術事業）が行われている。猫を自然のまま増やし続けることは無責任だが、地元猫と向き合いながら、共に生活していくことが重要である。全てを減らすこともなく、自然の環境を保ち、守っていく姿勢を持ち続けたい。
（しゅがー）

見過ごしていた過程を体験する

Found by : なっしい

Connection : 食べる / 味わう

ひとつじゃなく、いろんな所から力が働いている

阿久根市で珈琲店を経営をされている方から説明を受けながらコーヒーをイチから焙煎した。ただ美味しいコーヒーを売るだけでは真のおいしさを求めることができないという。世界各国のコーヒー生産現地を訪れて、コーヒーがどういった環境でどのように作られているのか、自分で能動的に足を運んで学んだという。そこから工夫を重ね、コーヒーのブレンドを考え直したりするなど、現地にいる方々を尊敬して珈琲店を営まれているという印象を受けた。

洞察したこと

現代の産業というのは、モノを売る、その場限りで渡すというところまでで、そこからは途切れがちだったと思う。
しかし製造の結果ではなく「過程」を積極的に学びに行こうとされているこの珈琲店の方を見て、自分の経営という「宿命」に、様々な角度から深く向き合い続けようとすることが大切であると感じた。珈琲店の経営だけに限らず、地方創生では過程を大切にすることが、街全体に大きな作用をもたらすかもしれない。

他の人からのコメント

クックパッドでは、料理を原点として社会課題の発見に取り組む「探究する家庭科」事業がある。食の循環マップで人や社会のつながりを図解することで、今まで気づけなかったつながりや課題に気づくことができる。
[図版出典：クックパッドの家庭科]（ゆりゆり）

群馬のこんにゃくパークという施設では、こんにゃく歴史や種類・こんにゃくとしらたきの違いなどを学ぶことが出来る。それに加えて自分でこんにゃくゼリーなどの手作り体験ができるのだ。スーパーで何気なく売られ、気づいたら口にしているものの奥を知ることでより美味しく感じられた。
[図版出典：こんにゃくパーク]（めい）

創る

地元でつくる地元の竹かご

Found by : きりは

Connection : 遊ぶ / 学ぶ

地元の高齢者がつくる伝統工芸

竹は意外にも外国産が多いが、阿久根市では地域の資源を生かした竹細工を作られている。竹を山から獲ってきて、切って、干し、加工するなど多くの人の手が加わっている。市役所の近くでもおおよそ60〜80歳の方々が、四角や丸などさまざまな用途に使える竹籠がある。他にも、竹とんぼをつくる体験が大河にある。

洞察したこと

竹は日本に昔からあり、立派な姿を見ると関心する。しかし、なかなか街中で見る機会に恵まれないのは残念だ。今後はより竹のお皿やかごを使うシーンがあると、伝統を感じられる良い要素になりそうだ。
竹は丈夫で何度でも洗って使えるため、お弁当の箱や水を使う場所に持っていくと良い活用になりそうだと感じる。

他の人からのコメント

奈良県広陵町のものづくりを知ってもらうための活動としてスタートした、靴下を自転車で漕ぎながら作るワークショップ。伝統を守る、伝えるための活動は今後の日本では非常に重要である。
[図版出典：チャリックス by SOUKI]（きりは）

この大分県日出町にある、竹ヒゴを規則正しくきれいに編み上げられた弁当カゴ。手で丁寧に網代編み込まれており、丈夫で使うことに愛着が湧いてくる。
[図版出典：南風工藝]（ゆーな）

尋ねる

阿久根で一番綺麗な海は

Found by : しおしー

Connection : 気づく / 泳ぐ

これぞまさにオーシャンブルー

私たちは絶景を求め、佐潟の洞窟へ向かった。レンタカーで移動している私たちにとって、この場所までの道のりは長く険しかった。道は狭く、少しでもハンドルを切りすぎてしまえば救助待ったなしの絶体絶命の状況下に置かれていた。そんな絶体絶命を乗り越え、洞窟へ到着した。感動した。初めて透明な透き通った海というものを見た。今まで見てきた海はなんだったのか。

洞察したこと

阿久根の七不思議の一つでもある佐潟の洞窟。洞窟の入り口は人1人がやっと入れる大きさだが、中で広くなっており、幾つもの分かれ道が連なっている。地元の人でも奥を極めた人もいないと言われている。整備をして洞窟探検などできたら、この綺麗な海と合わせてより魅力的な場所になるのではないだろうか。洞窟に入るようなお店が近くにあってもこの場所とマッチしてより素敵な場所になるのではないだろうか。

他の人からのコメント

「山猫瓶詰研究所」では、建物の設計が洞窟のようになっている。先に進むほど奥まった天井や、斜めになっている手すりなど、こだわり抜かれた空間に大変興奮した。洞窟を彷彿とさせる設計があるなら、綺麗な海を彷彿とさせる設計や建物も、可能性がありそうだと感じた。（まいまい）

釣りのために阿久根新港に早朝向かい、車から降りると思わず絶叫してしまった。当然のように流れ星が見える空が広がっていた。地元民の人は、「いつもこれだからねえ」と言い興味を示していなかったが、私たちは釣りどころではなく道路に寝そべり思う存分星空を楽しんだ。（もっちー）

尋ねる

知識を身につけ楽しめる

Found by : めい

Connection : 触れる / 学ぶ

さつまいもの話から小さなヒント

大石酒造の話の中で、「お米は判別がつきにくい。それと違ってさつまいもって結構分かりやすいよね」という説明がされた。確かに、さつまいもは大きさ、太さ、長さなどが品種によって違うため判別しやすい傾向にある。分かりやすいって興味の入り口が広かったりするなとふと思った。違いがあるから、他のものとも比べてみたいと思うし、分かりやすさは初心者でも気後れしない傾向にある。何かを作るのに分かりやすさは大事だなと改めて感じた。

洞察したこと

阿久根で釣りをしていた時、魚に馴染みがない自分にとって、何が釣れたのかや食べ方など分からないことが多かった。地元民に尋ねることにより、知らなかった情報を得られる行為は、この旅で沢山の経験をした。海洋博物館のような場所を作り、阿久根に生息している生物たちの展示をし、阿久根を身近に感じつつ、釣りに行けるような設備や、地元民と気軽に関わりやすい場所や話の種が詰まっている施設があると良いなと感じた。

他の人からのコメント

普段何気なく3分で作るカップラーメン。でも、カップヌードルミュージアムで歴史を知ると、普段の3分に少し奥深さを感じて待つことができる。読売ランドのU.F.Oのアトラクションでも楽しみながらU.F.Oの気分を味わうことができる。
[図版出典:CUP NOODLES MUSEUM]（あかちゃん）

なんとなく同じものに感じてしまう食べ物でも、食べ比べをしたり、使っている材料の種類が変わると違いがよくわかるようになる。かまぼこの里博物館では、魚の種類やかまぼこの伝統、科学を学び、実際に作ることもできる。
[図版出典：かまぼこの里博物館]（きりは）

醤油の食べ比べ

Found by : きりは

Connection : 買う / 贈る

AZには鹿児島県中の醤油が揃っている

阿久根市にはカネトク醤油がある。そして醤油の種類もさまざまなで、濃口、薄口、出汁醤油などなど。お刺身に相性がいいものや、卵やお米に相性がいいものなど、種類が豊富でどれを自分の好みなのか、選ぶのが難しい。
カネトク醤油の店舗では、定員さんにお伺いしながら、選ぶことができた。

洞察したこと

こんなにも多くの醤油があることが非常に驚きである。鹿児島の人は好きなブランドが固定してあるそうで、ずらりと商品が並んでいても、一目でお目当てのものを持っていく。
醤油の好みの味が見つかるまでは、小さいパッケージのものを買っていたが、その場で食べ比べができたり、醤油図鑑があれば、もっと楽しく選ぶことができるかもしれない。

他の人からのコメント

ソラマチには全国から集められた梅干しを、実際に食べ比べることができる、立ち喰い梅干し屋がある。気に入った梅干しは、量り売りもされており、少量ずつ自分に合った量から楽しむことができる。
[図版出典：立ち喰い梅干し屋サイト]（しゅがー）

新潟の「ぽんしゅ館」には500円で県の日本酒を飲み比べられる体験がある。そこには人気のランキングやおつまみになるように塩や味噌も用意されている。
[図版出典：新潟市公式観光情報サイト 旅のしおり]（きりは）

自分の舌で挑戦したくなる

Found by : しおしー

Connection : 味わう / 誘う

〈“日本一”芋くさい焼酎〉の称号

阿久根には日本一芋くさいと言われているいも焼酎の「鶴見」を作っている酒造がある。数あるお酒の中で日本一と呼ばれるには歴史と時間が必要である。そういったものを経て有名になった「鶴見」というお酒は芋くさいという、匂いが少し強いものとなっており、昔から飲み続けている人や慣れた人でないと飲みにくいと感じてしまうが、それでも匂いが1番強いとはいえ味も日本一に近いものとなっている。

洞察したこと

どんなことであれ”日本一”という称号は素晴らしい。どんなに頑張っても1番になることができないところもいる。逆にマイナスな意味でも日本一を取ろうとする人たちがいるくらいだ。そんな日本一を阿久根は持っている。そこからさらに阿久根を世界に広めていく一歩になるのではないだろうか。

他の人からのコメント

私は非常にお酒が弱く、お酒の味自体も得意ではない。しかし阿久根でいただいた焼酎は、舌に苦味が残らず、すっきりとしていてとても飲みやすかった。更にボトルのラベルにもそれぞれに深い意味があり、HPからも確認できるようになっていた。どんな味なんだろう? と、お酒が苦手な人でも挑戦したくなる味と設計に、感動した。（まいまい）

主にスウェーデンで生産・消費される、「シュールストレミング」という食べ物。発行させた塩漬けのニシンを缶詰。その強烈な臭いから、「世界一臭い食べ物」と評され、多くの人が一度は聞いたことのある食べ物である。
[図版出典：THE SWEDISH]（もっちー）

生き物の力を実感できる

Found by : きりは

Connection : 見る / 遊ぶ

海岸でプクプク、パクパク

脇本海岸で足だけ海に浸かり遊んでいた。波が引くタイミングで、カイたちが少しずつ浜辺のほうに移動する様子が可愛らしかった。なんども波に引かれて、なんどでも前に進む姿をいつまでも見ていられた。

洞察したこと

貝を見ることは、潮干狩りくらいであろう。小さな足並みで一斉に動く姿が可愛かった、とても可愛かった。脇本海外のどこにでも貝はいるが、鳥がいなかったのは不思議だ。癒される時間をもっと近くで手軽に楽しみたいと感じた。

他の人からのコメント

ドクターフィッシュが泳いでいる水槽に手を入れると、皮膚を舐めるように魚の掃除が始まる。ドクターフィッシュはプロテイン不足で人間の皮膚がご馳走になるため夢中で食べにくる。
[図版出典：越前松島水族館](あかちゃん)

私たち人間はバイオミメティクス（生物模倣）という、太古から進化を続けてきた生物の体型や色、機能、行動など模倣し活用しようという考えが至る所でされてきた。阿久根という自然こそこのような考え方をより一層深められる場所になるのではないだろうか。（しおしー）

散歩を助け合える贈り場

Found by : まいまい

Connection : 贈る / 巡る

転ばぬ先の杖?

かなりの苦労をかけて訪れた、佐潟の洞窟。ネットの写真以上に綺麗な風景に心奪われたが、足元の不安感が拭えない。そこで学生一行は、落ちていた竹を広い、杖のように支えとして使っていた。洞窟を進み終わり竹をどうしようかと思っていた時、ふと道を見ると、なんと穴に竹が刺さっていた。きっと同じことを思う人がいたのだろう。自然の竹と穴を見えない人が繋ぎ、行きたい志を助けていた。

洞察したこと

ここで体験した感覚は、便利だ!というよりも「同じように思う人がいて嬉しい」という感激の方が強かった。またその場では他に誰もいなかった場所で、唯一他人の存在感を感じられた瞬間だった。「人の少ない場所で人の暖かさを遠隔的に感じた」という点で、一種の贈り物のような心地がした。阿久根を歩いた先に、ふと立ち止まった場所で、同じ気持ちや境遇を共有できる掲示板や助け杖のようなものがあると、阿久根を踏みしめる魅力が増しそうだ。また自転車やライト・カメラといった定番品も借りられると、より濃い時間が過ごせるように思う。

他の人からのコメント

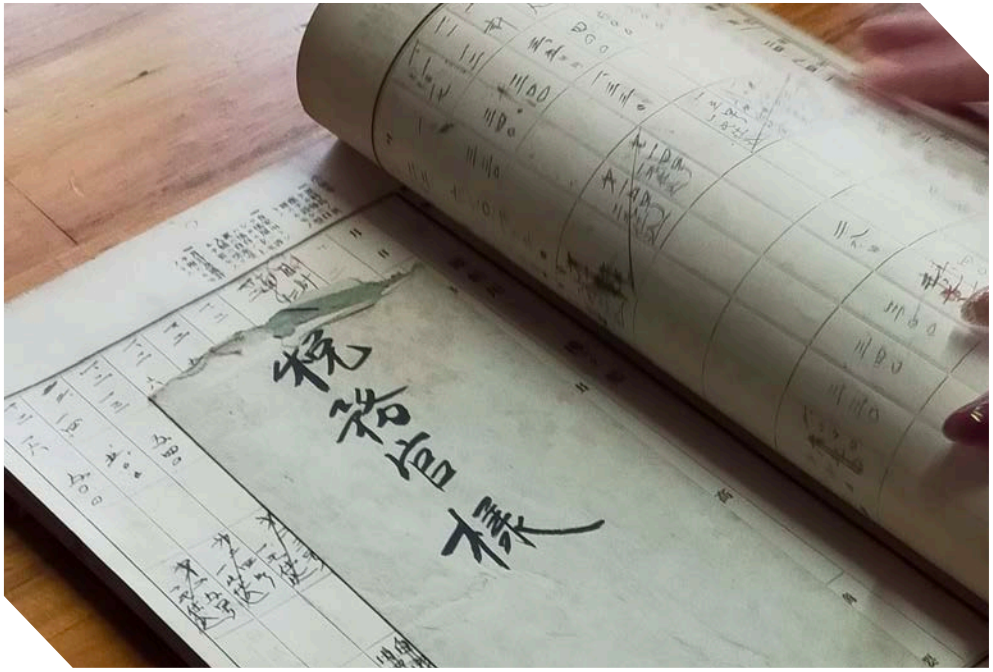
その場所にあるものを有効活用する。それもまたデザインである。足場の悪いこの場所で、杖のような木の棒を持ちたくなり、その棒を回収してくれる穴。全て効率よく生きるためのデザインが施されていた。自然との支え合いの中私たちは生きる。(しおしー)

手軽に借りられるシェアサイクル。すぐに借りられ、借りた駐輪場以外の場所で返却が可能である。自分で新しい場所を見つけ出したい旅行の際に行動範囲が広げられ、濃い時間を過ごしやすくなるだろう。
[図版出典:HELLO CYCLING](ゆーな)

読んで深まる呑みの味

Found by : まいまい

Connection : 味わう / 気づく



守られてきた酒造たち

アルコール飲料は、主食を潰すという性質上、昔から税などの規制がしっかりとしており、国の統制が出やすいものだそうだ。いくら作り、いくら売れ、きちんと納税したのかどうかを確認させられる。税関様に向けられた書類を見ながら呑んだお酒は、単に買うよりも深みの増した味がした。先代と時間を超えて呑んでいる感覚もある。ただお酒を呑むだけではなく、互いの過去や歴史を記録しながら呑むスタイルもありか。

洞察したこと

守られてきた記録そのものは、業界としては複雑な歴史なのかもしれない。だがお酒を好きな人からしたら、ここまで厳密に守られながら今の一杯に繋がっていることは、とても新鮮でありがたいことだと感じた。また単純に昔の記録を読むだけで、歴史を知るトリガーになっており、社会科見学のような面白さがあった。味ではなく、過程を飲むための冊子やアプローチは、何かしらに取り入れられそうだ。

他の人からのコメント

農園ガーデン空では、阿久根の風景をイラストや絵画・写真パネルで紹介した「阿久根八景」というコンテンツがあった。観光の前後では景色に対する印象がガラリと変わり、前には初めて知るきっかけに・後には自分も行ったという愛着が生まれた。土地や人々の文化を知りながら歩くことは、観光者が自分の体験を振り返ることにもつながっているように思う。（まいまい）

産物の歴史を知ることは、その地域の歴史を学ぶことに等しいと言える。特に、発酵食品は、その土地発祥の素材を使ったり、気候を考慮したりして土地の歴史や風土と共に物語る。鹿児島や阿久根の発酵食品をもっと掘り下げてみれば、意外なつながりが見えてくるかもしれない。（ゆりゆり）

自分の手で詰めるお土産

Found by : まいまい

Connection : 創る / 乾かす

与えられないから持ち帰りたくなる

循環が随所に見られる阿久根の中にも、まだまだ眠っているものがたくさんある。例えばぶどう園では、新鮮なぶどうを届けるために出荷時期以外はぶどうを生かせていない。ボンタンの果実や魚の骨など、加工する機会や動線がないことによって見落とされている部分がたくさんある。そんな廃棄物加工の機会を、観光者向けに生かしたいという声も挙がっていた。

洞察したこと

お土産話もお土産も、ただ与えられるよりも、自分で獲得したものの方が愛着が湧くだろう。また生産者からすれば、加工に必要な人員が不足しているのも事実だ。そこで観光者を人員として確保し、出荷できない果実や生産品を、観光者自らで加工し、パッケージまで作れる体験があれば、眠っていた財産や人に出会う機会が増える。食べたぶどうはジャムに、残した魚の骨はふりかけに…そんな流れが阿久根で体験できたら、思い出も知識も愛情も深まりそうだ。

他の人からのコメント

桔梗信玄餅工場テーマパークにあるグリーンアウトレット1/2では、桔梗信玄餅の詰め放題を行うことができる。お土産としても人気な桔梗信玄餅を自分の手で詰めるという体験、しかも詰め放題となればみんなで盛り上がりながら詰めることができ、その体験も1つのお土産になっている。
[図版出典:桔梗信玄餅テーマパーク](あかちゃん)

カップヌードルミュージアムでは、普段売られているカップヌードルのパッケージと中の具材を自分でカスタマイズすることができるサービスがある。自分で手に取り、自分で選び取って完成したヌードルは世界で一つしかないし、パッケージもオリジナリティに溢れ、残しておきたくなる。（しゅがー）

やさしさの詰まったサービス

Found by : ゆりゆり

Connection : 食べる / 温まる

対応力・提供力が抜群！

次の日のお弁当を急遽12個用意することになり、スーパー「ほっとわん」に突撃で発注した。それにもかかわらず、店員のおじちゃんが優しく受け付けてくれ、注文を快く受け入れてくれた。また、発送業務もしているとあったのでダメもとで聞いてみると、あっさりOKと言われた。それも課金なしでできるとのことだった。翌日、同様のおじちゃんが指定した場所と時間に配送してくれ、「ありがとうございました！」と元気よく言って去っていった。

洞察したこと

前日（配送時間まで24時間切っていた）に突然お弁当を発注できることに驚いた。また、配送料金がかかるのが当たり前だと思っていた者にとって、無料というワードは心を惹かれる。しかし、阿久根ではそれらが当たり前という感覚だ。
受け取りの際も、顧客に対して丁寧にする姿勢が心を掴まれる。お弁当も美味しいが、注文して受け取るまでのやり取りもストーリーとして思い出深く残りやすいのではないか。

他の人からのコメント

群馬県にあるレストラン「パンプキン」。小さい子どもをもつ家族のために家族でシェアできてかつやすい大盛りレストランが今日も続いている。物価が高くなっている今も安く提供されているらしく、商売じゃなくて愛を提供してる感じがする。
［図版出典：食べログ］(ゆーな)

優しさの逆に接客の悪さを売りにしている「the LAZY HOUSE」というレストランがSNSで話題となっている。昼間は丁寧な接客だが、夜になると接客がガラッと変わり接客態度が豹変する。どちらかに振り切った接客は良くも悪くも覚えてもらいやすいのだと改めて感じた。
［図版出典：食べログ］(しおしー)

獲る

人の手で作り、人の手で加工し、人の手で販売する

Found by : てったん

Connection : 育てる / 触れる

阿久根のあたたかさが詰まったボンタン

私が職業体験でお邪魔させていただいたボンタン農家さんでは、ボンタンを人の手で手入れし、皮を剥く際も機械は外皮にしか使わず、内皮は人の手で包丁を使って剥いていた。さらに、取扱店へも取締役自ら赴き、在庫チェックや売れ筋などを店員さんと話しながら調査していた。阿久根の名産であるボンタンは、機械に頼らず、あたたかい人の手によって扱われることが高品質につながっている。

洞察したこと

ボンタン農家さんはボンタンを丁寧に手入れ・収穫されており、職人の丁寧な包丁さばきで皮を剥いたり、状態の悪い個体であっても加工品にすることで活用したりとボンタン一つひとつに向き合って接していた。また、ボンタンを通じて出来上がる販売店や顧客とのつながりも大切にされており、人の手で優しく出荷されたボンタンによるあたたかなネットワークが阿久根市に構築されているように感じた。

他の人からのコメント

人の手で加工するあたたかさは、阿久根のあちこちで実感した。アキノ工芸さんでは、今でも手書きの大漁旗を描き、描ける体験までもセットで街中へ届けている。人の手で「人、時、場所」をつなげ、「手間」を加えることで、離れた人や時代・土地の間（あわい）を紡いでいく…そんな姿勢が、阿久根には根付いている。（まいまい）

大石酒造さんに訪問した際に見かけた光景。焼酎の原材料となる大量のお芋を作業員さんが一つ一つ手作業で加工していた。機械で済ませることが一般的になっている中でも、その一手間でものづくりをする姿勢に感動した。阿久根ではその一手間の愛が溢れている。（ゆりゆり）

浸る

塩湯と海水に触れる

Found by : しゅがー

Connection : 安らぐ / 温まる

海を静かに浴びる

阿久根には海がある。街中に点在する温泉は、海が近いため「塩湯」という特徴を持つ。塩が溶けているため、肌への浸透率が高まり美肌になると言われている。さらに、体の芯から温められるため、湯冷めもしにくい。冬の阿久根を楽しむのにこれ以上有難いことはない。
また、海辺も整備されており、静かに打ち返す波に触れることも可能である。これは海を守っている阿久根の人々の宝ともいえる。

洞察したこと

夏はおおらかな海で波と戯れ、冬は塩湯であたたかさに包まれる。
人は自然のランダム性に惹かれると考える。予想もできない波の揺らめきと、普段とは匂いも触り心地も違う湯に触れることで、新たな安らぎが生まれる。心身ともに洗われ、リラックスすることが可能なのだ。
阿久根では、触覚・視覚・嗅覚を通して、一年中海水と対話することができるのである。

他の人からのコメント

海を夢見る人々の場所。「海を眺めにこの浜辺を訪れるさまざまな人たちが腰かけ、海や空をより身近に感じ、思考を浮遊させるための場所。」海水に触れる以外にも、潮風の音や匂いで海を感じることができる。どれだけ、時間を忘れて海と一体になれるかが重要だと思う。
[図版出典：art setouchi]（しゅがー）

あえて海から少し離れて高い場所から見ると、風の当たり方や海の見え方、海の塩の香りが変わり、違った感じ方になる。この写真の展望台から下を覗けば、海が広がる光景はやはり絶景だ。（ゆりゆり）

〈さばき〉を教わる

Found by : しゅがー

Connection : 料理する / 触れる

技術の継承

10人で魚を大量に釣り、魚の捌き方を教わった。常日頃食べる魚は誰かが捌いており、自身で少し加熱したり味付けしたりすることですぐに食べられる状態になっていることが多い。魚を下ろすだけでなく、捌くという全体的な過程は学ぶ場も少ないだろう。最近は動画やサイトなどで勉強する人も多いだろうが、実際にプロに話を聞きながら教わることができるというのは、大きな価値である。

洞察したこと

食べるために捌くのではなく、誰かに技術を教えるために捌く、教わるために捌くという目的があることが面白いと感じた。魚をよく食べる地域や人々であれば、このような機会も多くあるかもしれない。だが、多くの人がこういった機会はなく、できる人に任せる分業型のように感じる。
野菜や肉を切るような家庭科の授業よりも大きく前進し、大人の家庭科といった感じがして、どこか特別な学びが提供されている。

他の人からのコメント

普段からうどんを打って食べる人はどのくらいいるだろうか。うどんは茹でられ済みのものしか見たことがない人も多いだろう。香川県にはUDON HOUSEという、讃岐うどんについての歴史やセルフ店での動き方を勉強でき、宿泊とうどん打ちまでできる施設がある。普段は食べる専の人でも、このような形でうどんを知ることができる。
[図版出典：UDON HOUSE]（しゅがー）

私の兄が沖縄でお店を構えており、そこでは小さい子向けに魚の捌き方を教えている。今回、阿久根で捌く際に兄が作った動画を見せてもらいそれを参考にしても捌いた。しかし阿久根での捌き教室で動画では伝わりきらないコツや注意点を直接聞けたのでこの機会重要だと感じた。（めい）

預ける

釣った魚を保管する

Found by : あかちゃん

Connection : 待つ / 浸る

この魚たちはどこへ行く

朝7時から阿久根の海で船釣りを行い、魚をいただいた。そしてバケツにとりあえず釣った魚と少しの氷を詰め込んでいただき、船を降りる。お昼を食べたいが、魚の命を預かっている。この魚はどこに預ければいいのか。また貸していただいた(預かっている)バケツはどこに・誰に返せばいいのか。

洞察したこと

釣った魚を食べたいと思っても、捌く場所や冷蔵庫、氷がないと保存ができず、食べようとするまでに鮮度が落ちてしまう。預かった魚の命を無駄にしないためにも、美味しくいただきたい。だが、すぐに調理をすることができないという葛藤。もし冷蔵庫が借りられたら、魚を預けることができ、安心して捌くまでの準備ができる。他にも、捌く場所があったなら、すぐに捌くことができ、新鮮な魚を丸ごと食べ尽くすことができる。

他の人からのコメント

ヤマト運輸のクール便をうまく利用して実質「魚を数日冷蔵で預かってくれるサービス」として活用している人がいる。釣りすぎた時や魚を持って帰りたいけどすぐにはいらない時に後日自宅へ配送する。これは、他者にプレゼントすることも想定可能だ。一度“預ける”ことで、釣った本人だけでなく、他者にも阿久根の良さを届けられるだろう。
[図版出典：ジギング魂] (ゆりゆり)

高校の頃に購入した、魚を生かしたまま保存できるバケツ。釣った魚を入れてバケツ上部のチャックをし、そのまま海に投げ入れれば、流動する水の中で、引き上げる帰り際まで魚は生き続けることができる。釣った魚の最後を、少しでも大切にできる時間として思い出に変わる保管方法だ。(なっしい)

おかえりなさいを迎える動線

Found by : まいまい

Connection : 集まる / 誘う

アクティビティ後は喉と腹がキツくなる

船釣りをして戻ってきたとき、喉の渇きと膀胱が死にそうになっていた。どうしようかと考えていた瞬間、ちょうどピンポイントで水のペットボトルとお手洗いの場を提供された。本気で欲しかったタイミングにピンポイントで提供され、心を読まれたようで感動した。釣りだけでなく、全ての体験系やお出かけ中には必要な動線だと感じる。

洞察したこと

釣りが終わった人、初めて阿久根にきた人、仕事を終えた人…全ての行為が落ち着いたあとに立ち寄り入り乱れる場所として、水源は必ず必要だと考える。せっかく最高のタイミングでもらえたのに、阿久根の湧水でないことも勿体無いように思う。阿久根の湧き水だと銘して岩の間から水が出てきて、手を洗ったりお手洗いをしたり、水を自分で汲んでジュースにできたり…。おかえりなさいの水源があれば、交流も休憩も送り出しもできるのでは。

他の人からのコメント

鹿児島空港に降りた際、空港には足湯があった。これはいらっしゃいもおかえりなさいも迎える。レンタカーを待っている間、みんなが気持ち良そうに足湯に入っていた。休憩と交流を兼ね備えていたと思う。(めい)

旅先での飲み物は、結局コンビニで購入することが多く、長い滞在だと意外にもこの出費が痛手だ。阿久根のように水源のある地では、自ら調達できるスポットがあるとお財布に優しくて嬉しいし、改めて水があることのありがたさに気づける。その発見ができるだけでも旅の価値が高まる気がする。(ゆりゆり)

写す

普段入れない景色で撮れる

Found by : しゅがー

Connection : 入る / 訪ねる

誰かの日常は誰かの非日常である

風テラス阿久根には500名を超える人数を収容できるホールがある。だが、一般の人が気軽に訪れ、ホールやステージ裏を見学して帰るだけ、ということはあまりない体験だったように思う。普段からステージに立たない人たちは、こういった場所は自身から遠い存在のように映るだろう。阿久根にはこういった、誰かの普段の光景が、他の人からすると憧れや物珍しさを感じる場所や場面が多く点在している。

洞察したこと

ステージ上やステージ裏、普段では入ることができない非日常空間を体験したい人は多い。写真家や脚本家など、特殊な専門家だけでなく、コスプレイヤーなどの一般の層でもそういった体験価値や場所を求めている人がいる。他では撮影できない空間や、通常であれば撮影することが難しいアングルなどを提供できれば、大きな強みになると考える。提供者側からすると日常空間だとしても、他の立場の人から見ると、その人自身が求めている非日常空間として価値を生み出せる。

他の人からのコメント

普段目立たない立場の自分たちでも、ステージに立つとあっという間にスターになった気分になる。ただ、演者だけではなく、お客さんも楽しむからこそ、非日常の空間をこの空間にいる人たちみんなで作り上げている。(ゆーな)

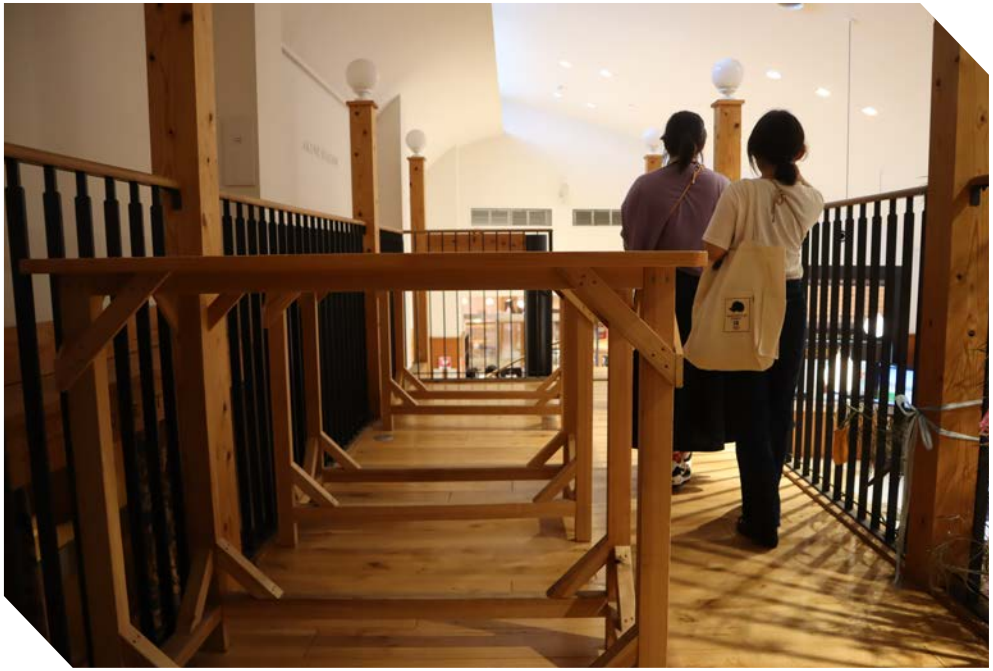
手つかずの自然が残る赤城白樺牧場では「秘密の絶景ツアー」と呼ばれる、レンゲツツジが満開になった時期に開催される人気ツアーがある。
普段という日常でははは行けない非日常の景色だからこそ特別感があり行ってみたくなるのだろう。
[図版出典：秘密の絶景ツアー](しおしー)

待つ

待ち時間を好きなことで自由に過ごせる

Found by : ゆりゆり

Connection : 訪れる / 過ごす



市民にとって〈駅〉の存在

肥薩おれんじ鉄道が停車する阿久根駅は、学生や地元の方が通勤・通学などで訪れる日常使いの場となっている。電車は1時間に1本ペースであるため、駅で長時間待つことが強いられる。ここでは、大きなソファーや秘密基地のような吹き抜けがあったりとゆったりと過ごせる環境である。朝夕は通勤通学ラッシュらしく、市内でも人が集まるスポットの一つだ。学校の登校時間に間に合うためには、朝早くにここを出発しなければならないのだそう。

洞察したこと

「待つ」という行為は、現代人（特に都会で生活をしている）からしたら苦痛なことだと認識される。その時間をいかに有効活用するかで価値が大きく変わってくるのではないか。電車を待つことが本来の目的であるが、もう一つの目的のために行こう!という気持ちになるとよさそう。
早朝に通学・通勤で訪れる人が多くいることから、待ち時間に朝食を食べれるような食堂としての一面をもつ駅になると面白そう。

他の人からのコメント

香川県の高松空港には、うどんの出汁が出る蛇口が2つあり、それぞれ別の種類が提供されている。空港を利用したことがある人はわかると思うが、待ち時間が長すぎる。高松空港では、毎日出来立ての出汁を味わうという、待ち時間を有意義に使う試みがされている。
［図版出典：高松空港公式サイト］（しゅがー）

阿久根駅では、ストリートピアノが設置されていた。駅の待ち時間に、ピアノを弾けるような、そんな自分の好きな時間を過ごせるのは、他にない駅という思い出が芽生え、命が吹き込まれている場所のように思い、有意義な1日のタネになると感じた。
（なっしぃ）

端っこの海岸で発見

Found by : ゆーな

Connection : 尋ねる / 浸る

何も考えずに自然を歩くと

特に何も考えずに、脇本海岸の端を目指して歩いた。そこで見つけた場所。海岸で歩くと、何も考えずに歩けるなと思いつつ、色々な貝や満潮・干潮の様子など、新たな発見を感じるきっかけの場所になる。人との出会いの場にもなる。

洞察したこと

そのときもやもやと考えることが多かったが、無意識に適当に歩くことで、集中的に新しい考えや、自分が何を思っているのかなと理解できたように感じた。普段見られない場所を歩くことで、静かで喧騒感のないのだから、新たな発見のできる歩きになった。
海を見ながら話すと緊張感が薄れ、話したいことが話しやすくなるので、新しい価値観を広げられるきっかけになりやすいかもしれない。

他の人からのコメント

高知県にある砂浜美術館は、4kmの砂浜を頭の中で「美術館」としたもの。砂浜に沿って広がる美しい松原やらっきょうの丘、浜辺に流れ着いた漂流物も作品となる。そして、訪れる人が自分で作品を見つける美術館になる。
[図版出典:砂浜美術館](あかちゃん)

沖縄県の与那国島のさらに先にある「西崎(いりざき)」日本の最西端の島であり、日本は西のみ唯一民間人が自由に行くことができる場所である。
端っこにくるというのはやはり特別な気分にさせる何かがあるのかも知れない。(しおしー)

自転車で向かえる港

Found by : もっちー

Connection : 巡る / 乗る

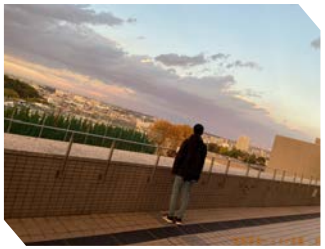
港まで3分の宿

日の入りまでの30分ができた。宿から港までは自転車で3分でつく。急いで籠にタモ網と釣竿を入れて港まで走る。港に着くと映画でしか見ないような紫色に雲を照らす夕焼けが広がっている。日の入りまで堤防で釣りをして、その晩のおかずを調達することができた。

洞察したこと

自転車で数分で港に向かうことができるというのは、釣り人にとってこんなにも好都合な宿は無いだろう。この漁港は青物から根魚まで多様な魚種を狙うことができる神のようなスポットである。実際釣りが好きな私は、6日の滞在期間の中、8回も釣りに出向いてしまった。一方で特に釣りに付随した飲食店や施設などはほとんど無く、釣りを終えた釣り人たちは殆どがそのまま帰路についていた。

他の人からのコメント



大学卒業までもう残りわずかな4年後期、友人とキャンパスの屋上に行ってみると、もし津波が来ても、地震が来ても、「ここなら大丈夫だね」ってたわいも無い話をした。沿岸部の宿などの施設が津波での高台の役目を果たせば、地元住民と旅行者が共に安全な場を共有することで、地域全体の協力体制が築かるのではないかと思う。（なっしぃ）

広島県と愛媛県を結ぶしまなみ海道およびその周辺にはサイクリングロードが整備されており、利用者数は年間で30万人を超えるという。海を見ながら風を切って走ることのできる体験は、サイクリストなら一度はしてみたいものである。
[図版出典:サイクリングしまなみ](もっちー)

訪れる

集まりやすくなる工夫

Found by : きりは

Connection : 預ける / 集まる

図書館の大きな棚は小学生の味方だった

阿久根市図書館に入ると、左側にずらっと棚が並んでいた。棚なのに中身は何もなくなんだろうと思っていると、小学生がいた。その棚はランドセル置き場だったのだ！訪れた時間は16時すぎだったため、もう最後の1グループが帰るタイミングだったが、もう少し早い時間であれば棚にカラフルなランドセルが並ぶもであろう。図書館に入る際に、ランドセルを置き、帰る時に取る動線が小学生のためにも、他の利用者のためにも機能していそうだ。

洞察したこと

小学生のランドセルは重く、背負っている状態では遊びにくい。荷物を預けられる場所があることで、集まり、図書館をより楽しみやすくなる、地域のデザインだと感じた。

他の人からのコメント

家の近くにある遊具のそばには東屋がある。子供は、そこに荷物を置いて遊具で遊んだり、東屋で休憩をする。子供を迎えにきた親は、その東屋で親同士でお話ししたり、子供が遊んでいるのをゆったり見ている。東屋もいろんな使い方をしながら、集まりやすい工夫になっている。
[図版出典:at home](あかちゃん)

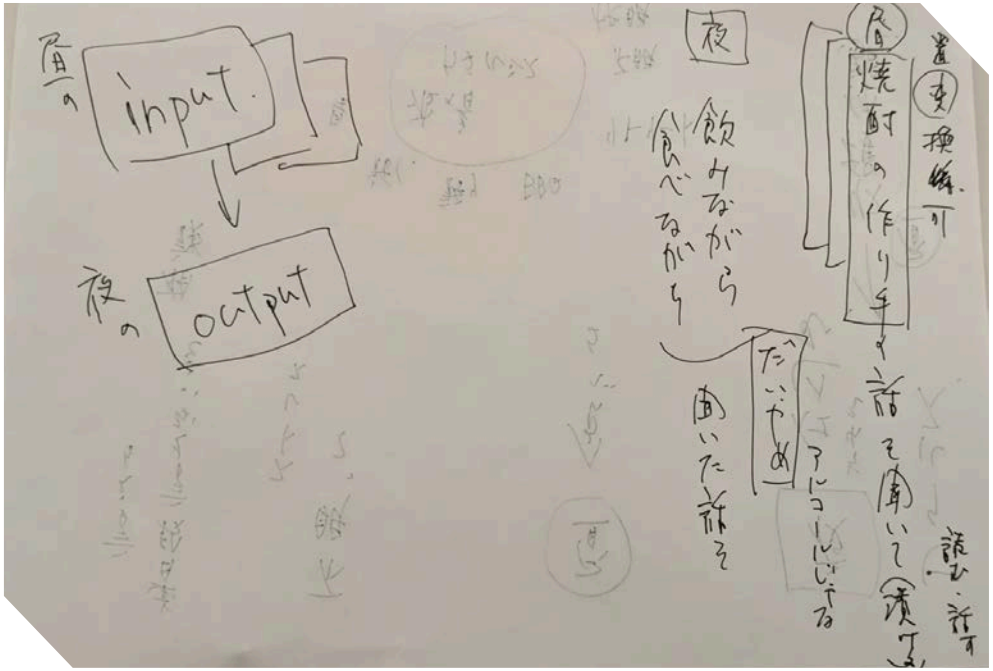
駅のロッカーも図書館の大きな棚と同じで、その場所をより楽しんでもらうために荷物を少なくし、その場所に長くいてもらい新しい場所を発見するための一つの地域のデザインだったのではないだろうか。荷物を預かっていてくれる場所というものはどれだけあっても困らないものである。（しおしー）

聴く

方言から"雰囲気"を知る

Found by : りさ

Connection : 話す / 気づく



「疲れ止め」に付加された中年男性と焼酎という属性

ワークショップ内の会話で、「だいやめ」という方言を教えて頂いた。辞書を引くと「疲れ止め」「晩酌」という意味だそうだ。頭の中で仕事に疲れた様子のOLが缶ビールを飲み始めた。ところが話を聞いていくと「だいやめ」は主に”中年男性が焼酎で"晩酌をすることを意味するということが分かった。頭の中のOLはおじさんに変わり、焼酎を飲み始めた。直訳だけではわからない、方言が持つ雰囲気の存在に初めて気付かされた。

洞察したこと

ただ辞書で引いた方言の意味と、その地域で方言が持つ意味には差があることがある。OLを想像していた私は、女性が晩酌をすることは「だいやめ」とは言わないのか?と聞いたところ、あまり使わないとした上で「だいやめって言うと何か、おじさんっぽい」と答えた。この「だいやめ」に付加された”中年男性が焼酎で"という属性からは、阿久根での晩酌に対するイメージ(一家の大黒柱が仕事から帰ってきて芋焼酎で晩酌をする?)が形成した言葉にならない雰囲気のようなものが感じられた。方言が持つ雰囲気を知ることから、阿久根の文化を知ることができるのかもしれない。

他の人からのコメント

方言というものに懐かしさや可愛らしさを感じる人は意外にも多く、六本木には方言を楽しめるアミューズメントラウンジがある。もうすぐ、10周年を迎えようとしており、一定の支持を集め続けていることがわかる。(きりは)

外道にケアされる可能性

Found by : なっしい

Connection : 気づく / 助ける

この世に価値のないダメ魚なんていない

阿久根新港で釣りをすると、フグが釣れた。未知の堤防で魚が釣れたこと自体に感謝の気分で、高揚感もある。ただこの時「釣りの外道なのであまり良い気分になれない」というのは、何か違和感がある。長時間待って釣れた時の感想としては「要らない」よりも「かわいい」が若干でも勝っていたはず。いざ釣れると「ちょっと飼いたいかも」とか思っている自分がいることに気づいた。

洞察したこと

フグは猛毒を持っているため、フグ調理師免許がなければ捌けない。ほぼ即リリースされる対象の外道であるが、釣った時に「要らない」という感情を拭えるような作用を起こせないだろうか。せっかく釣りを始めた初心者がやっと釣ったのがもしフグだとしても、釣れたこと自体に嬉しい気分になりうるものだと思う。「そいつは要らないから捨てな」で済ませるのは、なんだかモヤモヤする。その時の感動は、飼育してみることで、フグに癒される私たちがいる可能性があるかもしれない。

他の人からのコメント

「フグの卵巣の糠漬け」という料理。猛毒を含む卵巣を3年間もの間塩漬けと糠漬けにして解毒した、石川県の郷土料理。解毒される仕組みは未だ不明の中、伝統的な製法が守られている。外道も方法次第では、ならではの魅力になる。
[図版出典：あら与]（もっちー）

ベラは食べるものではない。そう言われたが、阿久根で食べたベラの刺身はそんな噂も消しとばしてしまうほどの美味しさだった。ベラを食べたことがない私からすると、何でこんなにも美味しい魚を捨ててしまうのか、不思議で仕方なかった。阿久根だからこその美味しさなのかも知れないが。
（しおしー）

ホテルでは味わえない実家感

Found by : しおしー

Connection : 過ごす / 使う

優しさに感謝をしながら使っていこう

拠り所きてん。ここの冷蔵庫の中にはキンキンに冷えたジョッキが置かれていた。上平先生に奢ってもらった美味しい美味しいビールをきてんに置いてあったキンキンのジョッキで乾杯。ちょっとした一工夫があるだけでこんなにも一瞬が楽しくなるのだと思う、けれど、それが当たり前ではなく、用意してくれていることに感謝し、お互いが気持ちよく入れる環境というものを作っていきたいと感じた。

洞察したこと

ジョッキだけでなく食器や料理器具も自由に使っていいと言われており、多くの場面で使わせていただいた。また、きてんにある洗濯機も無料だった。普段だったら有料で使わせてもらうものもなんでも無料使わせてもらった。このような川畑さんの些細な気遣いが今回の時間がより良いものになった一つの要因であるように感じる。使わせていただいたことに感謝し、こう言った時間を自分たちでも多くの人に届けられるようになりたい。

他の人からのコメント

釣り旅行をした際に宿泊させていただいた民泊施設。釣った魚をホテルでは捌けないが、ここでは台所だけでなく、テーブルやお皿まで優しく貸していただけた。実は元々は割烹料理屋で改造して宿泊施設にしたという。実家のような調理場と優しさに感謝して使い、魚も丁寧に捌けた。(なっしぃ)

阿久根市にある塩屋ホステル。ここでは宿泊者のために、いくつか読書本が用意されていた。
ホテルでは味わえない実家感があるから、緊張感もなく穏やかに読書ができる。自分の好きな思想家の本があると、手を伸ばして読みたくなった。
(なっしぃ)

唯一無二を作り上げる

Found by : めい

Connection : 創る / 育てる

何度も重ねたアート

染め物体験で見つけた、作業場の棚。
意図していない垂れたインクたちが、一つのアートとして見ることができる。
別々のものが重なることによって新しいデザインを生み出すことができる。地元民と観光客、同じ時間・場所で関わりがなくても、自分が訪れた痕跡を残すことによって交流する。訪れ、阿久根に触れたことを残すことができる場所があっても良い。

洞察したこと

ボトルラベルを自分でデザインする体験はどうだろうか。旧港に散らばっている箱や縄・貝殻などを組み合わせて正方形のラベルをデザインする。瓶の中身は焼酎でも、新しく開発するジュースや割材でも良さそう。完成したラベルをスキャンし、ボトルに貼り付け持って帰ってもらう。阿久根の素材で作り上げられたラベルの原本はその施設に飾りたい。多種多様な人がそれぞれデザインしたものが積み重なって阿久根の一つのシンボルとなり得て欲しい。

他の人からのコメント

「TAG-COFFE STAN(D)」はドリンクとラベルを自由にカスタマイズできるコーヒーサービス。また、様々なデザインのラベルが並ぶと美術品のようになり、じっくり見たくなる。世界に一つのボトルラベルを作る需要はあるのでは…!
[図版出典：TAG-COFFE STAN(D)]　(ゆりゆり)

施設に寄せ書きや思い出、イラストなど、好きなように落書きができるカフェがある。
常にアップデートされていく芸術の中で命を吹き込まれているその場所は、他にない唯一の施設を作り上げていた。
[図版出典：フムフムハック]（なっしぃ）

自然の住民と一緒に食べられる

Found by : まいまい

Connection : 獲る / 食べる

トビが怖くて食べられない!?

晴れた日は、海辺でご飯が食べたくなる。お弁当を買って、わざわざ海辺に行き、ご飯を食べる体験は格別のものだった。阿久根の海沿いでご飯を食べる文化は、どんどん浸透させていきたい。しかし1人で食べようと思った時、どうしても「外で食べたいがトビ(をはじめとする生物様)が怖い」と思い、渋ってしまった。恐怖から「外で食べる」という選択肢が失われてしまったことは、非常にもったいない。

洞察したこと

…ではこれが屋根付きの安全な休憩場所になればいいかというと、そうとも限らない。空間を区切ったり無理に場を作っても、偶然が起きにくく魅力的に感じない。また自分で座れそうな場所を見つけ、選んだ土地に工夫して座るアスレチック感も、その土地を理解する重要な面白みだったと振り返る。食べ始めると、自然空間だからこそBGMが要らないことに気がついた。黙っていてもしゃべっていても気まずくならない食事体験が味わえ、とても新鮮だった。つまり仕切りのない空間は、海辺ご飯の魅力の一つ。自然を分断せずに食を楽しめる方が、綺麗なカフェを作るより、よっぽど魅力的だ。

そこで「トビに取られないよう隠す」という方向性ではなく、むしろ「トビをはじめとする自然の住民が来る」という可能性そのものを尊重し、一緒に楽しめる体験を味わいたいと考えた。物理的に持っていかれること自体は、生物として自然なことだ。攻撃を断ち切るのではなく、恐怖から選択肢が消えないようにしたい。

またトビ以外にも、阿久根には自然で暮らす住民と常に共存しあっている。共に生きていることに気づけ、ふとした時に隣にいても怖く無いような、むしろそれが思い出となるような、そんな経験ができれば、外で食べることの意味も変わってくるのかもしれない。

他の人からのコメント

軽井沢にある「GAFLO Cafe」には屋根がない。カフェの隣には川が流れていて、水の音や鳥のさえずりが聴こえたり、非日常の体験ができる。晴れてる日限定の営業だそうで、それもまた特別感を感じさせられる。
[図版出典:たびらい](ゆーな)

生じゃない魚の良さを発見したい

Found by : ゆりゆり

Connection : 料理する / 変える

魚の次なる姿

新港の市場には魚を貯蔵する巨大な冷蔵庫（－20℃）があり、出荷するのに余った魚（規格外の魚など）を乾燥させて保存しているものが大量にあった。見た目からして魚くさい匂いが強い気がしたが、新鮮で良い環境で保存されているからか、生臭い匂いはせず、むしろ良い出汁の香りがした。魚の姿が崩れつつも、少し残っている状態が珍しい光景だ。また、魚を部位ごとに分解して保存している。

洞察したこと

生で無理なら乾いて違う形になる。魚は生の状態から別の工程を付け加えると違った姿・特徴を持つようになるのが面白い。加工してから出荷する魚で出た必要の部位を乾燥させることで、漁師の勿体無いの精神や魚に対する敬意があるのではないかと感じた。本来なら捨てるものを新しい形にして魚の活躍の場を広げるための第一段階を提供しているように見えるからだ。これを自由に持って帰れるようにしたら、自己流でアレンジしようと思う人がいるかもしれない。個人的に、これで出汁とりたい…

他の人からのコメント

カルシウムが豊富なうなぎの骨を塩で唐揚げにしたお菓子「うなぎボーン」。ビールやウイスキーといったお酒にも合うことで大人にはおつまみとして人気である。子供も、バリバリと食べられることで健康にも繋がりとても人気。
[図版出典:うなぎボーン](あかちゃん)

賞味期限が切れたサバを切り身にし、釣り餌に使うと魚がこれでもかというくらいたくさん釣れる。生じゃない魚は加工されない場合、じきに腐って捨てられる運命なのだろうか。その「捨てる」を、エサにしたり、コンポスト材にしたりするのは、水産資源を大切にできるきっかけかもしれない。（なっしぃ）

待つ時間は話す時間

Found by : しゅがー

Connection : 話す / 学ぶ

販売者と消費者の交流

お団子屋さんで団子を買い、焼いてくださっている時にお話ししてくれた店員さん。そのままお客さんが外で待っているのではなく、会話を通して地域のことについて学べる良い機会を頂いた。普通のお店やチェーン店ではこういった会話は発生しない。個人が主体性とプライド、愛着を持ちお店で働いているからこそ、このような巡り合わせや交流が発生するのではないだろうか。

洞察したこと

待ち時間は、お客さんと提供者の交流の時間になりえる。阿久根の人々の人柄の良さや地元愛は、話をすることでよく伝わってくる。一度阿久根を訪れた人が阿久根を知り、馴染みの街として感じるためには、やはり現地の人と話をしたほうがよい。話すだけではなく、阿久根の特産品や地域の背景への理解も深まる。この機会を別の場所で孤立させるのではなく、待ち時間と組み合わせることで大きなチャンスとなると思う。

他の人からのコメント

阿久根市にあるそうめん流しの「大野庵」では、入店までの待ち時間に魚の餌あげられるようになっていた。顧客としては待ち時間を退屈することなく過ごせて、店としても餌代を浮かすことのできる相乗効果を生み出していた。（もっちー）

珈琲店にて。待っている時に、自発的にその人のことを知りたいと思うなど、話すきっかけがあると、販売者と消費者がその時間に話すことができる。そういうきっかけが事前にあると、地元民と旅行者とが交流できる大切な時間になるかもしれない。（なっしぃ）

祈る

市民の小さな願い

Found by : きりは

Connection : 守る / 創る

ぶえん館のサンゴ

食事処ぶえん館の窓側奥のテーブル席の前に、5円玉がたくさん刺さった珊瑚があった。珊瑚の隣には折り鶴と鳥居がある。きっとなにか縁起のいいものなのだとわかった。こちらは、既製品として売られているというよりは手作りのもののように見えた。海が近く、商店なため、安全や商売繁盛などの願いがかけられていそうだ。

洞察したこと

願う、祈ることは日常であり自然と行われていることだが、私にとっては貴重なことで日本人らしい精神であるとあらためて感じた。大きくても小さくても、歴史があるないに関わらず、等しく願うのだ。
阿久根市では海に関連する願いの場が生活の身近ないたるところにあった。海と人が共存する精神が昔から培われてきたように考える。

他の人からのコメント

北海道千歳市には、サケを捕獲している千歳川の近くにサケ神社と呼ばれるサケの慰霊碑が存在している。全国各地に同様に名産の生き物に関する慰霊碑があり、古くから日本では感謝を忘れずに食べる対象と向き合ってきたのだと考えらえる。(もっちー)

この街では、無形民俗文化財として木刀や真剣を使い、街の地域ごとに流派があり、十数個ある剣術の型を子供から大人までに教え、街の神社を巡って披露していくという剣術文化が古くからある。歴代からある文化継承と街の安全、繁栄といった市民の小さな願いが隠されていた。(なっしぃ)

Part 2　新しい観光拠点から生まれる11のストーリー

阿久根がもっと、好きになる。
そんな未来への出港所。

私達のストーリーでは、青果市場跡地・旧港を**「あくねハーバー」**と表しています。
Harborは「港」や「隠れ場所」を意味する名詞であると同時に、「保有する」という動詞としても使われる単語です。
物理的なモノだけでなく、感情や考え・遺伝子といった、概念的な保持も表現します。

海に面した港でありつつ、これからの阿久根に対する願いや、隠れた願望も集まる場所。
阿久根の遺伝子が、親しい人に・新しい人に届き、命の巡るきっかけとなる場所。
そして、目的地の名詞としても、誰かを動かす動詞としても機能する、新しく懐かしい場所。

そんな場所であったら…と考え浮かんだ単語が、あくねハーバーでした。

11のストーリーが生まれたことは、青果市場跡地・ハーバーの可能性が、無数にあることを示しています。
これは可能性の、ほんの一部。複数のストーリーを通じ、阿久根の楽しみ方や面白さを、共に掘り起こしていければと思います。

Episode 01

魚捌きを教わる寺小屋風シェアキッチン

魚と深く向き合う学び屋

魚の捌き方を教わり、自らの手で捌いた魚を食べる体験を提案する。プレイヤー自身の魚にまつわる新たな発見と阿久根の魅力の一つでもある「海」を五感で堪能できることを目的とする。

＜背景＞

魚釣り後の滞在場所が欲しい：阿久根は釣り人が多くいる。しかし、一通り魚を釣り終えると颯爽と帰ってしまう。すぐに魚を捌く場所があれば、新鮮な魚を食べられることに魅力を感じる人は多くいるだろう。

魚と接する機会を作る：スーパーで販売される魚は、すでに捌かれた状態で楽になった一方で、魚と向き合う接点が減ってしまった。「捌く」という行為が、貴重な体験になりつつある今、そのきっかけづくりとして、魚捌き小屋を提案する。

そして、全国的に魚の消費量が減少している中、若者を中心に再度魚への興味・関心を持ってもらえることを願っている。

引き寄せられる人

自分で釣った、あるいはもらうなどして手に入れた魚をどう処理してよいのかわからない人、釣ってから新鮮なうちに食べたい人、魚を初めて捌いてみたい人はたくさん存在する。

体験できること

1.　寺子屋風シェアキッチン「うお所」での調理

施設には、誰もが自由に利用可能な寺子屋シェアキッチン「うお所」がある。必要な調理道具や用品は全て完備されているため、魚釣り後や捌きたい時に手ぶらで気軽に立ち寄り、調理ができる。

教わり捌く：捌きを学びに来た者は、実践的に捌き方を習得できる。

シーズンごとに阿久根で獲れる魚の種類も違うため、体験の時期によって捌ける魚が違う。一度だけでは終わらない体験を期待できる。

捌きのプロは、他者に教えることで日本の伝統的な魚文化の継承ができる。ここで活躍するのは、地元の漁師や漁業関係者など阿久根の漁業に携わってきた人であって欲しい。肉体的な仕事ができなくなっても、人一倍豊富な魚の知識と技術を生かしてもう一つの活躍の場となってほしい。

2.　あら・内臓等の廃棄部の回収、リサイクル餌の購入

この施設では、捌く過程で廃棄する魚のあらや内臓をリサイクル加工して魚の餌を生産する。施設での捌き体験時はもちろん、家庭で出たものも回収する。生産した餌は、釣り体験前に購入することが可能である。

生まれる新しい出会い

捌き方を教えてもらうという観点から、漁師や漁業関係者などの捌きのプロとの会話で接点が生まれる。阿久根で獲れた魚を捌きながら、魚や阿久根という地の特徴を知るきっかけが生まれる。また、捌く前の魚の姿を目にしてから自分の手で姿を変えていくことで、新たな魚への興味・関心を引く。魚をきっかけに、マニアやそうでない人も気軽に集まり繋がれる場所になることを願っている。

ストーリーのイメージ

シェアキッチン「うお所」
(Generated by firefly)

魚の廃棄部をリサイクル加工した餌
(Generated by firefly)

関連するタネ

P.106

〈捌き〉を教わる

技術の継承

Connection : 料理する

P.41

ぶえんな魚を食べられる

ぶえんな魅力のジレンマ

Connection : 触れる/ 育てる

Episode 01

アクティブな経験で思い出すあくね

夕方、今日の晩ご飯の買い出しに行く。魚好きな私は、必ず今日の品揃えを確認する。都会のスーパーで見る鮮魚コーナーは、もうすでに”魚”の姿で見ることはほとんどない。魚の情報は、パックのシールにある商品名しか確認できず、魚の本来の姿は切り身を見て想像する。

「この魚、捌かれる前ってどんな姿だったんだろう？自分で捌けたらかっこいいだろうなぁ」

家に帰り、魚の捌きを動画で見てみる。動作やコツを頭で理解できたつもりだが、実際にやってみると、骨と身がうまく切り離せず全く綺麗にできない。いくらプロからの情報を得ても何が悪いのかわからず、1人では限界がある。

「あぁ、誰かに直接教えてもらえたらな…」

そんな場所があるのかを調べてみると、「うお所」というワードがヒットした。

魚捌きのプロに教えてもらいながら魚が捌ける、唯一のシェアキッチン。どうやらこの施設は、鹿児島の阿久根市にあるらしい。しかも、道具や必要なものは全て揃っている。こちらで準備していく必要がないのは、気軽に行けてありがたい。

「ここで魚捌きを学びたい！」

私は好奇心に駆られ、早速阿久根市に飛び立った。

そして、ついに広大な海が目の前に広がる「うお所」にたどり着いた。

施設に入ると、漁師さんらしき格好のおじちゃんがいた。魚について熟知していそうな風貌だ。ここの施設で捌きを教える人だそう。

ここで魚を捌く授業を受けたいと伝えると、2つのコースを提示された。

一つは、近くの港で自ら魚を釣ってきて、それを捌くコース。同時に釣り体験までできるなんて、一石二鳥な気分だ。しかも、もう一つは、ここの水槽にいる魚から選び、それを捌くコース。魚は今日の早朝獲れたもので、新鮮だ。本来なら釣りもしてみたいところだが、今回は1泊2日の旅で時間が限られているため、渋々後者のコースを選んだ。

早速、魚の捌き授業を開始した。まずは、着替えだ。汚れないよう防水のツナギに黒い長靴。形から入ることができるのは、特別感と今から「捌く」というワクワク気分をさらに高めてくれる。

そして、魚選びだ。大きな水槽から今日の相棒を選ぶ。私が選んだのは、赤い鱗が特徴の魚だ。漁師さんによると「ベラ」という魚らしい。季節は秋。この時期は、よく釣れる魚だそう。

ついに、捌きの時が来た。まずは、鱗をガシガシと剥がす。力強く器具を引っ掛けないと鱗は中々剥がれないので、意外なところで力仕事があると発見する。次に、包丁を入れて身を切っていく。漁師さんが「この魚の大きさなら3枚おろしがいいよ！」と教えくれ、お手本を見せてくれる。

包丁の歯は、斜めに急角度をつけてスッと手前に引くのがコツらしい。普段の料理をしていても全く手付きが違うので、初心に帰った気分だ。だが、骨と身を綺麗に剥がす工程は、簡単なようでとても繊細な難しい作業だと実感した。苦戦していると、

「骨とギリギリのラインで歯をあてて包丁を引くと綺麗に削げるぞ！」と教えてくれた。

その通りに実践すると、さっきよりも綺麗に削げる。こうして自分に合ったアドバイスがすぐにもらえるのは、上達するスピードを高めてくれて嬉しい。そして何より、できるようになっている自分に成長を感じられることが楽しい。

普段なら捌かれた魚を調理することが多いが、捌く工程には本当の意味で魚の命と向き合う大事な瞬間な気がする。本来の魚の姿を見てどんな魚なのかを確認し、その特徴に合わせて捌いていく。こんなに魚のことを考えながら包丁を持ったのは初めてだ。

3枚おろしを終え、目の前に広がるのはいつもスーパーで見る魚の姿だ。 あんなに大きかった魚も、過食部だけにするとコンパクトな印象だ。 それだけ捨てられる部分が多いのだろう。捌いてみないとわからなかった事実がここで発見できた。

切り落とした不要部分（内臓など）は捨てるのかと思いきや、加工して釣りの餌として再利用し、販売しているそう。次回来たときは、この餌を使って釣りをしたいな。

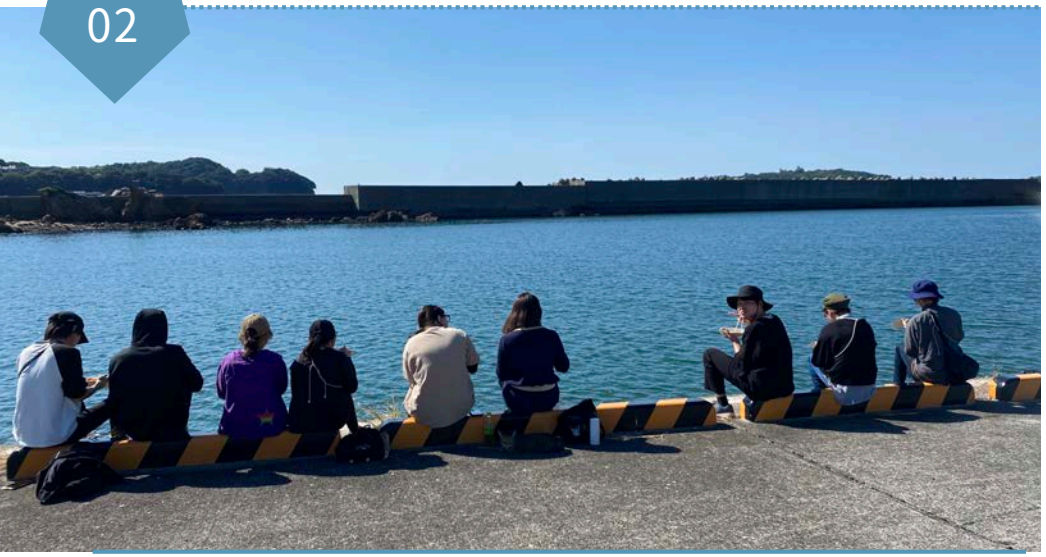
一口サイズに身を切った後すぐに「自分で切った切り立ての刺身、食べるか？」と漁師さんが醤油を用意してくれた。さっきまで生きていた魚を最も新鮮な状態でいただけるのは、なんて贅沢なことだろう。食べてみると、身がプリップリで臭みが全くない。魚好きにとってはたまらない感動的な瞬間だ。

全工程を終え、私の人生初捌き体験が終了した。大人になって直々に教えてもらいながら学ぶ機会は少ないが、童心に帰った気分だ。 失敗から学ぶ経験は、また捌いてうまくなりたいというモチベーションを高める。それと同時に、ベラの知識も得られたことで、知っている魚の種類が増えたことも嬉しい。その旨を漁師さんに伝えると「季節によって獲れる魚は違うんだ。また違う季節に来てくれたら、また別の種類の魚で捌けるよ」と言ってくれた。私は、「是非！またここに来て別の魚で捌きを学びにきます！」と伝え、魚捌きのプチ修行が終了した。

あとがき

私自身、旅をしたときに印象強く残るのは「体験」した思い出です。阿久根の旅でも、手足を動かしてやってみた経験は、頭の中で真っ先に浮かびます。その一つが釣り・捌き体験でした。特に、「捌く」ことに関しては一度もやったことがないため、直々にプロから教えていただくことは本当に贅沢で貴重な経験だと感じました。滅多にできないからこそやってみたい！と惹きつけられ、人に自慢したくなるアクティビティでした。また、阿久根には釣り人が多いですが、釣り後にはすぐに去ってしまうと知って、寂しさを感じていました。釣りや捌きを通して阿久根に滞在する時間を満喫できれば、この場所らしい思い出を作ることができるのではないかと思い、このストーリーを書いてみました。

Episode 02



朝ピクニックから始めるいちにち

心に風を通す体験

あくねハーバーの一角に佇む、『朝に営業するお弁当屋さん』を提案する。

私にとって朝のエネルギーは、その日の気分を上げてくれるものだ。適切な睡眠時間、日差し、ストレッチ、食事。エネルギーは様々な要素から取り入れることができるが、特に睡眠と食事が大きな割合を占めるのではないだろうか。

今回の調査で、阿久根に長期滞在をした際、普段とは違う環境での生活や充実したスケジュールに対して、十分な睡眠を取れなかった。しかし、毎朝、何かしら口にすることで足りなかった充電が満たされ「今日も頑張ろう」と思えたのだ。

またお弁当というのは、食べる場所が非限定的である。自分の好きな場所とタイミングで食事をとって良い。阿久根には開放感があり、深呼吸ができる場所がいくつもあった。観光客に少しの時間でも立ち寄って欲しい。そしてこのような今回の提案に至った。

引き寄せられる人

ここには幅広いターゲットが引き寄せられる想定だ。この施設があることにより観光客は朝でも阿久根を楽しむことができる。これから増えると想定される配達運転手はコンビニ以外の朝ごはんを食べることができ、地元の人は普段とは少し違う特別感のある朝を過ごせるのだ。また、釣り人も釣りをしながらの軽食として味わうことが出来そうだ。

体験できること

1. 阿久根のロケーションを堪能できる

観光客にとっても地元民にとっても、海辺や公園、防波堤など自分で見つけた特別な場所での朝食は、日常の忙しなさから離れ、リラックスとエネルギーを与えてくれる時間を得ることができると考える。

2. 阿久根の伝統「三月十日祭り」を擬似体験する

三月十日祭りでは、皆が重箱にご飯を詰めてピクニックランチをする伝統がある。その日以外でも祭りにちなんだ重箱風お弁当などを買うことが出来れば阿久根にしかない体験をできるのではないかと考える。

生まれる新しい出会い

1. 観光客と阿久根の行事

観光客が阿久根の伝統に出会い擬似体験する機会を生み出せる。

2. 景色

観光客は新たな景色に出会える 。地元民は普段しないことをすると見えていたものが違う顔で見えたりする。

ストーリーのイメージ

あくねハーバーに併設する小さな店

自分で選ぶ自由席

関連するタネ

P.27

自分たちで選んだ場所で食べる

地元猫と並んで食べる

Connection : 食べる / 歩く / 親しむ

P.58

そこにしかない伝統行事を体験する

三月十日祭り

Connection : 過ごす / 守る / 食べる

Episode 02

時間めいっぱい楽しむ阿久根

「明日の朝に渦潮見に行こうよ！」今私は友達と阿久根にいる。1週間南九州の旅として、阿久根に1泊2日で滞在することになった。今日は1日目の夜。出発する前に黒之瀬戸で見れる渦潮を見に行きたかったのだ。友達も私と同じ気持ちで、「いいね！早起きしようね！」と約束した。

ーーそして今、私たちは車で黒之瀬戸に向かっている。

朝の阿久根は空気が透き通っていて青白い。太陽の光が海に反射し目を窄ませる。車の窓を開ければ心地よい風が吹き込んできて、気持ちが良かった。

黒之瀬戸に到着し、渦潮が発生するのを待っていると、突然白色の線で小さな渦が描かれる。山育ちの私にとってはこれまで見たことがない自然現象だった。友達と感動しながらあれやこれやと感想を言いあっていると、グゥ～とお腹も会話に参加してきた。友達はコンビニでおにぎりでも買う?と提案てくれたが、私は旅行中はその土地ならではの食事を楽しみたいと考えていた。

「もしかしたら近くに営業中のお店があるかもしれないよ」

と私はスマホでレストランを検索する。

「あっ！ちょっと車を走らせるけど、『あくねハーバー』っていう場所が朝から営業してるみたいだよ！予約はしてないけど行ってみる?」

私が提案すると、友達も喜んで応じてくれた。

私は普段朝食を食べないことが多い。時間の都合や食欲がないからという理由で抜いてしてしまうのだ。しかし、旅行先では朝になると不思議とお腹が空いてしまうのだ。

旅先で食べる朝ごはんはなんだかワクワクする。習慣化されていない非日常を過ごすことができる。そんなことを考えながら、私たちは『あくねハーバー』へ向かったのである。

あくねハーバーに到着すると、コンクリート造の平家が横長に佇んでいた。建物の手前には広場が併設されており、人が気軽に集まれるような空間になっていた。

「あ！ここだ！テイクアウト限定…なのかな?」

建物の一角に 営業中の文字を見つける。そのお店は、お弁当屋さんだった。お弁当をだけでなく手軽に食べれるようなおにぎりも売っている。

「え！なにこれ！観光客おすすめ?重箱風弁当…！?」メニューには迷うような内容が詰め込まれている。

「そちらは阿久根の伝統文化、三月十日祭りをオマージュしたお弁当になります。」

どれにしようか迷っていると奥から店員さんが話しかけてくれた。

「阿久根には漁業の豊作を祈るお祭りがあるんです。その日みんなで1人用の重箱を持ち寄ってピクニックランチをするんですよ。….阿久根には旅行ですか?」

はい。と答えると

「重箱風弁当は観光客の方にも阿久根の伝統を知っていただきたく作りました。結構ボリューミーかと思いますが案外ペロリと食べれてしまいます。朝のエネルギー補給にもってこいです」

ニコッと説明してくれた。

確かにバランスの取れた彩りあるお弁当だ。1人用の重箱が特別感を一層際立てる。

朝からこんな豪華なの食べれていいの！?！?凄いね！とテンションが上がる。

私たちは、重箱風弁当を注文した。

「ここ、朝しか営業してないないんです。昼から開くお店は沢山ありますけどね。」

待っている間に店員さんが教えてくれた。

「朝ごはんは大事です。コンビニじゃない阿久根のご飯を、お二人みたいに朝に出発してしまう方達にも楽しんでもらいたいんです。

お弁当って自分の好きなとこで食べれるじゃないですか。もちろんドライブしながら食べれるおにぎりでもいいですし、阿久根の朝の景色を楽しみながらでも。お店の前には広場がありますし、すぐ歩いてある港公園も海を眺めながら座ってゆっくり食べれることが出来ます。どこで食べるかは自由です。自分たちで見つけた特別な席で楽しんで召し上がってください。」

店員さんは、好きを薦めるようにキラキラした目で沢山お話ししてくれた。

ありがとうございますとお礼をし、車に戻る。

ーーさてどこで食べようか。出発するまでの時間はまだある。せっかくだしということで、少し歩いて食べる場所を探すことになった。

あくねハーバーの目の前には今は使われていないセリ市場があった。そこを横目に海の方へ歩いていくと防波堤を見つけた。

太陽に反射した光がゆらゆらと揺れる。私たちは顔を見合わせ、自然と座っていた。

「いただきます。」

阿久根の海を見ながら、お弁当を広げる。

まだ強くない日差しとそよそよと頬を撫でる海風が気持ち良い。目の前に水平線が見える朝ごはんは初めてだった。

観光スポットというより、日常の喧騒から逃れられる場所だ。

周りには釣り人や散歩をしている人、戯れ合う猫。それぞれが今日の朝を過ごしている。

なんて最高なロケーションでの朝ごはんなんだろう。

自然と元気をもらえる。今日も1日頑張ろうと思える。こんな気持ちになれる体験が阿久根にあったなんて。自分達だけの秘密にしていたいような。皆んなに教えたいような。

今日はなんでもできるような気がした。

あとがき

ホテル泊まって朝食なしを選ぶとだいぶ後悔します。コンビニで済ませるのはなんか負けた気がします。でも朝から空いているお店は今ではとても珍しい。珍しくなってしまった背景はたくさんあるのでしょうが、今回のストーリーはそれを無視して書かせていただきました。ただ自分が阿久根に訪れた際にしてみたかったことを、自分の体験談と少し交差させながら・・・。まずは地元の人から愛されないとという気持ちはあります。私たちはただ案を出すだけですからね。でも5年後10年後と過ぎていく時間の中で、一瞬でもこのストーリーがアイデアの種になればと思います。

オリジナルだし汁を波打ち際で飲む

だし汁と塩湯の足浴

その日に獲れた新鮮な魚を使っただし汁の提供と、塩湯・海水を使った足湯スペースを提案する。 全身で阿久根の海を堪能できることを目的としている。

だし汁工房では、その日、阿久根市で獲れた新鮮な魚を使った、その時にしか味わえないだし汁を提供する。魚のだしは、肉や野菜と違って比較的短い煮込み時間でオリジナルだし汁を作ることができるという強みがある。 訪れる度に風味が少しずつ異なるだし汁を味わうことができる。 近くの施設などで不要になった魚や、アラを再利用することも可能である。

塩湯・海水の足湯スペースでは、その人の体調やその日の気温によってそれぞれを最大限楽しむことができる。 全身が浸かるような温泉施設や海水浴場の設備を要することなく、阿久根の塩湯と海水を堪能できるようにする。

引き寄せられる人

朝の気温が低い時間帯から活動している人や、魚を釣ったがどう調理すればよいかわからない人・その場で味わいたい人をメインの対象者にしている。

だし汁を作っている間はすこし時間がかかるため、塩湯や海水の足湯スペースを使ってもらうことで、阿久根市民と来訪者の接点を設け、阿久根について親しみを持ってもらう場としたい。

体験できること

1.　だし汁工房

ここでは来訪者自身が釣り上げた魚を用いて、店員と共同でだし汁を作っていく**自分だけのオリジナルブレンドだし汁コース**と、市場で使われなかった未利用魚を用いた、**その日だけの特製だし汁コース**の展開が考えられる。 普段は粉末やパックでだしをとる人も多くなっている今、魚からとっただしを味わうことができる場は貴重であると考える。

2.　塩湯・海水の足浴

足だけで、阿久根市が誇る足湯や穏やかな海水の波を楽しめる。 全身で浸かることがないため、着替えの準備や入浴への時間・手間を軽減し、家族で気軽に楽しむことができる。 また、通常の足湯ではなく、脇本海岸での静かで穏やかな波の流れを再現し、海にいるようなリラックス効果を生み出したい。 波打ち際で足を浸けている時に椅子はなく、長い間波を楽しめない。そのため、座りながらも波を体験できる場所をつくりたい。

生まれる新しい出会い

旅行者は、分単位で予定を計画することも多くなっている。 旅行の計画を立てるとき、スケジュール帳に詰め込みがちである。 だが、ここではゆっくり、自分の家で過ごすような安らぎと、あえて時間が必要な煮込み作業を行うことで時間を忘れるような設計を行う。 こうすることで、同じ場所に訪れた者と、偶然繋がる機会を増やせるようにする。

ストーリーのイメージ

だし汁からの発展・拡張性

休める足湯

関連するタネ

P.51

〈だし汁〉を飲みたい！

食べるだけじゃない、魚の味わい方

Connection : あたたまる / 味わう / 飲む

P.105

塩湯と海水に触れる

海を静かに浴びる

Connection : 浸る / 安らぐ / あたたまる

Episode 03

きっちり系の私が、のんびり過ごす阿久根

私は、「旅行を計画するときに入念に下調べして、分単位で調整する。 予定通りに動かないとイライラしちゃう」タイプの人間。その私が、初めて計画通りにいかなかった旅の話をする。

あれは夏の、湿度は低めで温度は高めの1週間のこと。 数週間前から綿密に予定を組み、脳内リハーサルも完璧で、一緒に行く友人の大満足の顔までシミュレーションした鹿児島旅行。鹿児島空港からレンタカーで北上し、車中泊を繰り返しながら鹿児島県全体を回る計算だった。

1日目は鹿児島市内をみて回り、2日目にいちき串木野市でまぐろを堪能し、3日目に阿久根市を訪れた。朝5時半から、船釣りをさせてくれる方がいて、早起きして準備を整え、同行した。 漁師さんは、やはり海の男という感じがして、勇ましくも頼りになる人だ。 人生で初の船釣り。 そもそもこんな形の船で釣りをしたことはなく、緊張と楽しみで胸がいっぱいだった。 朝早くからの眠気にも打ち勝ち、慣れない手つきで餌を仕掛け、糸を垂らす。魚がかかる瞬間の、何と誇らしい気持ちになることか。幸いにも天候と運に恵まれ、海と私の心は荒れることなく、魚を5匹ゲットして港に戻った。

予定通り、この魚たちを食すべく、近くの港にある「阿久根　湯の工房」に向かった。 ネットで調べた感じ、魚を持っていくと、その場でだし汁を作ってくれるらしい。 海の上で冷えた体を温め、釣れた魚まで美味しくいただけるなんて、なんと素晴らしいことだろう。ここの滞在予定時間は2時間である。まあいけるだろう。

「こんにちはー。ここで、釣った魚をだし汁にして飲めるって聞いたんですが、やってますか」

だし汁を作る場所だけあり、店の様相は和を醸し出している。 木が多く使われており、あたたかみを感じる。 すでに美味しそうな匂いと同時に、海の潮の匂いと、波が静かにうちつける音がする。 海が近いから、聞こえてくるのだろうか。

「はーい。やってますよ。お客さんも一緒に作りますか？」

一緒に作れるの？旅先で店員さんと料理が？面白そう、と友人と二つ返事で料理をすることにした。 出先で料理を作ることなんて滅多にないし、魚からだし汁を作るのなんてレアすぎる。普段は茶色い粉末に全てを賭け、味噌汁を作っているため、ちゃんとだしをとるのなんて小学校の家庭科ぶりである。 私たちは、広いキッチンに通されると、手洗いやエプロンなどの衛生処理を済ませ、言われた通り待機した。お店の人が慣れた手つきで魚を捌いていく。身と骨、頭の部分が綺麗に分けられ、調理器具と共に並べられた。

「じゃあここから一緒にやっていきましょう」

魚のアラ部分だけを別の容器に移し、塩をまぶし、そのまま少し待つ。その間、身の部分を塩焼きにしてもらい、友人と一緒にいただいた。塩だけでこんなに美味いとは。だし汁にさらなる期待が募る。塩がまぶされたアラに熱湯をかけ、鱗などを除去しつつ洗っていく。 大きな鍋が用意されており、そこに先ほどのアラと、アラがかぶるくらいの水と料理酒を入れて火を点ける。 だんだんアラが煮出され、白いアクが溜まってきた。 丁寧にアクを掬い、だし汁を育てていく。この時点でいい匂いがする。 そのまま弱火にし、コトコト煮詰めること15分。 だし汁の完成である。 余っていた切り身を完成直前に入れてもらい、魚の旨みだけで構成されただし汁を受け取った。何ていい香りなんだ。

「裏に海水の足浴できる場所を用意しているから、よければそこでお召し上がりください」

友人と二人でお礼を言い、だし汁を移し替えた小さめの鍋とお椀とお箸を持って、裏に出てみる。 何人かすでに先客がおり、私たちと同様だし汁を味わっているようだった。 飲食スペースは、20席ほど場所があり、足湯スペースが用意されていた。 日陰になっており、半屋内みたいな感じである。 雨の日でも夏の暑い日でも十分楽しめそうだ。私たちは足湯スペースの長椅子に腰掛けることにした。だし汁を机の上に置き、靴と靴下を脱いで裸足になる。 こんな暑い夏でも、足湯ができる場所があるんだなあなんて考えながら、つま先を着水させたとき、「つめたっ」と声が出た。え？海じゃん。 足をどぼんと浸けたとき、水とは違う滑らかな触感が伝わってきた。海水だ。こんな暑い夏に、こんな形で涼めるとは…。しかも波打ち際のように、波が去っては押し寄せてくるのである。こんなの、海じゃん。どうやら海水の排水量をランダムな間隔で変えているようだった。海水がゆっくりと押し寄せてきて、つま先から足首までを飲み込んだかと思うと、すーっと引いていく。 体が涼んでいく。しばらく感動と海水に浸っていた私だったが、だし汁を見て現実を思い出した。 飲まねば。 お椀に注がれた透き通っただし汁をじーっと見つめ、海の匂いを感じ取る。 一口目を口に含んで魚の旨みと汁の温かみを全身に浴びた。海じゃん。 足と目と鼻と口で海を感じている。何て貴重な体験なんだろう。海を味わえる街、羨ましいなあと思いながら、遠くの海を眺める。

「君たち、どっから来たの～」

近くにいたお客さんらしき年配の女性たちが声をかけてきた。 東京です、と答えると遠いとっから来たねぇと返された。フランクで丁寧なおばさま達は、だし汁でティータイムでもやっているようだった。 よく見るとただのだし汁ではない。味噌が入っている。味噌汁じゃん。いいなあと見つめていたのが伝わったのか、こっちの飲む？とお椀に味噌汁を分けてくれた。だしの味と味噌が組み合わさり、最高の味噌汁ができている。だしをとる魚が違えば、唯一無二のだし汁が作れ、味噌汁や他の料理の調味料としても使うことができるのだ。 なんと嬉しい。おばさま達にも、私たちが釣ってきた魚でとっただし汁を飲んでもらい、阿久根について教えてもらった。その後は足浴をしながら、ぼーっと過ごした。

話を聞いてわかったのは、私がインターネットを使って拾いきれなかった、阿久根のすごい部分がまだまだあるということ。 朝から活発な市場があったり、渦潮を見ることができたり、新鮮な魚がありえない安さで売っていたり。 私が生まれ育った街にはないものばかりだった。 滞在予定時刻など大幅に過ぎていたが、私はもうスケジュール帳を見ることはなかった。おばさま達に教わった場所を片っ端からメモっていき、行き当たりばったりになりながらもレンタカーを走らせて阿久根を見て回った。 こんなことは人生で今までなかった。 決められていない自由さと、ここで何時間過ごしていても、誰にも怒られずのんびりできる実家のような安らぎに浸って過ごすことができた。

旅だからといって、目いっぱい楽しむために何でも予定を入れればいいわけではなく、その土地の良さを知り、そこでしかできない体験をその場で見つけることも楽しいのだと、この旅行を通して気づかせてくれた。

あとがき

現代人はネットで調べて、旅先で答え合わせをする虚しさに気づかず旅行に行きます。かくいう私もそうです。タイパに囚われ、どうせ出かけるのならと、「ついでに」「ついでに」を重ねてしまう。かといって、旅先ののんびりできる場所としてチェーン店を挙げるのも悲しい話です。長い時間をかけて、ゆっくり噛み締めることができる観光施設が欲しいなと思って書きました。旅先での人の優しさは結構覚えているものだと思います。新しい施設が、訪れた人の「人生で最もゆる～く過ごせた場所」になると素敵だなと思います。

Episode 04

朝から漁港を丸ごと味わう屋台

漁から広がる

阿久根新港の見学体験と海鮮を使ったつけ揚げや浜焼きが楽しめる場所を提案する。

阿久根には港があり、漁業関連者は当たり前に使っている。しかし、その様子を旅人や市外の釣り人など漁業関係者以外が覗き見ることはあまりできない。

阿久根の朝はとても早く、朝7時には魚を手作業で大きさ別にトロ箱に入れているほどだ。しかしお店などは朝早くから営業していないため、遠くの漁に行った船が帰ってくるまで寒い中待たなくてはならない。

そこで、朝早くから漁港を見学することができ、船が帰ってくる間の待ち時間には阿久根の海でとれた海鮮を浜焼きやつけ揚げとして楽しめることで、漁港での楽しさを丸ごと味わうことができる。

引き寄せられる人

阿久根新港の漁業関連者と阿久根に訪れる釣り人、港の見学に興味がある人をメインターゲットとする。特に、徹夜で阿久根に釣りをしてすぐに帰ってしまう釣り人をターゲットにすることで、阿久根の滞在時間が増えると予想する。他にも、港の見学はなかなかできる体験ではないため、近隣の小中学校の校外学習としての利用も生まれるのではないか。

体験できること

1.　漁や競りの見学

漁の様子や競りの様子を見学できることで、体験者は珍しい体験をすることができるだけでなく、知った内容からより海や魚に興味を持つきっかけになる。漁業関連者は普段の様子を伝えることで今後のことについて考えるきっかけになる。

2.　幼魚や釣りすぎを活かした、美味しい味わい方

漁などで出た餌に使用する幼魚や釣り人が釣りすぎてしまった魚を買い、阿久根伝統のつけ揚げや、浜焼きとして楽しむことができる。それにより、魚の命を無駄にすることなく最後まで味わい尽くすことができる。他にも海を見ながら他の人と会話をし、食べることで自然と一体になることができる。

生まれる新しい出会い

漁業関連者は釣り人に対し、同じ海で魚を獲っているにも関わらず関係がないことを悲しく感じていた。そこで漁業関連者と釣り人の交流を図ることで、まだ見ぬ出会いが生まれ、同じ海から命をいただき生活しているもの同士で海をより良くすることにつながるのではないかと考える。

ストーリーのイメージ

新鮮な貝を浜焼きする

漁港を見学

関連するタネ

P.39

秘密のスポットを情報交換できる

「他の釣り人に阿久根を知られたくない」

Connection : 話す / 尋ねる / 獲る

P.75

人が集まる魅惑の<揚げたて>

手作りのつけ揚げ

Connection : 料理する / 守る / 食べる

旅人も共に過ごす朝のあくね

「魚が食べたい！」その地のものをその地で食べるというのが旅の醍醐味の私にとって、海に面している九州はまさに海鮮を楽しむにはうってつけだ！大学の卒業旅行で念願の九州に初上陸した私は、昨日から阿久根に滞在している。

まだ眠い～という私をよそに、お父さんとお母さんはすたすたと漁港に向かっていく。時計を見るとまだ朝6時。普段早起きをしない私にとっては、辛い時間だ。しかし昨日鮮魚店のおばちゃんから、朝から漁港を見学して、貝や魚を浜焼きできる場所があると聞いたら起きるしかない。そんな眠い目を擦りながら漁港に向かうと、漁港はすでに多くの方が活動していて、大量の魚も水揚げされている。

始めて見る光景を楽しみながらうろうろしていると、

「おはようございます！漁港の見学の方ですか？」

と他の人より目立つ格好をしたおじちゃんに声をかけられる。そうです！と答えると、その人は眩しい笑顔で、漁港の施設の方へ案内してくれた。そこで長靴と帽子を貸していただき、漁港の中を見学開始する。

漁港の中は運動会でも開けるのではないかというほどかなり広く、大きい生簀には海老や鯛など大きな魚が動いていた。巨大な冷凍庫にも入ると、数分ほどしかいなくても凍りつくくらい寒く、硬い板のようになった凍ったタオルがあった。案内されながらとことこ歩いていると、最初に見た大量の魚が様々な木箱に入れられている。

「あの魚って何かな～、木箱に入れられてどこいくのかな～」

とお母さんに聞いていると、

「あの魚はウルメイワシって言って、うるうるした目が特徴の魚で阿久根は昔からウルメイワシの丸干しの産地なんだ！トロ箱と呼ばれる木箱に大きさ別に分けて、競りにかけたりスーパーなどに卸しているんだよ！」

とおじちゃんが答えてくれ、ポケットからゴソゴソと取り出し、

「これがウルメイワシを丸干ししたものだよ。朝獲れだからお腹にエサもなくって、臭みがなくてうまいんだよな～。よかったら食べてって～」

話を聞かれていたことに恥ずかしくなる私だが、おじちゃんの手にちょうど収まるくらいの魚をとって食べる。

「美味しい～味がしみしみしてるー！たくさん噛むとより味がジュワジュワ出てきてより美味しい！おやつにもおつまみにも欲しいー！」

と意気揚々と飛び跳ねた。普段食事を噛む回数が少なく怒られるお母さんも、この丸干しイワシはゆっくりとよく噛んで味わっている。お父さんに至っってはうわぁ～ビールが飲みたくなるな～なんて話している。するとおじちゃんが、

「遠くの方に漁に行った船はまだ帰ってこないから、よかったらあくねハーバーでつけ揚げでも食いに行ったらどうだ？魚送るついでに乗せてってもらいな！」

と提案してくれたので、私たちは丸干しイワシを片手にあくねハーバーに向かう。

あくねハーバーは漁港とはまた違う雰囲気で揚げたてや貝の焼けるいい匂いが広がっていて、丸干しイワシを食べたばかりだが思わずお腹が空く。すると揚げ物をしている屋台のおばちゃんに

「漁港の見学に来たの？船が帰ってくるまでまだあるし！このつけ揚げ食べてって！」と言われ、その匂いに釣られ思わず手を伸ばし、かぶりつく。

「あちっ！うわ！うまいーー！！何これ美味しすぎる！」

美味しさのあまり、何もいえずにいると後ろに座っていたおばちゃん達に笑われる。

「つけ揚げ美味しいよね～。つけ揚げはね、魚のすり身に豆腐とか地酒を混ぜて、油で揚げてつくるんだよ～。昔は家ごとに魚のすり身から作っていて、味も違っていたから、実家の味っていうのがあってね～。それでここのつけ揚げはね、基本的に、漁で使われなかった魚や釣り人から頂いた魚を使ってつけ揚げにしているだよ！」

とおばちゃん達が教えてくれた。美味しさと熱さで興奮しながらうなづく。

「そうなんですね！違う味も楽しめるんだ～！みなさんは、よく来てるんですか？」と聞くと、

「みんなあなたと一緒だよ、遠くに行った船が帰ってくるまで寒いじゃない。ここでみんなでつけ揚げ食べたり、浜焼きしたり、おしゃべりしながら待ってるの～」と嬉しそうに話ししてくれた。あの漁港で毎日寒い中船を待つのは大変だろうな～なんて考えながら、私はつけ揚げをむしゃむしゃと頬張る。お母さんも一緒になってつけ揚げを食べ、お父さんは貝の浜焼きを楽しんでいる。

するとやってきた釣り人が、バケツから何匹か魚を屋台のおばちゃんに渡している。

「今日はカサゴがたくさん釣れたんだけど、刺身と唐揚げ以外でお願いします～！あとスタンプも！じゃあ、つけ揚げもらっていくね！」

と話している様子を不思議そうに私が見ていると、おばちゃん達が

「ああやって、釣り人から魚をもらってつけ揚げにしたり、浜焼きとして楽しめるように工夫してるの！釣り人も刺身以外の楽しみ方を体験できたり、スタンプを集めて他のものと交換したりしてるの！私たちは美味しく食べられるし、漁師にとってもどれくらい阿久根の海に魚がいるかわかっていいんだよ～」と嬉しそうに伝えてくれた。

「船が帰ってきたぞー」という声を聞き、私たちとおばちゃん達は車に乗って、また漁港に戻った。おばちゃん達は水揚げされた魚を選別し、トロ箱に詰めていく。私たちはおじちゃんに案内してもらいながら、魚が選別されていくのをじっくりと覗き見る。途中でさっきのおばちゃん達が嬉しそうに手を振ってこっちをみてくれる。私はそこに嬉しさと少しの恥ずかしさも感じながら、また連れて行かれる魚をみて、この魚がどこに行くんだろうな～と考える。時間はまだ8時を超えたばかり、まだまだ時間はある。このあとはどこに行こうかな～。

あとがき

阿久根を朝から楽しめるようにしたいと考えたのは、阿久根に実際に訪れ、阿久根の朝が本当に早いということを感じたからです。旅行に行った際に、宿から遠い場所に行くから早く起きるということはよくあります。しかし、朝からその場所を満喫したいから行動するというのがあまりないと感じました。そしてそれは阿久根にとって、勿体無いことなのではと感じました。漁港や競りを見学する、その中で漁業関係者や地元の方、阿久根にやってきた釣り人とお話ししたり、一緒にご飯を食べる。そんな体験があれば、朝を一緒に楽しめ、そこからの行動を広げるきっかけになるのではないかと考えて、この案を考えました。

アクティビティの隙間をつなげる

あくねハンモックハーバー

くつろぐ場所が生きれば、もっと冒険したくなる。

人と資源の中継地「ハンモックハーバー」は、阿久根の資源を使った新しいハンモック・及びハンモック利用施設だ。その場で自由にくつろぎ語れる**ハンモックラウンジ**と、自由に持ち運び思い出を生み出す**ハンモックレンタル**の、2つの機能を備える。

ハンモックハーバーの起点は、観光者として感じた「アクティビティの前後にある隙間」である。釣りの前後、少し立ち止まって休憩したい。飲み会まで、もう少し時間がある。次の行き先を調べるため、少し車を停めたい…実は観光中には、行き先や目的といったメインコンテンツの間に、ふと立ち止まりたい瞬間が隠れていた。これらは単に場所だけではなく、飲食物や化粧室・充電器といった複合的要素を必要としており、次の行き先を見つける役目も担っている。そこでかゆいところに手が届く、中継施設を欲した。

上記の欲求と結びついたのが、阿久根で感じた「魅力はあるのに、魅力を引き出す余白がない」というもどかしさである。海の音をよく聴きたいが、寝ると痛い。素敵なお弁当を食べたいが、食べる場所がない。夕日の流れを眺めたいが、荷物が重い…このように、阿久根には既に人を動かす魅力が存在しているにもかかわらず、それらを大きな思い出として昇華するほどの手段に乏しい。特に座る・寝るといった身体の預け先を欲していたことから、自分の好きな場所で身体を伸ばせる手段があればと考えていた。

以上2つの思考が結びついて生まれたのが、阿久根の魚網や大漁旗を使った、目的に応じて選べる新しいハンモックだ。観光者はもちろん、生活者にとっても、日常の隙間で有意義に心身を預ける場所として機能すると推測する。

引き寄せられる人

引き寄せられる人は、単体の目的を持って阿久根を訪れた人である。帰省や釣り・ワーケーション・ツーリングなど、阿久根に単発で訪れる目的は、既に存在している。そのような人たちが目的達成後すぐに帰ってしまうのではなく、目的前後に立ち寄り、心身の栄養や新たな目的を獲得する場所である。

また観光者だけなく、阿久根に馴染んだ住民も視野に入れる。住み着いた猫や仕事後の漁師さんが足を休め、近況報告ができる場にもなり得る。**二者が交わる**ことで、いずれハンモックハーバー自体も、新たな阿久根の魅力になることを望む。

体験できること

体験できることは、以下の3点である。

1.　状況・目的に応じ、ハンモックを選んでくつろぐ

ハンモックは「いつでも」「濡れている時」「夜時」「食べ飲みしたい時」「こじんまりな時」合計5つのパターンが用意されており、ハンモックの形状や布が異なっている。海帰りやテイクアウト後など、自分の状況に合わせ、場所や布を選んでハンモックを利用できる。自分でカスタムする楽しさや実用性を担保した。なお「こじんまりな時」は1人で座る他、猫用ハンモックとしても機能するため、光景を眺めているだけでも面白いはず。

2.　ハンモックをレンタルして、新たな思い出を作る

行き先や目的に合わせ、持ち運び式のハンモックをレンタルできる。キャリーやリュックで持ち運べる軽量型のため、禁止されなければ、海や山など好きな場所で、好きなパターンのハンモックを使える。ハンモックでの楽しみ方をまとめた、ハンモックマップ付き。

3.　ハンモックを通じ、阿久根での交流を広げる

ハンモックは、漁網や大漁旗の印染を使った布で作られている。そのためハンモックそのものが、阿久根の新たな発信要素となる。また「食べ物」「レジャー」といった、目的別に書き込めるマップ式の布も用意しているため、阿久根で好きな場所を書き込んだり、他の人のおすすめ場所を参考に旅を進めることができる。各々のアクティビティ・生活の間に入り込み、新しい出発を生み出す交流の仕組みとして、ハンモックを活用している。

揺られて生まれる新しい出会い

想定される出会いとして「違うアクティビティに参加した人同士」「住民と観光者」「観光者と観光者」「住民と住民」の4つを想定する。目的の前後やレンタル前後に立ち寄る施設であるため、違う経験をした人が交わる空間となる。また不定期で、大きなハンモックを洗うワークショップを開催するのも面白いだろう。

Episode 05

ハンモックでつながるあくねの中継地

10月に海へ行きたいと言い出したのは、友達の方だった。

「え、今更…海いけるところあるの…?」「南の方なら大丈夫らしいよ!」

そう言いながら見せられたのは、SUP体験への申し込みフォーム。

「鹿児島で、大人2名で」「沖縄かと思ったら鹿児島か!あくね…?初めて聞いた」「温泉とか釣りとかをnoteで見かけてさ、面白そうだなって。混んでなさそうだし!」「次の休みに行こっか!」

夜にチェックインし、翌日朝からSUP体験に向かう計画を立て…早速阿久根に到着。なるほど落ち着いていて、ここなら静かに過ごせそうだ。

「わ、星がすごく綺麗!」「ほんとだ…ん?なんか、寝てる人がいる」

ホテルに向かう途中で見つけたのは、何やら人が寝転んでいる施設。

目的同士がつながれば、くつろぐ場所も生きてくる。　くつろぐ場所が生きれば、もっと冒険したくなる。
人・場所・行為をつなげ、送り出す、みんなのあくねの中継地。
えらべる、はこべる、めぐる、新感覚のハンモックハーバー。

そう書かれた区画には、色とりどりのハンモックがズラリ。星をみている人、ご飯を食べる人、釣竿を持って用意している人…それぞれがゆったりと時間を過ごしている。小さいハンモックには猫まで居座っていた。

「え、寝たい!100円入れれば空いている席、200円入れれば指定の席、予約は300円だって。ちょっと見ていこうよ」「寝るとき、濡れているとき…いろんなタイプのハンモックがあるんだ!移動で疲れたし、ここで星見てからホテル行こっか」

自動釣り銭機にお金を入れると、寝る専用のハンモックが使えるようだ。鍵がついており、お金を入れると布をかけられるようになっている。布には発光インクを使った染め物が使われており、こちらも美しい。毛布まであって、さすが専用!

「ハンモックなんて久しぶり…海の音も綺麗だね」「旅行って感じするよね!あ、あっちにレンタルもある」値段は上がるが、自分の好きな場所でハンモックが使えるレンタルも実施しているようだ。

「明日のSUPの後に使えたらめちゃくちゃいいね!」「借りて行こっか」

レンタルも自動式。「海辺で」というシチュエーションを選んだら、濡れても平気な魚網ハンモックをおすすめされた。2人で1つだけ借りたが、キャリー型になっているので、持ち運びも大丈夫そうだ。

「返した後にご飯とか食べて行こっか」「そうだね!明日は早起きだ!!」

次の日。予定のSUP体験では透き通った海と山肌に見惚れ、あっという間に終わってしまった。「この時期に海入れるのすごいね!」「波が穏やかでやりやすかったね」

SUPが落ち着いたら、海辺でハンモックを広げて休憩。リゾート気分なのに落ち着いていて、とても過ごしやすい。普段使わない筋肉を使ったので、足を伸ばせるのも嬉しい。

「よし!返却して、お昼食べにいこう!」ハンモックハーバーに戻ると、夜には見えなかったものが。

「ハンモックの布にマップが…これ、誰でも手書きできるの!?」「おすすめのご飯屋さんとか、過ごし方とか書いてある…え、ちょうど困ってたからありがたい」「あら、阿久根は初めてですか?」

マップの近くで騒いでいると、地元の方が話しかけてくれた。温泉の帰りだそうで、ハンモックは週1回の楽しみにしているのだとか。

「お昼行くなら、ハーバーでお弁当買ってここで食べればいいわよ。ハンモックセットもあるから」「わ〜素敵!ありがとうございます」「午後は裁き体験も面白いわよ、今日は釣り人が多いから、裁くだけでも教えてくれそう。んで、明日自分で釣って食べなさいな」「そんなこともできるんですか!?」「うわ〜明日帰りたくない〜〜」「あら、もう帰っちゃうの!?お帰りはどちらに?」「えっと私は…」

ハンモックハーバーに来たおかげで予定も立てられたし、新しい体験も出会いもあったし。

何より、もっと阿久根のことが知りたくなってきた!　こんな中継地がある阿久根、素敵な街だな。

ストーリーのイメージ

座って食べたり寝たり、使い方は自由

マップ型ハンモックで交流が広がる

関連するタネ

P.68

自分で彩る阿久根の景色

変わるものと変わらないもの

Connection : 過ごす / 染める

P.80

自然の中で過ごせるハンモック

旅らしい休憩の仕方

Connection : 寝る / 安らぐ / 涼む

あとがき

ハンモックの欲望は、6月に考えた「魚網使いたい〜〜」、2回目出発前に妄想した「マップ型のレジャーシート持ち込んでお弁当食べて次の場所決めたい〜〜」、そして10月に感じた「いろんなところで寝たい〜〜」、この3つの感情が合わさって生まれたものです。猫がハンモックにいたら、最悪人間何もできなくても需要がありそう。ハンモックの管理や騒音などをどうするかが課題なのですが、自動型の仕組みと開放式の建物（めぐみ園のような…）でどうにかしたいところ…。ハーバーに集まる他の施設や、すでにある阿久根の魅力に気が付く場所であればと願います。

魚に感謝し、祈りを捧げる場所

〈 三月十日祭り 〉を拡張する

海とその恵みである魚に感謝する神社を提案する。人は犬や猫などのペットや人間に利用されている生物の供養をするが、海で獲れた魚を供養することはほとんどなく、残念だと考えたからだ。

また魚は無限にいるわけではなく、人が考えなしに取り続ければ尽きてしまう。そのことを、ひとりひとりが深く考えるべきであると感じている。

阿久根市では航海安全と豊漁を祈る三月十日祭りが古くから続いているが供養するためのものではない。年一回の一大行事であるため地元民のために行われ、旅人が参加できることは少ない。大漁祈願や安全、安産、商売繁盛のご利益に魚に関連している神社や祭りは全国に多くあるが、魚自体を祀ることや、魚の命に感謝をする神社は珍しい場所だろう。海との生活が文化的に近い阿久根市に魚に感謝する神社があれば、市民も釣り人もすこし立ち寄って日々の恵みに感謝するきっかけになると考える。この感謝をする行為や気持ちは人々が連鎖的に繋がる最初の場所になるだろう。

引き寄せられる人

阿久根市民と釣りが好きな人がメインターゲットだ。熊本から鹿児島市内へと南九州西回り自動車道が阿久根市を通っている。高速道路近隣の人をターゲットにすれば、釣りが趣味の人は現在も阿久根市を訪れており、今後はグループで阿久根市を訪れる人が増えるだろう。

体験できること

ここでは、海とその恵みである魚に感謝する場所であり、日々の感謝を伝えることができる。

その他に以下の5点の内容を神社に入れ込むことができると考える。

1. 魚に祈りを捧げる

海の豊かさと魚の命に対して手をあわせる。日々、魚の命をいただいていることに感謝を表す。

2. ウルメイワシのルアー

ご朱印を集める人がいるように、釣り人にとってはルアーは集めたくなってしまうものだ。限定ルアーは口コミやSNSを通じて広まり、ルアーを目当てに来る人が増えると考える。そこで阿久根といえば、ウルメイワシだと考えた。

3. 魚の絵馬

ストーリーのイメージ右になるようなものを想定している。魚に対する感謝やどのような魚が釣れたのかなどを書き魚に対する感謝を綴る。

4. 魚みくじ

魚の形をしたおみくじ。ウルメイワシやキビナゴの絵柄がある。桶にたくさんの魚みくじをいれ、簡易的な釣竿で擬似的な体験ができる。

5. 地域の人が助け合い管理する

漁がない日や地域の人が持ち回りで掃き掃除やおみくじの補充などを行う。そこのことにより、関連がなかった地域の人や観光で来た人と地域の人との関わりが生まれるだろう。

ストーリーのイメージ

ウルメイワシのルアー（ Generated by firefly）

魚の絵馬（ Generated by firefly）

生まれる新しい出会い

神社に行くとそこを管理してくれている漁師や地元の方、新しい魚、海の中にいて普段は見れない魚に出会うことができる。絵馬を通じて見えない人とのつながりや、見られない魚たちとの出会いがある。将来的には、魚に関わるすべての人が訪れ関わり合いを持つことができるようになることを願っている。

魚と海と人でつながる阿久根

Written by : きりは

〈 魚の命に感謝をする神社 〉というのがSNSで流れてきた。

へぇ〜、そんなのあるんだ。週末時間あるし行ってみようかな。

御朱印好きの友達を連れて鹿児島市内から出発し、土曜日の午前中についた。

あくねハーバーは開放的で現代的な建物のそばに古めかしい、真っ赤な鳥居が目立つ。

ここが、魚の命に感謝をする神社か。

「なんか今っぽいのに、どこか懐かしい感じがするね」

友達が一礼して鳥居をくぐり、境内へ進んでいく。私も後に続く。

水で手を清める場所は「手水舎」というらしい。知らなかった。その手水舎の縁には小魚の細工が施してあり美しい。

参道を進み、まずはお参りをする。境内をぐるりと見ると、魚の形をした絵馬のようなものがずらりと並んでいる。SNSで見た光景はこれだったのか！と少し嬉しい気持ちになった。それぞれの絵馬には「はじめて自分の手で魚を釣りました。命を大切さを学びました。」や「おさかなさん、いつもありがとう」などそれぞれの想いが書かれている。他に面白いものは…釣った魚と大きが書いてある！同じような絵馬がちらほらとある。

「ねぇ、こっち来て！魚釣りみたいになってるよ」

小さな魚型のおみくじが樽いっぱいに入っていて、親切に竿まで付いている。せっかくだからやってみることに。魚の口に糸の先を引っ掛けるのが意外と難しいが、なんとか引っかかった！これはなんの魚だろう?、とりあえずかわいいな。と思っている間に友達もようやく釣れたようだ。

魚にはおみくじが入っている。

「一緒にせーのでみよう！」「うん、せーの」

「大吉だ！やった！！」　「私は吉だね。ふつうだ。」

どれどれ他には何か書いてあるかな… この魚はウルメイワシというらしい。目がウルウルとしているからか、なるほど、それは確実にかわいいな。他は、ふつうのおみくじと一緒か、待ち人：気長に待てとかそんな感じだ。

「そっちの魚なんか違うよね?なんだった?」

「きびなごっていうらしいよ！なんかキラキラしててゴージャス〜。おみくじよりも本当はもっと小さくて長細いらしいよ」

へぇ、そんな魚もあるのか。樽の中をよくみてみると数種類の魚がいることがわかる。

「そういえば、ここには御朱印とかあるのかな?」と授与所の方へ聞きに行った。

なんか話してる、紙をもらってきた。

「すごい！ここの御朱印めっちゃかわいい。デザイン良すぎ！なんか現代的だけど日本の神社の良さ受け継いでる感じがあくねポートとマッチしてるね」

たしかに、魚や海を基調としているがイラスト感がなく洗練されている。これが御朱印を集めたくなる理由の一つか。

「ほかにやりたいこととか行きたいとことかないの?」

「さっきのさ、絵馬みたいなのに魚の種類と大きさかいてあったじゃん。それやりたいかも」

「じゃあまずは釣りに行かないとね！」といい、境内を掃除しているおじさんのところにかけて行った。

「魚釣りをしてみたいなって思ったんですけど、どこかできる場所ご存知ですか?」

「おれ漁師だから連れて行ってあげようか? 明日の朝、9時とかそこら辺でよ」

「え〜すごい！いいんですか?」

トントン拍子に話が進み、 船釣りをすこしさせてもらえることになった。

釣りに連れてきてくれたおじさんは普段は漁師をしているが、週に1回程度、漁に出ない日に境内の掃除をしているらしい。他にも地域の人が店番をしたりと少しずつ支え合って運営しているようだ。

私が釣ったのは、カサゴとベラ。あまり大きいものではなく、標準サイズだった。せっかく絵馬に書こうと思っていたので、写真も撮ってプリントしておいた。魚の絵馬を買い、魚の種類と大きさを書いて写真も貼った。

釣った魚は昼ごはんに刺身と唐揚げにしていただいた。自分で釣った感動が大きく、これまでに食べたどの魚よりも美味しく感じた。

最後にもう一度お参りをして、今回は丁寧に感謝を伝えて、帰路に着いた。

自宅に帰ってから、魚を食べることがあった。いつもとは少し違う不思議な気分になった。

関連するタネ

P.121

市民の小さな願い

ぶえん館のサンゴ

Connection : 祈る / 守る / 創る

P.28

魚から始まる、集まりの連鎖

魚の集まりで人が集まる

Connection : 集まる / 獲る / 訪れる

あとがき

日々の恵みに感謝をしなければと思ったのは、かまぼこ好きが高じて水産漁獲量や消費量を調べたことがきっかけである。日本は海に囲まれているとはいえ、魚が永遠に湧いてくるわけではない。魚が減り、海が汚れ、漁業の担い手がいなくなってしまったら… を本気で考える人が必要で、考える場所になってほしい。そんなことを考えながら、阿久根市を巡りストーリーを書いてみました。

偶然と必然が重なるサイクルホテル

サイクルと新しい人との出会い

サイクリストをメインに来てもらえるサイクルホテルを提案する。阿久根市には、サイクリングコースがいくつか整備されている。しかし、サイクリスト向けの宿泊施設は少なく、宿泊先の確保が難しいという課題がある。また、サイクリングに関する情報も十分に提供されていないため、サイクリストの利便性が低いという課題もある。

そこで、サイクリストの利便性や安全性を向上、サイクリングの魅力発信、地域の観光振興貢献を目的に、阿久根市の豊かな自然や歴史・文化を満喫できるサイクリングツアーを提供と共に、サイクリストの利便性や安全性を向上させるための施設としたい。具体的には、サイクリングコースの案内や、サイクリングガイドの派遣、サイクルレンタルの貸し出し、自転車の保管やメンテナンス、サイクリングに関する情報発信を行う。

また、飲食や、イベントスペースなどの整備を充実させることで、地元の人と宿泊客がコミュニケーションが取れる施設を目指す。

サイクリストだけではなく、地元民にも解放

サイクリストには、阿久根市の自然や観光スポットをサイクリングで満喫したい人、サイクリングに便利な施設を求めている人などを想定する。阿久根市に住む人には、サイクリングをきっかけに地域の魅力を再発見してもらいたいと考えている。阿久根市を訪れる観光客には、サイクリングを通じて阿久根市の魅力を体験してもらいたいと考えており、阿久根市の情報発信地として、観光拠点としても活用できる施設を目指す。

体験できること

阿久根市には、海岸線や山間部など、さまざまなサイクリングコースがある。施設では、サイクリングコースの案内や、阿久根市の自然や歴史文化に詳しいガイドの派遣や、阿久根市の情報の発信地として、サイクリングイベントなどの情報をメインに、阿久根市の魅力を伝えられるスポットとなるので、阿久根市を知った上でサイクリングできる。また、サイクリスト向けの宿泊施設であるため、自転車の貸出や保管やメンテナンスなどのサービスや、サイクリングの合間に休憩や食事を楽しむことができ、快適にサイクリングを楽しめる。

また、地域の人や観光客にも開放された施設のため、交流スペースによって、サイクリスト同士だけではなく、阿久根市に住む人や観光客との交流が可能となり、新たなコミュニティの展開や、阿久根市の新たな魅力を発見する。

宿泊施設だけではない、それ以上の価値提供

サイクリストが織りなす新しいコミュニティと、地域住民・観光客との交流を大切にすることで、単なる宿泊施設以上の価値を提供したい。大きく分けて3点挙げる。

1.　サイクリングコミュニティの形成

・サイクリングイベントと交流

サイクリスト専用のツアーやライドイベントなどを定期的に開催することで、同じ情熱を共有するサイクリストたちが一同に集まり、自然な交流が生まれる。また、地元住民も積極的に歓迎し、サイクリストと地元民が地域の魅力や秘境スポットを一緒に楽しむ機会が広がる。

・サイクリングラウンジと情報交換

サイクリストたちが集い、旅の思い出や情報交換ができるスペースであるサイクリングラウンジでは、地元のサイクリングクラブや地域の観光協会も協力し、地域全体でサイクリングコミュニティが広げられる。

2.　地域との融合

・地元の食材と料理体験

レストランやカフェでは、地元の食材を使用した料理を提供される。宿泊者は地元の特産品や伝統料理を楽しむことができ、地域の食文化を知る場として、地元の料理人との交流イベントや料理教室も開催し、宿泊者と地元住民が共に楽しむ場を提供できる。

・文化の発見

地元アーティストなどの作品の展示を備える。アーティストとの対話イベントやワークショップなどが行われ、宿泊者は地域の芸術と文化に触れられる。また地域住民もアートイベントへの参加を歓迎し、新しいアートコミュニティが芽生えると考える。

3.　人と結ぶ、広がる、出会う

このサイクルホテルは、単なる宿泊施設を超えて、人と人とを結び、地域とのつながりを強化していきたい。

サイクリストと地域住民、観光客と地元の企業が交流し、新たなビジネスの機会や友情が生まれることで、阿久根市全体に活気と新しい風を巻き起こし、共に未来を切り拓いていくと考える。

Episode 07

偶然の出会いと温もりを味わう阿久根

私は、サイクリングに興味を持っていて、本格的に趣味にしようかなと思ってる。普段から食べることが好きだから、食べることも楽しみながら、サイクリングも楽しめる旅行に行きたいな。

ある日、たまたま立ち読みした雑誌で、「鹿児島県阿久根市 サイクリスト向けにホテル建設」というタイトルの記事を目にした。

「ここにサイクリングしに行ってみたい」

正直、阿久根市は初めて聞く名前だったが、自転車の貸し出しや初心者でも楽しめる環境、雑誌で紹介されている地元の魅力に興味が惹かれた。しかも、地元の人々や他の観光客との交流が期待できるのも魅力の一つ。まさに一目惚れだ。

思い立ったら行動。計画を立ててすぐに、ホテル「あくねハーバー」を訪れた。客室数は10室程度。初めて足を踏み入れたロビーは、サイクリングを待ち侘びるサイクリストと地元の温かさが混じり合った雰囲気に包み込まれていた。サイクリストたちが集うラウンジでは、今までの旅の話や最新のサイクリング情報が飛び交い、まるで一つの大きな家族に迎えられたような安心感が広がった。

ホテルのチェックイン後、すぐにサイクリングコースの案内を申し込んだ。夕方に差し掛かった時間帯に、同じ初心者仲間と間と一緒に地元のガイドに導かれ、美しい海と自然を満喫。途中、地元の農家の方に新鮮なボンタンをいただき、地元の人々と触れ合うことができた。ボンタンは終わった後に、サイクルホテルのシェアキッチンで、参加者の皆さんとガイドの方のおすすめレシピを作り、美味しく食べた。ボンタンというと、「ボンタンアメ」以外知らなかったので、「こんな食べ方もあったんだ！」と新しい発見になった。

サイクリングラウンジでは、他の宿泊者と気軽にコミュニケーションが取れた。 他の宿泊者と気軽にコミュニケーションをとることができ、他の参加者も自分と同じように阿久根市の自然と海の幸に魅了されてここに来た人や、本格的にサイクリングを趣味にしているけど、阿久根市に新しいサイクルホテルができたということでやってきた人…。共通の趣味であるサイクリングを通じて異なるバックグラウンドを持つ人々との交流が生まれた。夜は地元の料理を楽しむイベントがあり、自分の住んでいる街ではあまり食べられないキビナゴなど、地元の味に触れつつ、出会った人との絆が深まった。

翌日は、参加者と一緒に染色体験と夕日ツアーに参加。 染色体験では、アキノ染色工房で大漁旗のハンカチを参加者と一緒に作り、参加者と作業を楽しんだ。完成したハンカチは、地元に戻った今も大事に使っているし、愛着がある。

サイクリングの途中の休憩では、市民の方と交流し、計画を立てたときには知らなかった場所を教えていただけた。今まではその場所の知られた名所を巡るのが観光だと思っていたが、地元の方に教えてもらった場所に巡って自分の中での「名所」にするのも、観光の一つであると感じた。

夕日ツアーでは、市民おすすめの夕日を満喫し、その美しさに感動した。帰宅直後、この夕日の景色をぜひ他のサイクリストにも見てもらいたいと思い、SNSに発信した。すると、「ぜひ行ってみたいです」と返信が。目に見えないところで、他のサイクリストと阿久根市との新しいつながりができて嬉しい気持ちになった。後日談だが、その人のSNSを見ると、阿久根のサイクリングでの楽しかった思い出を載せていた。今は、自分が実際に行った思い出が巡り、早いうちに再び行くことを決意したところ。

サイクリングの日々が終わりを迎える頃、私は阿久根市で過ごした新しい時間に感謝の気持ちを持った。ホント、新しい価値と出会いをものすごく感じた数日間だったな。

ストーリーのイメージ

関連するタネ

P.120

待つ時間は話す時間

販売者と消費者の交流

Connection : 買う / 話す / 学ぶ

P.112

自転車で向かえる港

港まで3分の宿

Connection : 走る / 巡る / 乗る

あとがき

サイクリング経験はないが、阿久根市はサイクリングに来る人が多いことから、「自分がもしサイクリングするなら、こういうことしたいなー」という気持ちでこのストーリーを書いた。今の時代は、どうしても自分の中に既に形成された考えやコミュニティに囚われてしまい、本当のその街の魅力に気づけないのではないかと感じてしまう。ただ阿久根市では、そのような型にハマらず、新しい出会いと価値感を自分の目で見て確かめて、でもすごくリラックスした状態でつながりが連鎖して欲しい。そして、この出会いと温もりがハマる人にはハマってくれたら良いなという願いを込めている。

あくねの結び目

あくねを結び、あくねを繋ぐ

阿久根には豊かな自然と美しい風景、温かい人情がある。阿久根市民にとっては日常で当然と思うかもしれないが、他所者にとっては輝いて見えるのだ。阿久根市に滞在中、私は毎日港へ釣りに出向いた。港にいる釣り人には私達のような若者も多くいた。しかし、街中を歩いていてもそのような若者たちとすれ違うことはほとんど無い。阿久根を訪れる人は、ほとんどが海でのアクティビティなどの単一の目的のみを済ませて阿久根を出てしまっているのだ。例えば釣りに訪れた人は、釣りを終えた後の阿久根での過ごし方が見出せず帰ってしまうなど、阿久根にある価値同士を結びつけるものが存在していないと考えられる。そこで私は、「阿久根にあるもの・阿久根でできること」を繋ぐ場としてのあくねハーバーの活用を提案する。

この施設では、阿久根でできるアクティビティ（体を動かす以外の体験価値を含める）を紹介、レンタルサービスなどで実践できる手助けを行う。それに付随して、アクティビティをサポートする方との交流だけでなく、阿久根市在住の方々との交流もできるレンタルキッチンを兼ね備えた浜焼きを楽しめるスペースが存在する。そこでは地元の農家等も臨時出店ができる。また、阿久根市の大きな魅力でもある塩湯に浸かることのできる天然温泉施設を併設する。温泉が存在することより、あらゆるアクティビティの流れの終着点である「癒し」という結びとして、さらに温泉が目的で訪れる人が新しい阿久根の過ごし方を知るきっかけとしての役割を発揮する。

単に施設側からアクティビティを提供するだけでなく、訪れた人達が目的としていなかった阿久根での体験を経て、阿久根にとって新しい綱を見つけられる結び目でもある。将来的に阿久根市内の新しい雇用を生み、阿久根市の活性を上げることにも大いに貢献する可能性を秘めている。

引き寄せられる人

阿久根に住んでいる人、阿久根を訪れる人、全ての阿久根に関わる人がターゲットである。「海鮮を食べる」や「釣りをする」といった一つの目的で来た人達は、あくねハーバーで他の阿久根での過ごし方を発見・体験することができる。阿久根市民もこれまで気づかなかった阿久根の過ごし方に気づくことができる。

体験できること

1. レンタルサービス・遊漁船手配

この施設では、阿久根で体験できるアクティビティを紹介するとともに、手ぶらでもすぐに体験できるためのレンタルスペースを設ける。釣りであれば釣り道具一式のレンタルや遊漁船の手配を行う。漁協と連携してルール内で釣りを楽しむことができ、釣り人の釣果を漁協にも報告することで、どちらにとっても良い効果を生み出す。他にも、SUPであれば必要なボードやパドル、川や山では専用のシューズや備品をレンタルで提供する。

2. レンタルキッチン・浜焼きスペース

ここでは、釣り人が釣ってきた魚を捌くことのできるレンタルキッチンと浜焼きを楽しめるスペースがある。阿久根に関わらず、釣り人が釣りを終えた後にそのまま帰っていってしまう理由に、釣れた魚を新鮮な状態で調理するために早めに持ち帰りたいというのが大いにある。

このレンタルキッチンでは釣れた魚を自分たちで直ぐに捌いて処理することができる。そしてそのまま隣接する浜焼きスペースで自分たちの釣った魚を焼いて食べることができるようになっている。もちろん釣り人に関わらず、浜焼きレストランとして、新鮮な阿久根産の海鮮を味わうことのできるようになっている。

地元の農家などが臨時的に出店できるスペースも兼ね備えている。鹿児島ならではの数多くある醤油と焼酎を食べ飲み比べながら、阿久根の野菜と海鮮を味わうこともできる。

3. 温泉施設

ここでは、阿久根市ならではの塩湯の天然温泉が楽しめる施設となっている。あくねハーバーの上の階に併設されており、阿久根の海を眺めながら温泉に浸かることができる。他のアクティビティに参加している、いないに限らず、温泉だけの利用も可能となっている。温泉を目的として訪れた人が阿久根でのアクティビティに参加するきっかけとなり、逆のパターンとしても相乗効果を狙うことができる。

生まれる新しい出会い

釣りなど、1つの目的だけで来た人達がこのあくねハーバーにてそれ以外の阿久根の側面を知って、触れる機会を得る。これによって本来出会うことの無かった目的同士の人達が出会う。さらにはレンタルキッチン・浜焼きスペースなどにて阿久根市民の方との交流が生まれる。そこで他所者と地元民の視点から新たな阿久根の過ごし方が見つかるかもしれない。そんな時は受付の意見箱から、新しい体験価値を投稿することができる。出会いが新しい阿久根の楽しみ方を増やしていく。

阿久根で感じる「ここだからこそ」

Written by : もっちー

鹿児島県に「阿久根市」という場所があるらしい。

上京して以来、私はすっかり東京湾奥の河口だけを主に巡る釣り人となった。先日、隣の釣り人に何か釣れてるか話しかけた。お互い釣果は坊主で片付けをする中、その人は地元のことを話してくれた。不便だが自然が良い所で、窮屈な都会を出て再び帰ろうか悩んでいるという。鹿児島県阿久根市、聞いたことがなかった。鹿児島県自体行ったことも無かったが、魚影は濃いとのことだったため、思い切って次の旅行は鹿児島にして、2日間はその阿久根市とやらに割いてみることにした。

鹿児島旅行の計画を練っている最中、ネットやSNSで阿久根市について調べてみた。どうやら港は広く、釣りはできそうだ。しかしそれ以外、多少飲食店などは見つかるがどう過ごせば良いかいまいち分からない。調査を続けると、「あくねハーバー」という施設ができたという情報があった。そういえばあの釣り人も、とりあえず着いたらこの「あくねハーバー」にいけば良いと言っていた。

旅行当日の早朝、鹿児島市内からレンタカーで阿久根市に到着した。言われた通り港近くの「あくねハーバー」に寄ってみることにした。中に入ると大きな阿久根市の地図におすすめスポットが示されたものが壁一面に貼られていた。どうやら阿久根のインフォメーションセンターのような役割もあるようだ。受付で釣りについて伺うと、すっかり用意するのを忘れていたタモ網とライフジャケットをレンタルする事ができた。また釣りが可能なスポットと、漁協から定められた簡単なルールを教えてくれた。普段は釣りというと漁協の方の暗黙の了解で堤防を使っていたため、清々しく釣りができるようで好印象だ。受付で遊漁船の予約も受け付けていたため、昼まで船釣りを楽しむことにした。船釣り・堤防釣りに限らず、釣りを終えた後にここで釣果報告をすると、レンタルキッチンの使用許可が降りて、そのまま釣れた魚を自分で捌いて浜焼きをする事ができるらしい。リリースするしかないかと思っていたが、これは救われた。釣りの後の計画にも悩んでいる中、受付の人から午後から川の近くまでレンタルサイクルで行き、夕焼けをSUPに乗りながら見るプランの枠が空いていると言われた。特に予定は決めておらず、好都合であったため、こちらにも参加することにした。

近くで見ると意外と大きな阿久根大島を横目に、存分に船釣りを楽しんだ。釣りの途中、偶然野生のイルカの群れと遭遇して少し我々の乗る船を追いかけてきた。非常に興奮して写真を撮っていたが、船長によると阿久根では堤防からもイルカを見かけるという。東京ではまずあり得ないことだ。釣りを終え、あくねハーバーで早速魚を捌いて浜焼きでいただいた。近くにいた地元の人から、阿久根は昔から新鮮で美味しい魚を食べられることが魅力なのだという。そんなところでまさに釣れたばかりの魚を自分の手で捌いて味わえるのはこれ以上ない幸福だ。昼飯を終えて、予約していたレンタルサイクルとSUPにも参加した。阿久根は海だけなのかと思っていたが、山や川も素晴らしかった。SUPから見た夕焼けは、土地によってこんなにも太陽の見え方が変わるのだと感激した。

1日中動き回って、あくねハーバーに帰ってきた。ここには温泉施設も併設されている。阿久根市では塩分濃度の高い「塩湯」が湧いているのだという。海風に当たりながら塩湯に浸かっていると一瞬で疲れは吹っ飛んでいった。都心ではまず味わえなかったであろう充実感をしみじみと感じながら帰路に着いた。次に阿久根に行くときは何をしよう。そうだ、また「あくねハーバー」に寄ってみよう。

ストーリーのイメージ

阿久根の海が見える塩湯の天然温泉

釣れた魚を浜焼きで楽しめる

レンタルサービスを利用して海釣りをする

釣れた魚を直ぐに捌くことができる

関連するタネ

P.47

“野生”のイルカが見える場所

朝日を眺めに海へ

Connection : 見る / 眺める / 現れる

P.41

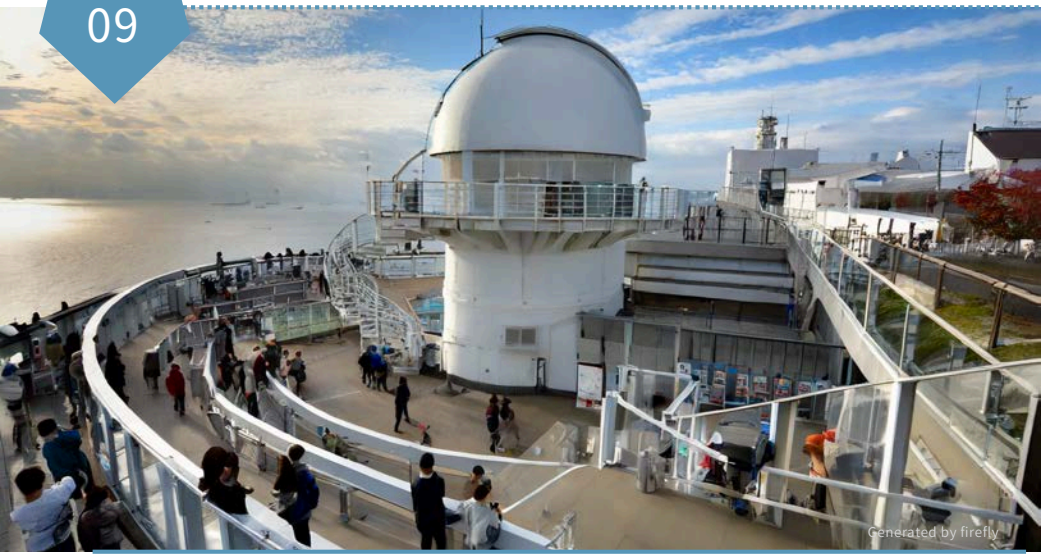
ぶえんな魚を食べられる

ぶえんな魅力のジレンマ

Connection : 気づく / 触れる / 育てる

あとがき

1度目の阿久根滞在後、阿久根市の人口情報やロケーションなどから私は阿久根にはこれまでにないような新しいアクティビティを創らなければ人は来ないのではないかと考え提案内容を練っていました。しかし2度目の阿久根滞在の際、より阿久根市内を回り多くの阿久根市民と接していく中で、阿久根という土地が持つ美しさとそれを古くから愛する人の尊さを強く感じました。青果市場跡地にあるべきものは、新しく阿久根を作り変えるものではなく、阿久根という土地の唯一性を最大限引き出して感じられる機会としての役割であるべきだと今は確信しています。



未来へ繋ぐ展望台

街への安らぎ

地元民と旅行者が交流し、共に楽しむ場としての役割を果たす一方で、緊急時には避難所としても機能する場所を提案する。阿久根市の景観や活気は、地元民にとっては当たり前になっている。しかし、地元民と旅行者が単体で交流が少ない場合、街を五感で体験できる場所を見落としやすく、難しい。地元民と旅行者とのつながりをもっと特別なものになる場所ができないかと感じた。

そこで、即興演奏や施設内の寄せ書きなど、音楽やアートが人々を結びつけ、地域社会の絆を深めることで、平時から緊急時まで一貫してコミュニティの結束を促進できる。また、非常時には津波タワーとしての側面も持つ。この先起こるかもしれない地震発生時に、津波の到達が早い沿岸部にあるため、海岸近くに居る人々の緊急避難場所となる高台としても役目を果たすのではないかと考えた。

そこでこの施設は、地元の活性化と災害時の備えを同時に叶えるユニークなコンセプトとなった。地域社会が協力し合い、阿久根市の繁栄と安全が共存する可能性を秘めている。

引き寄せられる人

阿久根市の地元民と、訪れてくる旅行者、また港に釣りに来た人々や漁業関係者をメインターゲットとする。また、大地震などの災害時には高台から港町一面を見渡せる展望台によって、阿久根の重要な避難所にもなると予想する。海の街である阿久根市を理解し、地元民と旅行者が気楽に集える施設としての利用が生まれるのではないか。

体験できること

1.　楽器の即興演奏ができるスペース

ストリートピアノや港阿久根市ならではの「海のギター」であるトロ箱3弦ギターなど、楽器の即興演奏ができるスペースは、文化や個性を表現する場となり、音楽を通じて異なるバックグラウンドを持つ人々が交流する機会を提供する。

2.　施設内の寄せ書きスペース

施設内の寄せ書きスペースは、街での思い出を共有し合う場となり、旅行者が地元民と親交を深める手段として機能する。旅行者は阿久根市で体験したことや楽しかったことなどを書くことで、この街に来た自分を記録し残せるため、再びこの街のこの施設に寄ってみたいと思うかもしれない。

生まれる新しい出会い

地元民と旅行者とでは、その街で過ごす時間の違いから、その街で感じ、体験する価値は異なる。そこで地元民が求めている雨風が凌げる施設に、旅行者も五感で思い出が残せるようなコミュニティスペース設計をする。そうすることで、地方だというロケーションを言い訳にせず、地元民と旅行者との両者が交流し集いたくなる場所となり、この先の街の繋がりと循環を創ることができるのではないかと考える。

ストーリーのイメージ

楽器の即興演奏ができるスペース

施設内の寄せ書きスペース

関連するタネ

P.38

ネットでは聞けない、地元を聞ける

阿久根コミュニティの充足感

Connection : 話す / 巡る / 学ぶ

P.89

また会いに行きたくなる

小さなパン屋の大きな愛で結ばれた夫

Connection : 親しむ / 尋ねる / 待つ

海辺の記憶

今から15年前、海のほとりの小さな街の港近くに、新しい施設が建設された。そう街の方から聞いた場所は、向こうに見える島からの波がそっと岸辺に押し寄せ、港近くに佇むその施設は、人々の心を温かく包み込んでいる。それはまるでハーモニーが響き渡る場所、「あくねハーバー」と呼ばれていた。

しかしこの時、私はこれが、災害に対する支援策が結集されたもので、地元の人々は誇りに思っていることを深く知らなかった。新しい施設は海に面してそびえるようにそびえ立ち、その存在が地元民に安心感を与えていることを。

建物の前には、美しく彩られた花壇が広がり、施設の入り口には大きな看板が立っている。

「Akune Havor – 芸術に満ちた海辺の場」と書かれており、その文字通り、施設は音楽、アート、そして地元の美味しい食べ物でいっぱいだった。

施設の入り口に入ると、そこからは地元の新鮮な野菜や果物、手作りのお菓子が陳列された小さなマーケットが広がっていた。地元農家が収穫した健康的で美味しい食材が、訪れる人々に新鮮なエネルギーを提供していた。

施設内に入ると、そこには誰でも自由に演奏できるように置かれたストリートピアノやギターが目を引く。地元ならではの海の楽器であるトロ箱3弦ギターがあり、通りすがりの人々に心地よい響を提供していた。施設はコミュニティが集まり、即興や交流する場として機能していた。

ある日、施設の中庭で地元の若者たちが音楽を奏で、子供たちが笑顔で遊ぶ様子が、地元新聞に取り上げられたようだ。記事はあくねハーバーがコミュニティに与える影響を称賛し、施設はますます多くの人々で賑わうようになった。

施設内の一面の壁は、訪れる人々によって寄せ書きや絵が描かれていた。子供たちが笑顔で絵を描き、若者たちが夢や願いを綴っていた。ストリートピアノの即興への感想もたくさん書いてある。老若男女を問わず、誰でもが自由に表現できる場となっており、壁一面に広がるカラフルな寄せ書きは、施設のアートとコミュニティの一環となっていた。

また、施設内にはテーブルや椅子が配置され、くつろぎながら食事やおしゃべりが楽しめる休憩スペースが広がっていた。自販機もあり、さまざまな飲み物が手軽に楽しめるようになっていた。ここでの時間は、心地よい音楽と美味しい食べ物に囲まれた、穏やかなひとときとなっていた。

そして、あくねハーバーの最上階には、広々とした展望台があった。そこからは、青い海と広がる港の景色が一望でき、日の出や日没が美しい風景を演出していた。この展望台は、特に夜になると星空を楽しむ人たちで賑わい、ロマンチックでもあり、でもどこか落ち着くような、そんな雰囲気が広がっていた。

あくねハーバーは、港近くの小さな町に優しさと楽しさをもたらし、地元の人々にとって心地よい場所として、その存在感を機能させていると、この時は感じた。

1階に戻ると、「そこのお兄さん、今日はどこから来たんだい?」と声をかけられた。この阿久根ポートを運営されている老婦人の方だ。私の住んでいる都市や仕事のことなど、たわいもない話をした。なんだか少し阿久根を知れたような気がして和んだ。

すると別の老人がやってきた。老婦人の旦那様だろう。彼も私と少し話し、気さくな感じで、釣りのことなども教えてもらい、話は盛り上がった。そんな話の中で、老人はあることを話しだした。今から10年前に起きた地震の話だ。

突如として、この平和な港街で地震が起こった。住民たちは急な地震で地面は揺れ、住民同士で「これは心配だなあ」と話し合っていた。しかしこの時、建てられたばかりの施設が災害に対する新しい希望をもたらしてくれることになるとは誰もが知らなかった。

地震の後は、津波が港街に。しかし新しいその施設は高さがあったため、津波はその堅固な壁に阻まれ、街を守ることができた。あくねハーバーの建設者は、津波に備えるために様々な技術を駆使し、人々を守るための新しい手段を提供していたのだ。

港街の住民たちは、あくねハーバーの存在に感謝し、安堵の表情を浮かべた。津波が去り、街は不安から立ち直りつつあった。この出来事が、彼らの生活に刻まれた記憶となることを、街の人々はまだ知らなかった。

数週間後、港街ではあくねハーバーに関する祝賀イベントが催された。地元の住民たちが集まり、建設者たちに感謝の意を示すとともに、災害からの救済を祝った。

その日の夜、港近くの施設は色とりどりのイルミネーションで飾られ、喜びと安心感が溢れていた。しかし、その夜、老婦人が街の人々に驚くべき話を語り始めた。

彼女はこの施設が建設されるずっと前、遥か昔の出来事を思い出し、一人の若者との出会いを明かした。老婦人の話によれば、彼女は若者とともに海辺を歩いている最中、突然地震が起こり、間もなく堤防の辺りには津波が押し寄せてきた。しかし、若者は手を差し伸べ、彼女を近くの青果市場に連れて行ったという。その場所こそが、今建っている施設の位置だった。街の人々は老婦人の話に驚き、うなずきながら、彼女の言葉が真実であることを受け入れていった。施設ができる前から、この場所が街の人々を守ってきたのだ。新しい技術と共に、海に囲まれた彼らの生活を守り抜いてきた、海辺の記憶が。

この場所は、平常時は観光やコミュニティスペースとして機能し、人々の繋がりを創造していた。そのおかげで、災害が発生した際の困惑と人々の心の不安と恐怖を、平常時に行っていた人々と繋がれる安心感が避難民を包み、絶望に抗う希望をもたらしていたのだ。

話を最後まで聴いた時、この施設がなぜ「あくねハーバー」であるのかを、私は悟った。

観光場所という枠を超えて、信頼される「避難所」としても機能し、その存在が地元民に安心感を与えているのである。

漁村は施設を誇りに思い、未来に向けて希望に満ちた一歩を踏み出すことができているだろう。施設はただの建物ではなく、地元民と旅人たちの過去と未来を結ぶ架け橋となり、彼らに安心と希望をもたらしていることを悟った。

放浪者ポンタの手記「阿久根見聞録」第2045号 ー海辺の記憶ー

あとがき

この施設のコンセプトは、地元民と旅行者が交流し、共に楽しむ場としての役割を果たす一方で、緊急時には避難所としても機能するというユニークなアプローチです。即興演奏で音楽を通じて異なる背景の人々が交流したり、寄せ書きスペースによって施設に命が吹き込まれるなど、音楽やアートが人々を結びつけ、地域社会の絆を深めることで、平時から緊急時まで一貫して街が結束できるかもしれないと思いました。この施設が地元の人々と旅行者にとって特別な場所となり、繁栄と安全が共存する未来を築く一助となれば幸いです。

陸に上がった船の上で盛り上がれる

歴史の続きを船に乗せて

旧港に並ぶもう使われていない船。かつては多くの漁師と共に大海原を駆け、大量の魚を運び、人々の生活を支えていた船。しかし旧港に並ぶ多くの船は時代の移り変わりと共に古くなっていき、役目を終えたものも多い。

そういった使われていない船の再利用はできないかと考えた。この船を陸にあげ、そこを個室のスペースにし屋台、ホテル、グランピング施設、コワーキングスペース、サウナ、個室レストランとあげればキリがないが、そういったレンタルスペースという活用法が見えてくる。また、船が主体となっており、阿久根の景色にも馴染み今までにない魅力的な人の集まる場所になるのではないだろうか。役目を終えたと思っていた船たちもまだ利用価値があるとわかれば、実際に過去利用していた人たちも船も嬉しいのではないだろうか。そんな阿久根の歴史をつなげる魅力的なものが多く転がっていた。

引き寄せられる人

船を使わなくなった阿久根市民とレンタルスペースを利用したいと考える旅行者がメインターゲットだ。旧港に置きっぱなしにしてしまい捨てるに捨てられなくなった船を新しい形にすることで船を捨てたい人と街と旅行者にとって利用しやすいものになると考えられる。

体験できること

1. 宿泊施設

ホテルやグランピング施設にすることで、船が一つの部屋になる。布団を大漁旗柄にしてみても船らしさが強くなるだろう。

2. お食事処

調理道具のコストが少しかかってしまうが、屋台の形にすることで様々な料理にも対応できるようになると考えられる。

3. コワーキングスペース

静かな場所で仕事をしたいという人はIT業界に増えている傾向があり、阿久根という静かな街はそういった人たちにうってつけの場所であると考えられる。コワーキングを利用する人たちは阿久根にも定住してもらいやすいのではないだろうかと考えられる。

4. 温泉・サウナ

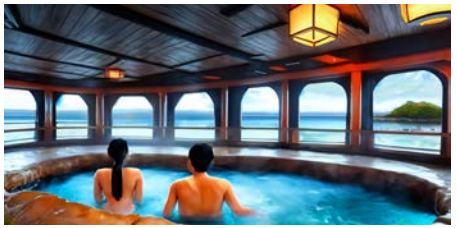
新しい形の個室温泉やサウナにすることができると考えられる。個室風呂の利用をしたいと考えている人は多くいるため、大浴場に次いで必要なものであると考えられる。

5. レンタルスペース

パーティや落ち着いたひと時を過ごす時間、魚を捌く場所や料理をする場所といったように様々なスペースとしての活用方法があると考えられる。

ストーリーのイメージ

船をお食事処に（Product by AI）



船を個室温泉に（Product by AI）

生まれる新しい出会い

船を部屋にすることで個室になり、人と話さなくなるのではないかという懸念があるが、大きい船を再利用する際には地域の人が集まって憩いの場になるようなお食事処にすることもでき、コワーキングスペースなどにすれば船で仕事をするという新しい気持ちにより今までにないような事業が生まれるかもしれない。個室だからこそ打ち合わせがしやすくなるかもしれない。そういった新しい風を吹かすことができるとともに、歴史と景観を蔑ろにするわけでもないということが船を再利用した個室にするという魅力なのではないだろうかと考えられる。

Episode 10

私が過ごす新しい阿久根

今日あくねに来た大きな理由は一つ「大型商業施設」がオープンしたためである。この商業施設は普段見かけるようなものとは違い、阿久根市で昔から使われていたが時間が立つと共に使われなくなった船を再利用し、新たにお店にしたものである。

「船のお店が並んでいる。」

そう言って彼女は車から降りて、早くお店に入りたいとばかりにはしゃいでいる。船がお店になっているため足場が凸凹しており、少し心配に思いながら私も一緒に商業施設に足を踏み入れた。温泉に宿泊施設、レストランやお土産屋さん、シーグラスを使った体験施設など、行ってみたいところがたくさんある。この中でも最初に気になったのはシーグラスを使った体験施設だ。私は長野の海無し県から来たのでシーグラスとは何なのか知らなかった。彼女に聞いてみると、捨てられた瓶やガラスが割れて、海の流れによって角が取れ綺麗になったものがシーグラスと呼ばれるそうだ。体験施設の中に入ってみると、色とりどりのシーグラスが並んでいた。イメージとしてはガラスだから透明なものしかないのかなと思っていたら、水色や茶色、赤や緑と想像を超える色が広がっていた。そして、このシーグラスを使ってどんな体験をするのかというと、シーグラスを並べてくっつけて自分だけの色とりどりの絵にするというものである。近くの砂浜で一つシーグラスを拾い、施設に戻ってきて、そこにあるものも使い絵を完成させた。そう言って完成した絵を見た。この作品のコンセプトは「あくねジュース」である。海と緑に囲まれた阿久根を見てこの作品を作り上げたのだと思う。この日、この時、この場所にしかできない作品だったと思いながら次の場所へ向かう。

次は少しお腹が空いてきたのでご飯屋さんへ。ここは少し大きな船を使った広いお店だ。厨房は船の中で船のデッキが私たちお客さんの席である。今の夏の暑い時期には海風を感じながらご飯を食べることができるのはとても嬉しい。ここで食べられるものは海鮮丼で、今朝採れたての新鮮な魚を使っているそうだ。

「あっ。」

ご飯を食べていると彼女が刺身の一つを落としてしまった。そしたらそれを狙っていたのか耳の切れたねこがすぐさま刺身を食べてしまった。この辺りはねこが多いと思っていたが、船にまで上がり込んでしまっていたとは。しかし、なぜ耳が切れているのか、他に怪我はしていないのに少しだけ不思議に思った。彼女が簡単に説明してくれたが、耳が切れている猫は不妊手術を受けた目印で、このあたりにねこが増えすぎないようにと手術を受けており、「さくらねこ」と呼ばれている。このねこたちがたくさんいる猫カフェなどもこの船の商業施設の新しい店舗になれば嬉しいなと思った。小さい船ならば個室になるし、ゆっくり猫と戯れたい人たちにとっても楽しい場所になるかもしれないと思った。

お腹もいっぱいになったところで今回の目的でもある温泉に向かった。船が温泉になっているとはどういうことなのかと、とても興味が湧いていた。行ってみるとここは個室風呂になっており、彼女とも一緒に温泉に入ることができるようになっていた。阿久根では数十メートル掘ればどこからでも温泉が噴き出てくるということもあり、阿久根ならではの塩湯を堪能することができた。

ちょうど夕日の時間とかぶり、外湯から阿久根の景色を眺めた。オレンジ色に染まる空を見ながら船に乗ってのんびりすることは普段の忙しい時間を忘れられる心休まるひとときになった。

そんなのんびりした時間を過ごしていると日も暮れ、予約していた船のホテルに向かう。船の中は改装されており、エアコンや水回りといった過ごしやすい環境が出来上がっていた。船の中とは思えない快適さでありつつ、船でしか味わうことのできない面白さを感じながら、就寝した。

窓から差し込む朝日を感じ目を覚ました。昨日見た夕日とはまた違い、1日の始まりを感じる力強い朝日を見て、久しぶりに目覚めの良い朝を迎えた。チェックアウトギリギリまでのんびりした後、最後にお土産屋に向かい、阿久根の特産品を買って、この商業施設を後にした。

とても良い1日だった。もう使われることはないと思われていた船がこんなにも魅力的な施設に生まれ変わり、多くの人々を楽しませることができるようになったことで、多くの船の止まっていた歴史がまた動き出したように感じる。このような船の再利用をもっと増やし、商業施設を大きくすることでこの場所はもっと発展していくのではないだろうか。そんな歴史の始まりを感じた素敵な旅行だった。

関連するタネ

P.64

塩湯に入り、サウナで整う

似ている二つの体験価値

Connection : 過ごす / 浸る

P.74

使われていない船をもう一度

船って個室になるよね

Connection : 守る / 集まる

あとがき

使われていない船を再利用した商業施設のイメージストーリーはいかがでしたか。海のない土地で育った私にとって、阿久根という海に囲まれた土地はとても魅力に感じ、海でしかできないことのイメージがたくさん湧いてきました。そんな憧れも混ざった私のやってみたいことを、もし彼女と一緒に行けたらと妄想を膨らませてこのストーリーを書き上げました。こうやってストーリーにしてみると実際に行ったような気持ちになり、本当にこのような施設ができないかなと期待もしてしまいます。拙い文章ですが、何か阿久根の新たな一歩のヒントになれれば嬉しい限りです。

阿久根の船上プラネタリウム

星明りを切り取って

阿久根の夜は、とても静かである。

阿久根における私たちの夕食の後の行動は「宿に帰る」であった。これは夜にできる行動の選択肢がほとんどないと感じたからである。

阿久根の夜は、とても静かで、明るい。

阿久根の夜空は無数の星が肉眼で観察できるほど非常に明るく、さらに月も大きく輝いている。これは阿久根に住む人にとっては日常であり、観光資源としては大きくアピールされていない。しかし、この満点の星空を見るという体験は、星の見えない都会で過ごしている人々にとっては貴重であり、魅力的であると感じた。

このように、阿久根にはよそ者とっては新鮮で貴重であるのに、住む人にとっては当たり前で無意識に過ごしてしまっている魅力があると感じた。

よって、ここでは夜空を阿久根らしく楽しむ体験として、船に乗って星空を楽しむ「阿久根の船上プラネタリウム」を提案する。

引き寄せられる人

船を使わなくなった阿久根市民とレンタルスペースを利用したいと考える旅行者がメインターゲットだ。旧港に置きっぱなしにしてしまい捨てるに捨てられなくなった船を新しい形にすることで船を捨てたい人と街と旅行者にとって利用しやすいものになると考えられる。

体験できること

＜船の上で星空観察＞

阿久根の星空を船上で観察できる。

深夜~早朝にかけて出港する船に乗船し、船上で星空を眺めることができる。阿久根の星空は星と月がとても明るく見えて、自然のプラネタリウムとしてとても魅力的である。また、船上で波に揺られながら波音を聞く等、自然に囲まれてリラックスすることができる。

＜月光浴＞

日光浴ならぬ月光浴という体験ができる。

阿久根の月はその明るさから、都会で見る月よりも何倍も大きく見える。その月の明かりを海の上で存分に浴びることができる。

月光浴には主にリラックス、不安やストレスの解消効果があるとされており、波の音にも同様の効果があることから船上での月光浴はヒーリング効果が高いと考えられる。

＜船上の交流＞

船の上では周囲を気にする必要のない開放的な空間で交流が生まれる。

「阿久根の船上プラネタリウム」の参加者同士は、その時間を船の上で一緒に過ごす。船という小さい空間に集まりながら、大きな海と夜空に囲まれた開放的な空間では、他ではできない交流体験が生まれる。

生まれる新しい出会い

・旅行者と阿久根の出会い

阿久根にはネットで調べても出てこないような地元民しか知らない魅力が沢山ある。これらは実際に地元民と会話することで知ることができる。船に乗り合わせた地元民や船長と会話することで、観光客は阿久根のさらなる魅力や地元民そのものの暖かさに触れることができる。

・旅行者同士の出会い

船に乗り合わせた旅行者同士の出会いがある。旅行者同士は船上での交流を通して阿久根の魅力と情報を共有することができる。

・地元民と旅行者の出会い

船に乗り合わせた地元民と旅行者の出会いがある。地元民は旅行者との交流を通して、旅行者(よそ者)がもつ阿久根への印象や、地元民が意識していなかった阿久根の魅力を知るきっかけとなる。

心の故郷、阿久根へ

Written by : りさ

「つかれた」

扉を閉めて靴を脱ぎながら、リビングに向かって独り言をつぶやいた。誰も返事なんてしないのに。

今日も朝から晩までエクセルと格闘してきた。繁忙期の今は毎日が死闘だ。パソコンと向き合って、ひたすら指と頭だけを酷使して、画面上の数字を倒しての繰り返し。

最後に人間らしいことをしたのはいつだろう。

就職で上京してから、会社と家を行き来した記憶しかない。休みの日だって、疲れた反動で寝て終わるか、最寄り駅から数駅先の駅ビルで買い物をする程度だ。家に帰れば適当にコンビニ弁当を食べて、風呂に入って、あとはスマホを見て寝るだけ。いつも通り友達のSNSをチェックしていたところ、一つの写真が目に入った。

「…綺麗」

星空の写真だった。同じく就職で上京した友達が投稿したものだった。写真に添えられた文章は「とにかく星が綺麗だった！#阿久根」

「阿久根、ってどこだ？」

その写真に一目惚れした私は、阿久根市は鹿児島県にあること、そしてそこには船の上で星空が見れる「船上プラネタリウム」があることを知った。

「次の休み、思い切って行ってみよう」

勢いそのままに、私は鹿児島への航空券と船上プラネタリウムの予約をした。

待ちに待った休みの日。鹿児島空港へ飛行機で移動した後、バスに乗って阿久根駅にやってきた。午後22時、「船上プラネタリウム」の集合場所である「あくねハーバー」には私を含め4名が集まっていた。どうやらこの4名で同じ船に乗って沖に向かうらしい。船に乗り込んだ際、ふと空を見上げると既に無数の星が瞬いていた。

「どちらからいらしたんですか？」

沖に向かう道中、ガイドさんから話しかけられた。自然とガイドさんと4名で会話が始まる。

「私は東京から」「私も東京から」「僕は兵庫から」「私は阿久根に住んでいて、リピーターなんです」

住んでいる場所の話から、徐々にそれぞれが今日参加するに至った理由やきっかけを話していく。

「…仕事に疲れちゃって」「わかります。私も同じ理由です。」

ポツリと言葉を漏らすと、同じく東京から来たという女性が大きく頷いてくれた。

誰もいないリビングと違って、ここは寄り添ってくれる人がいる。なんだか急に泣きそうになり、グッとこらえた。

「結構リフレッシュ目的で来る人多いよ～！サウナみたいなもので何回も来たくなっちゃうんだよね！」「僕はSNSの写真がすごくきれいで見惚れてしまって。今日撮れるかな？」「今日は月も綺麗だし、雲も少ないから良いのが撮れそうだよ。ほら！」

ガイドさんが指をさした先には、満天の星空といつもよりひとまわりもふたまわりも大きく見える月が輝いていた。

4人揃って思わず「わぁ～」と感嘆の声が出る。この瞬間は写真を撮ることすら忘れてしまっていた。それぐらい目の前の景色に見惚れていた。星座の名前なんて一つもわからないけれど、ただただ、綺麗だった。

「ここで止まります。波の音を聞きながら天然のプラネタリウムを楽しんでください。」

波の音と星の瞬きしかない世界。私は空に向かってカメラを構えた。シャッターボタンを押せば、大きなシャッター音が海の上を響き渡っていく。さっきまで盛り上がっていた会話も、今はみんな波の音に耳を澄ましていた。

「そろそろ、戻りましょうか」

ハッと気付いたときには随分と時間が経っていた。こんなに何も考えず頭を空っぽにしたのは初めてかもしれない。なんだか生まれ変わったような、そんな初めての体験だった。他の3人も心なしかスッキリした顔をしている。帰りの会話は行きより更に賑やかだった。今日の船上プラネタリウムに限らず、阿久根でどんな場所に行ったか、どんなものを食べたかをお互いに振り返りながら話していく。「あくねハーバー」に戻ったころには、なんだか連帯感のようなものが生まれていたように感じる。

「また、どこかで！」

別れ際、誰かがそんな言葉を口にした。こうして初めての阿久根、初めての船上プラネタリウムは幕を閉じたのである。

あれから、あの時の星空の写真を何度も見返している。

今日、私はまた阿久根に向かっている。初めて訪れたあの日と同じく、船上プラネタリウムに参加するためだ。ただ、あの時と違って他の目的もある。

温泉に、海鮮料理に、マリンアクティビティ…あの日同じ船に乗っていたみんなから勧めてもらったスポットを巡る旅だ。こうして、私は何度もあの星空と新しい阿久根の体験に出会うため、船上プラネタリウムへと足を運ぶようになった。

初めて阿久根の星空を見たとき、確実に、阿久根が私の心の故郷になったのだ。

関連するタネ

P.49

静かに輝く

自然の輝きを楽しめる夜

Connection : 親しむ / 過ごす

P.42

地元民と旅行者で、「見え方」が違う

みな、たかぜ、しったか（馬蹄螺貝）

Connection : 見る / 学ぶ

あとがき

実は、私は阿久根で星空をあまり見ることができていません。夕食から宿泊施設まで戻る道ですこし眺めたぐらいです。それでも星が多くてきれいだな～と満足していたのですが、後から学生さんたちに「朝釣りに行ったら星が本当にきれいで！」と力説され、もっとしっかり星空を見る為の時間を作れば良かった！！と後悔しています。そこで考えたのがこの「阿久根の船上プラネタリウム」です。船に揺られながら月明かりの中星を眺める…と自分が想像し得る最高のリラックス空間を阿久根で体験出来たら、阿久根なしでは生きられなくなりそうです。

観光者としての思い出話

なっしい

このデザインリサーチは私にとって、単なる旅行以上の宝物となりました。
阿久根市という新しい環境での調査は葛藤そのものであり、出会った人々や文化との交流は、都心らしさと地方らしさといった指向性の矛盾を知り、その中で私は今まで以上に葛藤できるようになりました。
これまでにないこの調査は、街の知識だけでなく、今は無き選択肢を考える柔軟な創造性を鍛えられました。 地元の人々と会話をし、驚いたり共感をしたり、カニを捕まえたりした瞬間は、五感で体験をしながら、不確実な社会と向き合えるきっかけでした。
このリサーチが私にもたらしたものは、ただ目的地へ直行する物理的な移動だけでなく、心の広がりや深まりであり、今後も物事に対して、新たな意味を見出そうと進み続け、命を吹き込める人になりたいと感じています。

しゅがー

阿久根市を訪れて、一つの地域にこんなにも観光地や魅力が詰まっていることにとても感動しました。 最近 周りの人が私の地元である香川県に訪れてくれます。 ですが、同じ市内で観光施設を紹介すると1日も持たないのです。 阿久根市では1週間も楽しめるのに。 多くの観光資源があっても、それらを地域の人が知っていないと共有できないことを痛感しました。
今まで何気なく見ていた空も海も、見る場所や見るときの背景・想いが変われば全く見え方が変わってくることも新しい発見でした。
日本にはたくさんの地域がありますが、どれも似ているようで全く似ていない、それぞれを大切に守っていかなければいけないということを学びました。 どこにいったって同じなわけがないし、その地域の代わりなんてどこにもないんですね。

あかちゃん

旅をして、ここまで地元の方とお話ししたのは初めてだなと感じています。 もちろん研究という目的があったこともありますが、それ以上に阿久根の方は優しいし、話が楽しいし、話したくなる人たちで溢れているなと思いました。 そしてそんな皆さんが嬉しそうに阿久根のことを話していて、本当に阿久根は愛されているんだな〜と感じました。
阿久根から帰ってきて、改めて写真を見返すと枚数はとても多いし、みんないい笑顔で、本当に楽しいー!というのが写真からでもわかる。 特に阿久根の夕日。 夕日で感動したのは初めてです(1人だったら泣いていた)。 嫌なことも忘れさせてくれるし景色、周りの人の優さが心地よくて、本当に感動しかない旅だったと改めて思います。 こんなに幸せいっぱいで、ご飯も美味しくてお腹もいっぱいになる阿久根が本当に大好きです!

まいまい

阿久根は、些細なよろこびを肯定してくれる街でした。 そして暮らしのよろこびが、自然に増えてゆく場所でした。 阿久根で、私は「こんなに何気ないことで、喜んでいいんだなあ、喜べるんだなあ」と、生きるハードルやたのしみを許されたような気持ちになりました。 ふらりと見た海がこんなに綺麗だとか、空をただ座って見ているだけで泣いてもいいんだなあとか、その辺のカニに心が躍ったりとか、ただあら汁が美味しすぎるとか。 生きているだけで、こんなに色んなことで感動していいのだと、阿久根で初めて気がつきました。 更にこの気づきが、住まいに帰ってきてからも続くことに、また驚きました。 実家に帰宅後、夕日を見るために異常に急いでしまい、当たり前によろこんでいたものが、いかに何気ないことだったのかを実感しました。 だから何度も行きたくなるし、観光地として着飾るのではない、暮らしを豊かにすることで魅力の増す街だと、私は想います。

もっちー

朝釣りをしていると編集ソフトで加工しているかのような美しい空模様と後ろにはイルカの群れが。 夜に車から降りると、目を疑うような多くの星と共に流星が輝く夜空が広がっていました。 当たり前かのように過ごす地元の方々を横目に、道に寝そべってあの空を見上げた時の感覚は私にとっては一生忘れることができない思い出です。 美しい風景の次に印象的なのは、人の良さです。 大人の親切さはもちろんのこと、車を運転中、小学生に道を譲ると、振り返り私の目を見て手を揃え深々と礼をしてきた姿に感動して涙が出そうになりました。「何にも代えられない、その土地にいることを感じられる」という価値に何度も気付かされる貴重な旅でした。 阿久根市での滞在の日々は、これまでの価値観を見直させられたかけがえのないものになりました。 また阿久根に行きたいです。

めい

観光とは違う過ごし方で最大限楽しまさせていただきました。 本当にありがとうございます。 常にアンテナを張ってアイディアの種となるものを考えていると、頭がショートしますね。 ですが、自分の五感を最大限に使い、出会ったものを疎かにすることなく向き合うことにより、阿久根に踏み込んだ外部者として新しい視点で見ることができたと思います。 阿久根から離れ、試筆作業をしている今、阿久根での思い出を頭の中でスライドショーさせています。 その中でも特に多いのは、開放感のある空と海の景色。 朝も昼も夕方も、そして夜も。 すべての時間帯で堪能させて頂きました。 思い出すと心がスッと軽くなる、モヤモヤを消し去ってくれる、素晴らしい力をもった景色です。 阿久根では色褪せても美しい情景と自分だけの宝物にしたい感動をいただきました。 私は阿久根が大好きです。

観光者としての思い出話

ゆりゆり

阿久根にいた時間は、とにかく海を堪能した日々でした。阿久根で見る海は全く邪魔するものがなく、自然のままを存分に感じられる印象を持ちました。私自身、広島出身で海に近い場所に暮らしていたので海は身近な存在でしたが、こんなにもぼーっと見ていられて癒される景色は初めてでした。また、阿久根市民の方々に市の魅力を聞くと必ず返答された「夕日」も、毎日の変化を見るのが楽しかったです。普段の生活では、空を眺めることはほとんどありませんが、この旅を通して身近な自然と向き合う時間を楽しむ発見ができたことに加え、心のリフレッシュにもなりました。旅中はハードスケジュールではありましたが、阿久根の魅力からたくさん疲れを癒してもらいましたね。そんな素敵な景色が見られる阿久根を知らないなんて勿体無い！その魅力に気づいて共有できる人がもっと増えると嬉しいです。

しおしー

阿久根市という壮大な自然の前で巻き起こる偶然の嵐。何度もその偶然を逃してしまい、悔しい思いをしました。その偶然と向き合うことができればもっと阿久根を知ることができたのではないだろうかと。その分偶然と向き合うことができたものは確実に必然に変わり、感動のある必然に変わりました。きっとその偶然がなければこの感動はなかったと思うほどでした。
それにしても阿久根にいる時間の間に偶然が起こりすぎではないだろうか？と不思議に思ったが、きっと素敵な人と素敵な場所が溢れているからだろうと感じました。
旅行者としてここにきたわけではないからこそ気持ちの変化に気づくことができたと思います。人生の変化を感じた、大好きになったこの阿久根のこれからの歴史をもっと知りたいと思いました。またこのメンバーで訪れ、偶然を楽しみたいです！

ゆーな

生まれてからずっと同じ場所で過ごしていた自分にとっては、阿久根で過ごした毎日が刺激的な日々でした。いつも旅行に行くと、事前に調べてピックアップし、計画立ててその場所に行きただ楽しむことがテンプレートでした。しかし阿久根の滞在期間中は、地元の方と話したり、目的なく行き当たりばったり歩いたりして、「何にもとらわれない観光」というものを体験しました。そのような体験をしていくうちに、自分だけの地図を作っているような気分になり、より印象に残るものになりました。阿久根に行ったことをきっかけに、自分が持っていた狭い価値観が広げられ、新しい発見をするのが楽しいと感じました。
今も時々阿久根で撮影した写真を見返しますが、その時体験した日々が鮮明に甦ります。今後は、行けていない春・冬に行って、また阿久根での思い出を増やしたいです。

きりは

〈つけあげ〉がとにかく美味しかった！！！！ 鹿児島空港についてから、阿久根市にいる間は毎日なんらかの練り物を食べていました。関東と鹿児島で同じ名前なのに全く異なる味や形、食感、色などがあり、興味津々です。初のスーパーAZで「かまぼこ・ちくわ」の看板を見た時は、るんるん気分でそのコーナーへ。冷蔵庫いっぱいに練り物が並んでいたのはパラダイス。つけあげはもちろん、燻製かまぼこというを試しに買ってみるとしっかりと燻製感があるのにクセがなくお気に入りになってしまった。会社ごとに多種多様なつけあげがあり、食べ比べができなかったのが残念で仕方ない！
つけあげは家庭で作られることがあり、それぞれ家庭の味があったと地元の方からお話を伺いました。家でつくると揚げたそばから、1コ、2コと無くなり、いつのまにか家族が集まっているそう。そんな素敵な文化を今後も続けて欲しいし、私も継承したいです。

りさ

社会人になって初めての出張が、大阪でも札幌でもなく阿久根でした。今回棚ぼた的に参加させて頂くことになった身でありながら、上平研究室の皆さんにも阿久根の皆さんにも大変良くしていただき、とにかく楽しく、沢山の気付きと学びのある時間を過ごすことができました。転勤族で地元という存在がない私にとっては、阿久根の皆さんの阿久根愛がとても、とても、眩しかったです。
蛍光灯が照りつける都会でモニターとにらめっこしながら過ごす日々の中で、夕日の儚さ・ポツンと立つ街頭の薄明かり・目の前の人と交わす何気ない会話を体験できたのはとにかく懐かしく、人間らしく、あたたかさを感じ、心の帰る場所としてまた訪れたくなりました。これは、阿久根愛なのかもしれません。

かみひら

幼なじみ達と〈華の50歳組〉で大川小のグラウンドを走って、故郷でこれほどの経験はもうないだろうと思っていたら、その1年後に自分が勤める大学で担当する学生たちといっしょに阿久根を調査するという、なんとも不思議な縁をいただきました。久しぶりに市内を探索してみて、よく知っているはずなのに「あれ、阿久根ってこんな素晴らしい町だったっけ？」と何度も独り言を言って、同行者の新井田さんと水上くんに「何回目ですか！」と笑われたりする程度には新鮮な驚きの連続だったように思います。まっさらな空き地を題材に学生たちが一生懸命描いた提案には、旅行者だけでなく、阿久根市民のみなさんと語りあい、楽しい時間を共有したいという願望が強く反映されていました。旅行者は、市民と交流することを強く求めているんだと思います。こうした夢が現実になるような楽しい場ができることを期待しています。

専修大学上平研究室

阿久根らしさを活かした
観光拠点のためのデザインリサーチ

2024年1月19日